

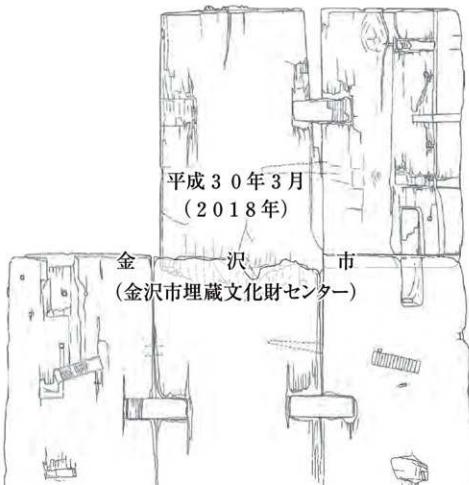
石川県 金沢市

金沢城下町遺跡(兼六元町7番地点)

— 準用河川源太郎川雨水貯留施設整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



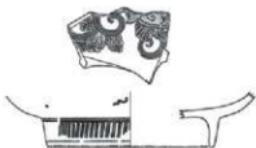
平成30年3月
(2018年)



石川県 金沢市

金沢城下町遺跡(兼六元町7番地点)

— 準用河川源太郎川雨水貯留施設整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



平成30年3月
(2018年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)



金沢城下町遺跡（兼六園7番地点）調査区全景〔南から撮影〕



鍋島色絵皿片（1-①南区 SX01出土 第30図13）



舟底板（1-①中区 SE03井戸枠に転用 第46図・第47図）

例　言

1. 本書は、石川県金沢市兼六元町7番15号に所在する金沢城下町遺跡（兼六元町7番地点）の発掘調査報告書である。
2. 金沢城下町遺跡（兼六元町7番地点）は、金沢市土木局内水整備課による準用河川源太郎川雨水貯留施設整備工事に伴い、平成23年度に金沢市が発掘調査を実施したものである。
3. 発掘調査の期間、面積は次のとおりである。
期間：平成23年11月12日～平成24年2月9日　調査面積：723m²
4. 発掘調査は、金沢市埋蔵文化財調査委員会（当時：委員長 橋本澄夫氏、谷内尾晋司氏、垣田修児氏、横山方子氏）の指導の下で、前田雪恵（当時：文化財保護課主任主事）が担当した。
5. 本書の編集・執筆は、前田の補佐を受け、新出敬子（文化財保護課主査）・庄田知充（同）・景山和也（同）が担当し、文責は目次及び報文中に記した。写真撮影は遺物を景山が、遺構を前田が行い、航空写真を日本海航測（株）が行った。
6. 本発掘調査・整理作業にあたり、下記の機関・個人からご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を申し上げる（50音順・敬称略）。
金沢市立味噌藏町小学校（現：金沢市立兼六小学校）、金沢市土木局内水整備課、（株）リクケン 小西昌志（金沢市立玉川図書館近世史料館）、滝川重徳（石川県金沢城調査研究所）、廣瀬直樹（水見市教育委員会）、松井哲洋（閔宿城博物館）
7. 屋内整理および製図は、次の方々に協力していただいた（50音順・敬称略）。
井川明子、蟹ヤエ子、境田早苗、谷森真利、寺西悦子、土橋裕美、供田奈津子、畠尾ゆか
8. 本書の遺構図の指示は以下のとおりである。
 - (1) 遺構図の方位は全て座標北である。座標は世界測地系に基づく国土座標第VII系（測地成果2000）に準拠している。
 - (2) 各図の縮尺についてでは原則としてスケールを付し、表題末にも示している。
 - (3) 土層の色調は小山正忠・竹原秀雄2006『新版標準土色帳』（日本色研究事業（株））による。
 - (4) 遺構図の水平基準は海拔高で、単位はメートル（m）で記した。
 - (5) 遺構名は、SK：土坑、SE：井戸、SD：溝、P：小穴、SX：その他の遺構などの略号を用いた。
9. 本書の遺物の記述には、下記の分類編年案による時期設定や分類を引用した。
土師器皿の記述には滝川重徳氏による分類（滝川2002）を引用した。陶磁器の年代観のうち、堀内秀樹氏等による陶磁器編年案（堀内・成瀬2001）を引用した箇所については東大編年と略称した。瀬戸陶磁器については藤澤良祐氏による案（藤澤1998）を引用した。越前陶器については木村孝一郎氏による案（木村2004）を引用した。
10. 本書に収録した遺物は、全て金沢市教育委員会が一括して保管している。

凡 例

遺物について

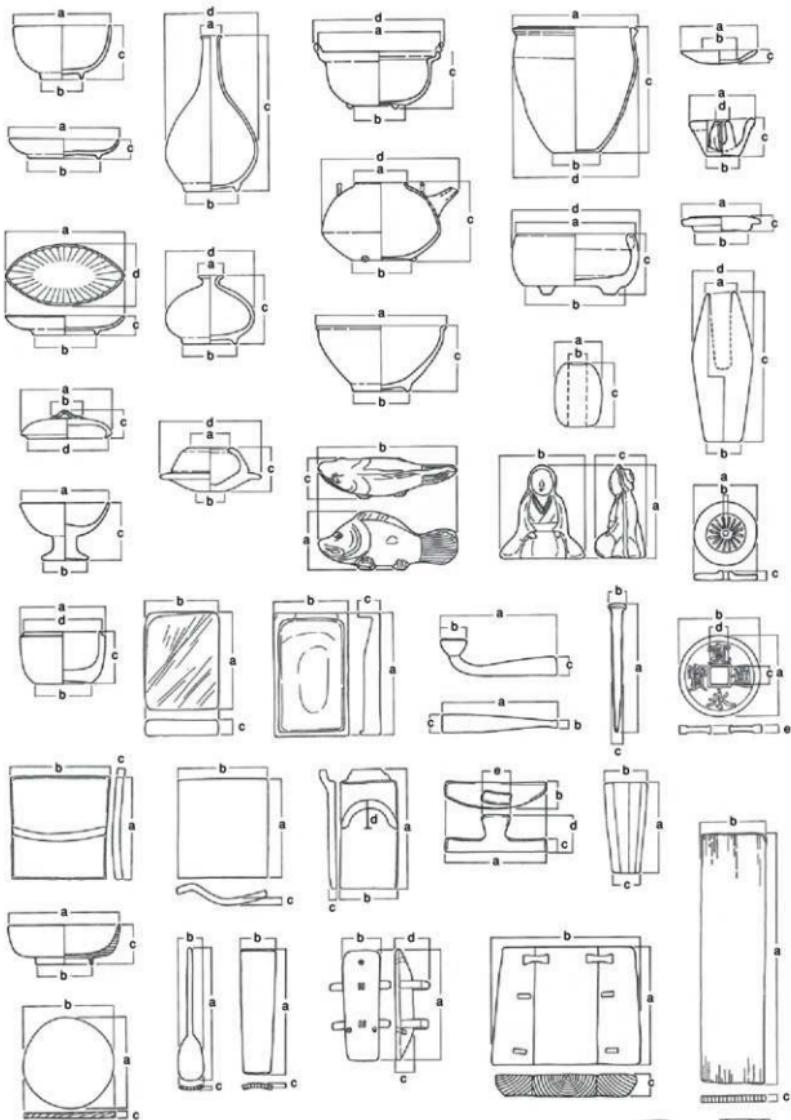
1. 遺物図の縮尺は、次のとおりである。図版にはスケールを付し、表題末にも示している。
掲載方法は遺構ごととしたが、金属製品と土人形は少量のため一括して種類ごとに掲載してある。
- 1/2 土人形
- 1/3 陶磁器、土器、木製品、貝製品、金属製品、錢貨
- 1/4 石製品
- 1/6 瓦、木製品（舟底板のみ1/8）
2. 腰瓦にみられる変色については破線で示した。
3. 土人形には土製品以外に陶器製も掲載してある。
4. 遺物実測図中の記号は次のとおりである。

青釉		鉄釉（磁器のみ）	
瑠璃釉		釉薬境	胎土目・砂目
灯芯油痕	-----	漆縫	燒縫

遺物観察表について

1. 「番号」欄には、図版ごとに振り直した番号を付けている。
2. 「器種」欄には、磁器、陶器、土器などの材質も併記している。
3. 「法量」は、a·b·c·dの4欄に分けて記入した。計測部位は凡例図のとおりである。口径は最大径、底径は接地部径である。計測値のうち()数字について、陶磁器では復元数値に不安の残るもの、その他の遺物では現存値を示すのに用いた。
4. 「遺存」欄には、径を復元する際に利用した部位と遺存度を記した。
5. 「産地」欄には、器形や胎土等をもとに新出か推定した産地を記してある。
6. 「実測番号」欄は、実測者の通し番号で、遺物・実測図に付している番号と一致する。
7. 「備考」欄の高台内圓線Aは高台付け根、同Bは高台内中央付近に圓線が描かれるものを指す。
8. 紅皿に関しては、白磁で型打ち成形し外面を貝殻に似せたものや、外面に小町紅と銘が描かれるなど紅皿と特定できるものだけ紅皿と標記し、それ以外のものは小坏としてある。
9. 碗は、概ね口径が16cm以上のものは鉢とし、6.6cm（二寸）以下のものは小坏とした。また鉢や小坏にあてはまらないもので、口縁部が輪花、稜花になるもの、平面形が多角形になるもの、断面逆台形のそば猪口形のものは猪口とした。

凡例圖



木取
柱目材

项目材

追憶目錄

板目材

卷之三

金沢城下町遺跡（兼六元町7番地点） 目次

第1章 調査に至る経緯と調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 発掘調査の概要	1
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 遺跡の位置と地理的環境	4
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	（以上、新出・景山） 5
第3章 検出遺構	7
第1節 概要	7
第2節 土坑（SK）	7
第3節 井戸（SE）	13
第4節 小穴（P）	13
第5節 溝（SD）	14
第6節 その他の遺構（SX）	（以上、景山） 14
第4章 出土遺物	23
第1節 概要	23
第2節 土坑（SK）出土遺物	23
第3節 井戸（SE）出土遺物	30
第4節 小穴（P）出土遺物	31
第5節 溝（SD）出土遺物	32
第6節 その他の遺構（SX）出土遺物	32
第7節 整地層・包含層・擾乱出土遺物	（以上、新出） 34
第5章 総括	（新出・庄田・景山） 81

測量図版

写真図版

第1章 調査に至る経緯と調査の概要

第1節 調査に至る経緯と経過

金沢城下町遺跡(兼六元町7番地点)は、平成23年度に金沢市立味噌蔵町小学校(当時。現:金沢市立兼六小学校)内で計画された準用河川源太郎川雨水貯留施設整備工事に伴い発掘調査を行った遺跡である。

平成22年(2010)、金沢市内水整備課から金沢市兼六元町地内の旧金沢市立味噌蔵町小学校(現金沢市立兼六小学校)グラウンド内で施工予定の雨水貯留施設設置工事について、事前の埋蔵文化財確認調査依頼が文化財保護課に提出された。これを受け同年7月15日に試掘調査を実施したところ、施工予定地において江戸時代に属する土坑及び遺物が確認された。当初、新発見の遺跡「兼六元町7番遺跡」として取り扱っていたが、調整中の平成23年(2011)4月1日より、当該範囲を含む金沢城懇構跡内側の範囲全体が「金沢城下町遺跡」として周知化されたことに伴い、遺跡名は「金沢城下町遺跡(兼六元町7番地点)」と改称された。

貯留施設の設置工事は地下深く掘削を行う必要があり、遺構を損壊することは明らかであった。施工予定地は開校中の味噌蔵町小学校グラウンド部分であり、小学校の運営に影響を及ぼすことが避けられないことから、工事主体の内水整備課、調査主体の文化財保護課、調査地となる味噌蔵町小学校の三者で度重なる協議及び調整を行った。その結果、学校行事が落ち着き、かつ工事着手前の平成23年11月～平成24年2月の期間を以て記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

平成23年10月6日付け発内第76号にて文化財保護法第94条に基づく発掘通知が内水整備課より提出され、同年10月11日付け取文保第561号にて石川県教育委員会あてに進達、同年10月12日付け教文第1894号にて石川県教育委員会より工事に先立って発掘調査等の埋蔵文化財保護措置が必要との通知があった。これを受け、同年11月7日付け発文保第101号にて文化財保護法第99条関係の報告書を石川県教育委員会あて提出し、同年11月12日に現地での発掘調査に着手した。調査対象面積は工事によって遺構が損壊する範囲、計723m²となった。

発掘調査事業費には内水整備課の前年度繰越金を充当することとなっていたため、当該年度内に発掘調査にあわせて本工事も終了させることが必須であり、降雪期の限られた期間での調査は困難なものとなつたが、各方面との調整の結果、ほぼ予定どおりの平成24年(2012)2月9日に現地での作業を終了した。調査中の平成23年12月27日には地元を対象とした遺跡見学会を実施し、金沢城下町遺跡の啓発にも努めている。除雪作業等、調査にかかる諸作業に多大なご協力をいただいた貯水施設施工業者(株)リクケンには、この場をお借りして深く感謝申し上げる。

出土遺物等の屋内整理作業は平成25年度から予算措置がなされ、以後継続して行い、平成29年度に発掘調査報告書を編集、刊行した。

第2節 発掘調査の概要

試掘調査の結果から、近世の遺構面が複層にわたり検出されることが予想され、降雪期ということも相まって調査の難航が懸念されていたが、平成23年11月12日に重機による表土掘削を開始して間もなく現れたのは、コンクリートの溝に小石を詰め、その上に煉瓦を数段築いた旧校舎の基礎であった。調査区を縦横に走るこの基礎を含む旧校舎の造成工事によって、遺跡の上層部分はすでに破壊されており、明確に遺構が確認できたのは結果として1面のみであった。



第1図 金沢城下町遺跡(兼六元町7番地点)の位置 [S=1/10,000]

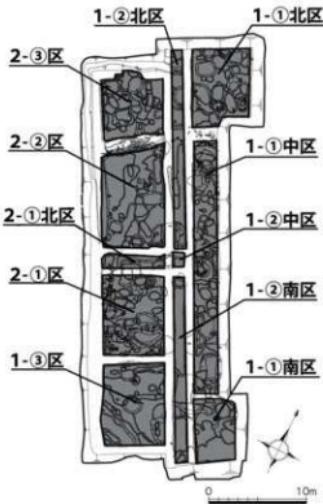


第2図 発掘調査区位置図 [S=1/1,500]

調査においては世界測地系2000に基づいた公共座標標(MK-WE座標系第Ⅷ系)に準拠して調査区内に10mメッシュグリッド杭を設定した。グリッド杭に西からA~D、北から1~6の順でB3、D5等の杭番号を設定して座標値の基準としている。当該年度末竣工という工事のスケジュールと調整の結果、調査期間前半は早期の着工が必要となる区域を優先して部分的に調査を完了させ、完了した区域について順次貯留施設設置工事に着手、調査期間の後半は工事と並行しての作業となった。これにより、航空測量は前半・後半の2回に分けて行うこととなつたが、工事は予定どおりの竣工を迎えていた。

調査区割は前半調査にかかる区域=航空測量1回目の対象区域を1区、後半調査にかかる区域=航空測量2回目の対象区域を2区と設定し、それぞれを旧校舎の基礎と調査区の形状及び位置を基として、11区に細分して調査を実施している。

基本層序は現況のGLから約30cm程度が運動場造成盛土で(1・2)、その下に現運動場を整備した際の基盤面である礫を含む整地層がある(3)。その下に小石の混じる褐色砂質土が約20cm程度堆積しており(4)、この層より上が旧校舎建築時以降の造成層とみられる。その下には小石・焼土等を含む黄褐色粘砂質土が約50cmにわたり確認でき、質と締まりから3層に分けられる。これらが江戸時代以前の整地層及び包含層となる(5~7)。



第3図 金沢城下町遺跡(兼六元町7番地点)
調査区案内図 [S=1/500]

GL+20.3m	1-①南区東壁(基本層序)
1	1. 10YR7/6明黄色褐色土 (運動場)
2	2. 10YR3/1黒褐色粘砂質土 (運動場整地土)
3	3. 10YR5/2灰黃褐色粘砂質土 〔漂浮入・液化物合存〕 (近代整地層)
4	4. 10YR4/4褐色粘砂質土 (小石混入)
5	5. 10YR5/3に小石・黃褐色粘砂質土 〔小石・焼土混入・液化物合存〕 (近世整地層)
6	6. 10YR5/4に小石・黃褐色粘砂質土 〔液化物合存〕 (近世整地層)
7	7. 10YR4/3に小石・黃褐色粘砂質土 〔小石混入〕 (近世整地層)
GL-1.0m	8. 7.5Y4/1灰色粘質土 (軟質 小石混入/地山)
8	9. 7.5Y7/2灰白色粘質土 (軟質 地山)
GL-2.0m	10. 10G6/1緑灰色粘質土 (軟質 地山)
9	
10	

第4図 基本層序 [S=1/500]

発掘調査日誌(抄)

平成23年(2011年)

- 11月12日 表土掘削(~11月21日まで)。
- 11月22日 屋外作業員作業開始。
- 11月28日 整地層掘削。遺構検出。
- 12月2日 遺構検出。遺構概略図作成。
- 12月5日 SK・SD・SE等掘削。
- 12月21日 グリッド杭設置。実測作業。
- 12月27日 地元遺跡見学会実施。

平成24年(2012年)

- 1月5日 除雪。遺構掘削。
- 1月6日 SE01等遺構掘削。作図作業。
- 1月10日 第1回航空測量実施。工事開始。
- 1月12日 SE02石積検出。
- 1月18日 包含層掘り下げ。遺構掘削。
- 2月8日 第2回航空測量実施。
- 2月9日 撤収作業。現地作業終了。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

金沢城下町遺跡は、金沢城を中心とし惣構跡に囲繞された約200haの範囲に広がる近世に属する遺跡である。

石川県は日本海に面した県で、東は富山県、西は福井県、南は岐阜県と接している。旧国名では北の能登国と南の加賀国からなる、南北に細長い県である。

金沢市は旧加賀国の北部、石川県の中央や南に位置する、面積468.64km²、人口約46万6千人を抱える石川県の県都である。江戸時代においては加賀藩前田氏の居城である金沢城の城下町として繁栄し、太平洋戦争時の戦災を免れた町並みは現在でも当時の姿をうかがわせている。旧市街地が古い都市構造を残すに対し、JR金沢駅以北の扇状地においては、かつての水田や耕作地帯から区画整理事業による新興住宅地に姿を変え、また県庁移転や北陸新幹線開通などの影響によってビジネス街が発展するなど、旧市街地とは対照的な姿をみせている。

金沢市の地形は、東方は森本丘陵および加越山地で、そこから北西方向に平野部が広がり、北東から南西方向に伸びる海岸線の日本海に面している。平野部は南東に連なる奈良岳・奥三方・大門山など海拔1,500mを超える山地に源を発して西流する浅野川と犀川によって三分され、浅野川以北が北部平野、浅野川と犀川の間が西部平野、犀川以南が南部平野である。北部平野は浅野川や森下川などにより形成された沖積平野で、粘性の強い地盤である。南部平野は白山に源を発する石川県最大の河川、手取川が形成した扇状地の北辺にあたり、砂質の強いシルト層の地質である。西部平野は犀川・浅野川の冲積地で、北部平野と南部平野の地質が混在している。

城下町及び旧市街は犀川と浅野川が最接近する付近に形成された小立野段丘一帯に立地しており、本遺跡はその東側の下位段丘上に位置する。加賀藩三代主前田利常の頃に大きく整備された金沢城とその城下町は、もと一向宗の拠点の一つであった金沢御堂(尾山御坊)とその寺内町につくられたもので、17世紀前半にはほぼその姿を整えている。犀川・浅野川と河岸段丘より成る地形を巧みに利用したものとなっており、段丘突端に築かれた金沢城を中心に、段丘崖部にはその高低差を利用して「惣構」と称される土居・堀で形成された遺構が、旧市街地を取り囲むように内、外2重に巡らされている。金沢市は、旧市街地の地下に存在する近世城下町の遺跡を埋蔵文化財保蔵地として一体的に保護するため、外惣構内側の範囲及び金沢城東側の家臣团屋敷地について平成23年(2011)に「金沢城下町遺跡」として周知化した。この範囲は国重要文化的景観「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」の市街地部分の範囲と一致している。

本遺跡は金沢市の中心部、兼六元町地内にある。金沢城の東約300m、浅野川の西約400mの距離で、ほぼ両者の中間に位置する。調査地は金沢市立兼六小学校(旧金沢市立味噌藏町小学校)のグラウンドで、金沢城をはじめ、兼六園、金沢21世紀美術館などの観光スポットが集結し賑わいをみせている。



第5図 石川県及び金沢市の位置

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

平成23年度に周知化された金沢城下町遺跡の範囲は、先述したとおり惣構の内部と金沢城東側の家臣団屋敷地である。周知を図るにあたって、この範囲に属する既存周知の遺跡については、中世以前のものについては変更せず、近世を主とする既存のものは「金沢城下町遺跡(【既存周知の遺跡名】地区)」、以降新発見の遺跡については「金沢城下町遺跡(【遺跡の存在する街区】地点)」と呼称を統一することとしている。以降、「地区」及び「地点」呼称のものは金沢城下町遺跡であることを示すものとしてご理解いただきたい。

周辺地域の最古の生活痕としては、金沢城石川門前土橋(a)および車橋調査区(b)の盛土層から旧石器時代後期の剥片石器がみつかっている。縄文時代の代表的な遺跡としては、縄文时代前期末～後期にかけての集落跡である笠舞A遺跡、晚期の鹿角製釣針が出土した笠舞B遺跡、犀川の第一段丘面に形成された後・晚期の集落跡と想定される犀川鉄橋遺跡などがある。

弥生時代の遺跡としては、前田氏(長種系)屋敷跡地区(2)がある。弥生時代後期後半から終末期の墳丘墓が検出され、中心部に1基、その周りに4基の木棺が検出されている。本町一丁目遺跡(25～28)からは終末期の集落跡が検出された。広坂遺跡(6)、高岡町地点(13・14)、醒ヶ井町遺跡(39)でも弥生時代後期～古墳時代前期の遺構がみつかっているほか、当遺跡においても古墳時代前期に属する溝が検出されている。古墳時代末の遺跡としては、高岡町地点があり、日本に伝来しなかったとされる半瓦当が出土したほか、奈良二彩や銅製帶金具が出土するなど特異な性格をもつ遺跡である。

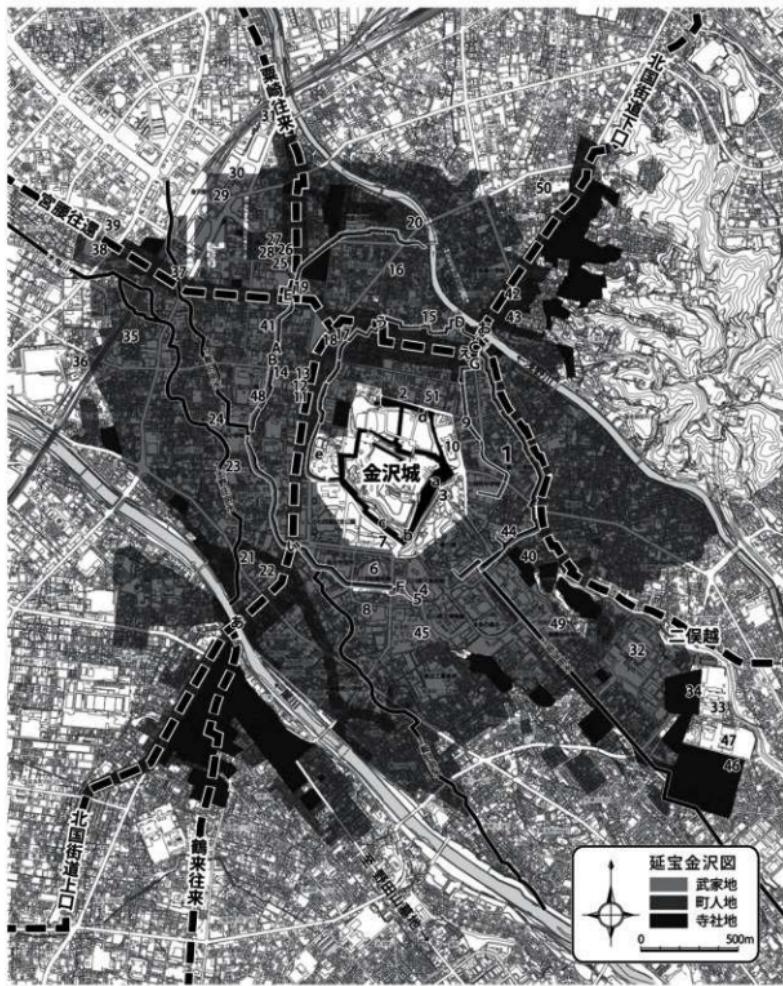
奈良・平安時代では、金沢21世紀美術館建設に伴い発掘調査を実施した広坂遺跡で藤原宮式軒平瓦と平城宮式軒瓦が出土し、古代寺院の存在が想定されている。前田氏(長種系)屋敷跡地区からは土坑や小穴が検出され、当該期の土器が出土している。

中世には高岡町地点で薬研堀が検出されたほか、彦三町一丁目15番地点(16)でも溝と遺物が報告されている。戦国時代になると現在の金沢城の場所に金沢御堂が建てられ周囲には寺内町があったと考えられているが、遺構が検出されていないため詳細は不明である。

近世では、金沢城跡が平成20年(2008)に国史跡に指定され、以後発掘調査成果を基に五十間長屋・橋爪門・河北門や玉泉院丸庭園などが復元・整備されている。金沢城下の範囲を規定する惣構跡は慶長4年(1599)に内惣構が造られ、次いで外惣構が整備されている。現在、土居は盛土のほとんどを消失し、堀も規模を縮小して水路として機能するのみだが、金沢市では惣構跡の確認調査を断続的に行っており、復元された線形は市指定史跡として保護され、東内惣構跡枯木橋北地点(C)、同南地点(G)、西内惣構跡主計町地点(D)、西外惣構跡升形地点(E)の復元整備が実施されている。

武家屋敷では、万石以上の家禄を有し、加賀藩における家老職ともいえる年寄職を出した八家と呼ばれる大家の屋敷地を含め、多くの発掘調査が実施されている。前田氏(長種系)屋敷跡地区では当該期の井戸、土坑のほか、それ以前の屋敷地、井戸などが確認された。長氏屋敷跡地区(48)では確認調査が行われ、17世紀前半の整地層が確認されている。本多氏の下屋敷である本多町三丁目地点(45)の調査では、屋敷地及び道路跡、辰巳用水の分流などが確認されている。広坂遺跡、丸の内7番地点(10)では、礎石建物、井戸、土解の基礎など上級武士の屋敷地及び道路跡が検出されている。

町家では、本町一丁目遺跡や昭和町遺跡(37)で間口3間規模のものが確認されており、墓地では経王寺遺跡(34)、久昌寺遺跡(31)、木ノ新保遺跡(29・30)などの調査がある。経王寺遺跡は寺旧地の調査で、境内内の墓地や火葬跡(灰塚)が確認された。城下縁辺に所在する久昌寺遺跡では木棺・甕棺を用いた土葬墓と藏骨器を用いた火葬墓が検出された。木ノ新保遺跡も城下縁辺に所在する。近世初期に始まる墓地で、早桶を使用した土葬墓が約20基発掘されている。



第6図 城下町復元図と調査された遺跡 [S=1/25,000]

1. 兼六元町7番地点 2. 前田氏(長種系)屋敷跡地区 3. 兼六園江戸町推定地地点 4~5. 本多氏屋敷跡地区 6~7. 広坂道路
 8. 下本多町地点 9. 兼六元町3番地点 10. 丸の内7番地点 11. 高岡町一ツ水溜跡地点 12. 高岡町3番地点 13~14. 高岡町地点
 15. 彦三町一丁目8番地点 16. 彦三町一丁目15番地点 17. 青草町地点 18. 下堤町地点 19. 安江町地点 20. 瓢箪町遺跡
 21. 片町二丁目遺跡(13番地点) 22. 片町二丁目遺跡(5番地点) 23. 長町遺跡 24. 穴水町遺跡 25~28. 本町一丁目遺跡
 29. 木ノ新保道路(7番丁地点) 30. 木ノ新保道路(安江町地点) 31. 久昌寺道路 32~33. 宝町道路 34. 経王寺道路
 35. 三社町遺跡 36. 元菊町道路 37. 昭和町道路 38. 長田町道路 39. 醒ヶ門町道路 40. 東兼六町5番地区 41. 玉川町道路
 42. 東山一丁目遺跡(3番地点) 43. 東山南水溜跡 44. 東兼六地点 45. 本多町三丁目地点 46. 小立野四丁目遺跡
 47. 小立野二ミノマチ道路 48. 長氏屋敷跡地区 49. 飛梅町3番地点 50. 森山二丁目遺跡 51. 大手町3番地点
 A.B. 西外懸構跡武藏町地点 C. 東内懸構跡枯木橋北地点 D. 西内懸構跡主計町地点 E. 西外懸構跡升形地點
 F. 西外懸構跡本多町三丁目地点 G. 東内懸構跡枯木橋南地點 ...以上、地区・地点呼称分は金沢城下町遺跡
 a. 金沢城跡(石川門前土輪) b. 金沢城跡(車橋) c. 金沢城跡(宮守堀) d. 金沢城跡(新丸) e. 金沢城跡(金谷出丸)
 あ. 犀川大橋 い. 香林坊橋 う. 袋町橋 え. 枯木橋 お. 浅野川大橋

第3章 検出遺構

第1節 概要

本遺跡では、井戸、土坑、石組の溝などを検出している。遺構に時期幅はあるものの、大半の遺構が江戸時代に属し、古墳時代前期のものが少量混在している。遺構の覆土は褐灰色～黒褐色で、炭化物や焼土、さまざまな大きさの礫を含むものが多く、上層に地山と似通った埋土が入り込み検出が困難なものもあった。遺構密度は高く、土坑の数は95基を数える。

調査区は東西約19m、南北約45mの範囲にわたり、面積は約723m²を測る。遺構検出面は海拔およそ18.5～19.2mで、南から北に向かって下がり、調査前のGLからは約1.9～1.1m下がる。東接する道路面の標高は約17.9～18.5mで、同じく北に向かって低くなる地形である。表土掘削時、旧校舎の煉瓦積み基礎が現われるなど、近代以降の開発により上面は損壊しているものと考えられる。

以下に検出した遺構の詳細について、遺構の種類順に報告する。各遺構の詳細なデータは第1表～第5表を参照していただきたい。遺物は各構成遺構ごとに掲載されているので確認しづらいが、ご容赦いただきたい。個別遺構の位置等については第7図を、また巻末の遺構平面図(第54図～第57図)に主要遺構番号を付したのでそちらを参照していただきたい。

第2節 土坑(SK)

遺構番号を付したもので97基確認している。うちSK18・SK45は調査後の検討で井戸であることが判明したため、それぞれSE03・SE04として別節で報告する。なお、そのほかの土坑の中にも井戸の可能性が想定されるものが複数あるが、それらについては文中及び遺構観察表の備考欄で示した。遺構の配置については各調査区(1-①中区、2-②区等)の単位で記載している。調査区割については第3図を参照していただきたい。

SK01(第8図 1-③)調査区の南東で検出した、長辺約2.7m、深さ約1.7mを測る土坑。東半は旧校舎基礎によって破壊されている。断面は逆台形を呈し、埋土は3層で炭化物を含んでいる。1段掘り下げたところに大疊の石列が確認されたため、井戸の可能性がある。17世紀末～18世紀代の遺物が出土している。

SK02(1-③)SK01に北接して検出された。平面楕円形を呈し、検出長軸約1.4m、短軸約1.3mを測る。深さは約0.2mと浅く、SK01の一部とも考えられる。

SK03(第12図 1-①南)南隅で検出。断面形は抉りが入り袋状を呈する。焼塩壺の出土があるものの、煉瓦片が多く混入しており、攪乱である可能性が高い。

SK04(1-①中)北東隅で検出。大半が調査区外のため、全容は明らかでない。検出長軸約1.4m、深さ約1.0mを測る。17世紀末～18世紀初頭の遺物が出土している。

SK05(1-①南)SK04の西側で検出した土坑で、大半は調査区外に延びており全容は不明である。深さ約0.1mと非常に浅い。

SK06(第8図 1-①中)調査区の南寄りで検出、東半は調査区外に延びる。検出長軸約2.6m、深さ約1.3mを測る大型の土坑で、断面は箱形を呈する。上層から17世紀後半～19世紀初頭の遺物が出土している。下層からは木製品が多く出土した。

SK07(1-①南)調査区北寄りで検出された平面楕円形を呈する土坑。深さ約0.3mと浅く、单層で、



第7図 金沢城下町遺跡(兼六元町7番地点)主要遺構案内図 [S=1/200]

埋土は炭化物と小石を多く含んでいた。土師器の小片が出土している。

SK08(第8図 1-①中)SK06の南に位置する、深さ約1.1mを測る小規模土坑である。17世紀末～18世紀前半代の陶磁器が多く出土した。

SK09(1-①中)調査区南寄りに位置し、西側上面は旧校舎基礎により損壊していた。1.7mまで掘削したが、底は未検出である。上層には蹕が多く、工事引き渡し後、施工中に海拔17.4mまで掘削した際に円形の掘方が確認された。18世紀中葉頃の井戸である可能性が高い。

SK10(1-①中)調査区東壁で検出された直径1.1mの円形の土坑で、深さは約0.4mを測る。下方に炭化物層が確認された。SK09を切る。18世紀代の遺物が出土している。

SK11(第8図 1-③)調査区北寄りで検出された長軸約1.4m、短軸約1.1mの楕円形の土坑で、深さは約0.7mを測る。19世紀代の遺物が出土しており、SD03を切る。下層の埋土が特徴的で、木質のものを埋設していた可能性がある。

SK12(1-③)調査区北西で検出された土坑で、SD03を切る。19世紀代の遺物の出土が認められるが、埋土等から攪乱である可能性もある。

SK13(1-③)調査区北東寄りで検出。長軸約0.8mの楕円形で、深さ約0.1mと浅い。出土遺物はない。

SK14(第8図 1-③)SK13の東側で検出。東半は旧校舎の基礎により損壊している。検出長軸約1.4m、深さ約0.3mを測り、断面形は皿形を呈する。埋土は複層で、炭化物を含んでいる。

SK15(第12図 1-①南)SX02の北側で検出した土坑で、褐色砂質土の単層である。深さ約0.4mを測る。

SK16(第8図 1-①南-1-②南)直径約4.0mを測る大型土坑で、SK14と同一遺構の可能性がある。深さ約1.4mを測り、上層には蹕を含む。出土した陶磁器の中には16世紀末の遺物を含む。遺構の年代は17世紀前半頃に比定できよう。

SK17(第9図 1-①中)調査区中央にて検出した長軸約1.5mを測る楕円形土坑で、深さ約0.8mを測る。断面形は椀形を呈し、埋土は3層で、中間層には炭化物を多く含む。17世紀末～18世紀初頭の遺物が出土している。

SK19(1-①中)SE03(SK18)の北側に重なって検出された土坑。18世紀代の遺物が出土している。

SK20(1-①南)調査区北隅で検出した方形土坑だが、旧校舎の基礎により損壊され全容は不明。18世紀代の遺物とともに木製品が多く出土している。施工時に最下層部が検出され、円形の掘方とともに円形の籠が確認されている。井戸であった可能性が高い。

SK21(1-②北)SK62と同一遺構。詳細はSK62を参照されたい。

SK22(1-①中)検出長軸約1.4m、深さ約1.1mを測る土坑。17世紀末の遺物が出土している。

SK23(1-①中)調査区北寄りで検出した。検出長軸0.7m、深さ約0.2mを測る土坑。SK25を切る。

SK24(1-①中)調査区北寄り東壁で検出した。埋土は単層で、炭化物を多く含んでいる。

SK25(1-①中)東側を SK23に切られる。深さ約0.5mを測り、埋土は単層で、小石と炭化物を含む。

SK26(1-①中)調査区北寄り西側で検出した土坑。長軸約0.6mの楕円形を呈し、深さ約0.1mと浅い。

SK27(1-①北)SK32・SK35に切られており、平面形は定かではないが、検出長軸約2.9m、深さ約0.1mを測る浅い落込状の遺構である。17世紀代の遺物が出土している。

SK28(1-①北)SK32を切る、長軸約1.1m、深さ約0.3mを測る土坑。17世紀後半～18世紀中頃の遺物が出土している。

SK29(第9図 1-①中)調査区北隅で検出した長軸約2.8mを測る大型土坑で、深さは約1.0mまで掘り下げたが底の検出には至っていない。第3層は地山に非常に近似した色質の埋土であり、途中で掘削を中止したのだが、施工時に海拔17.4mの地点で掘方が検出された。おそらくは断面円筒形を呈し、

上層部分の大礫出土状況から、井戸であったものと考えられる。18世紀末～19世紀初頭の遺物が出土しており、遺構の年代もそのあたりとして問題ないであろう。SK30に切られる。

SK30(第9図 1-①中)SK29を切る。18世紀末から19世紀代の遺物が出土している。

SK31(第9図 1-①北)調査区北寄りで検出した長軸約2.1mを測る平面長方形を呈す土坑で、断面形は箱形である。埋土は4層で、礫と瓦片を多く含む。17世紀後半～18世紀前半の遺物が出土している。

SK31-b(1-②中)旧校舎基礎に取り囲まれるように検出された遺構で、深さ約0.2mを測る。実際の掘方はさらに大きいと考えられるが、周囲がすべて攪乱のため掘り下げることができなかった。

SK32(1-①北)長軸約1.6m、短軸約0.8m、平面長方形を呈する土坑で、深さは約0.2mを測る。未加工の河原石が大量に廃棄されていた。屋根石等の片付け穴か。17世紀～18世紀前半代までの遺物が出土している。

SK33(第9図 1-①北)調査区南東寄りで検出した長軸約2.2mを測る梢円形土坑。埋土は5層に分かれ、炭化物を多く含んでいた。17世紀後半代の遺物が出土している。

SK34(1-①北)SK33の北に位置する土坑で、18世紀末～19世紀初頭の遺物が出土している。

SK35(1-①北)調査区西寄りで検出した土坑で、長軸約2.7m、深さ約0.8mを測る大型土坑。17世紀後半～17世紀末頃の遺物が出土している。埋土は単層で、一度に埋められている。

SK36(1-①北)調査区北壁で検出したため、全容は不明である。17世紀後半～17世紀末の遺物が出土している。

SK37(1-①中)調査区北寄りで検出。およそ2mの深さまで掘り進めたが底の検出には至っていない。断面は円筒形を呈し、工事施工時に最下層が検出され、井戸であった可能性が高い。出土遺物から19世紀代の遺構である。

SK39(1-①中)調査区北寄り東壁で検出した。調査区外に延びる土坑で、全容は不明である。深さは約0.9mを測り、18世紀初頭の遺物が出土している。

SK40(1-①中)遺構図との同定ができなかったが、17世紀代の遺物が出土している。

SK41(1-①北)調査区ほぼ中央に位置する長軸約1.7m、短軸約1.2mの平面梢円形を呈する土坑で、深さ約1.0mを測る。約17世紀後半～18世紀前半にかけての陶磁器と瓦片が大量に廃棄されていた。

SK42(1-②北)調査区北隅で検出した。攪乱による損壊を受けており、全容は明らかではないが、北接するSE04の一部と考えられる。深さ約1.6mという規模からも井戸の掘肩である可能性が高い。

SK43(1-②北)調査区南隅で検出した。深さは約0.1mと浅いが、加工された大石と磁器片が出土している。

SK44(1-②北)調査区中央で検出。東西は旧校舎基礎によって損壊している。深さは約0.7mを測り、17世紀末～18世紀前半の遺物が出土している。

SK46(2-③)調査区西壁で検出。調査区外に延びており、全容は不明である。検出長軸約1.1m、埋土は礫と炭化物を含む単層で、深さは約0.2mと浅い。17世紀後半～18世紀中頃の遺物が出土している。

SK47(第9図 2-③)調査区北隅で検出。調査区外に延び、全容は不明である。断面形は皿形を呈し、一部壁が抉れている。埋土は2層の単純堆積で、上層には19世紀代の遺物が多く混入していた。SK48を切っている。

SK48(2-③)SK47に切られる深さ約0.1mの浅い土坑。埋土は焼土と炭化物を多く含む単層である。

SK49(2-③)土坑としたが溝である可能性がある。検出長軸は約1.3m、短軸は約0.5m、深さは約0.2mを測る。埋土は単層で、焼土と炭化物を多く含んでいた。SD06に切られている。

SK50(第9図 2-③)調査区中央で検出した長軸約1.2m、短軸約0.9m、深さ約0.3mを測る平面梢円

形を呈する土坑である。埋土は3層で東側から埋まり、焼土と炭化物を多く含む。SD06に切られている。17世紀前半代の遺物が出土している。

SK51(2-③)調査区東側で検出、東半は旧校舎基礎により損壊している。埋土は単層で、浅い。

SK52(2-③)長軸約2.3m、短軸約1.1mの範囲に広がる不整形土坑で、SD06に切られている。埋土は単層で小礫と炭化物を含み、深さは約0.3mを測る。

SK53(2-③)長軸約1.5mの不整形土坑で、P3を切りSD06に切られる。埋土は複層で、炭化物を含む。

SK54(第10図 2-③)調査区中央やや南寄りで検出した不整形土坑で、深さは約0.1mとごく浅い。P6を切る。埋土は単層で、焼土と炭化物を含んでいる。

SK55(第10図 2-③)調査区中央で検出した。長軸約1.1m、深さ約0.1mを測る。埋土は3層が確認でき、焼土と炭化物を含んでいる。SK91を切る。

SK56(2-③)調査区西壁にかかって検出された土坑で、大半が調査区外のため全容は不明である。埋土は単層で、焼土と炭化物を含んでいる。検出できた深さは約0.2mと浅い。

SK57(第10図 2-③)調査区北西隅で検出した不整形土坑。単層で炭化物を含む。深さ約0.2mと浅い。

SK58(2-③)SK91・SK92と同一遺構と考えられる。18世紀末～19世紀初頭の遺物が出土している。

SK59(第10図 2-③)調査区西壁にかかって検出された土坑で、火鉢片が出土している。埋土は2層で、炭化物と小石が混ざっている。SK58に切られており、19世紀初頭以降の遺構と考えられる。

SK60(第13図 2-②)調査区中央で検出したSX07を切る土坑。検出長軸約2.4mの大型土坑だが、切合等により全容は不明である。深さ約0.3mの単層、18世紀前半代の遺物が出土している。

SK61(第10・13図 2-②)調査区中央東寄りで検出した、長軸約2.1m、短軸約1.4mを測る平面長方形を呈する土坑である。深さは約0.7mを測り、埋土は8層が複雑に入り組む。上層からは17世紀代の陶器類、下層からは木製品が多く出土した。

SK62(第10図 1-②北-2-②)SK21・SK63と同一遺構。旧校舎基礎により東西方向に分断されているが、復元長軸約3.7m、短軸は検出長で約2.6mを測る。深さは約0.9mで埋土は5層が確認でき、部分的に焼土を含む。下層で大礫と自然木が検出されており、井戸の可能性がある。18世紀後半の遺物が出土している。

SK63(1-②北-2-②)SK62と同一遺構。3層確認した土色は第1表に記してあるので参照されたい。

SK64(2-②)調査区東寄りで確認した深さ約0.1mの浅い土坑。東半は旧校舎基礎にて損壊している。

SK65(2-②)SK64の南で検出した長軸1.9mを測る平面楕円形の土坑である。17世紀末～18世紀初頭までの遺物を含む。深さは約0.2mと浅く、埋土は単層である。

SK66(第13図 2-②)SX07を切る、長軸約2.1mを測る土坑である。上面からは18世紀中頃～後半にかけての遺物とともに、礫が多く検出されている。

SK67(第13図 2-③)調査区南端に位置する長軸約1.5m、深さ約0.5mを測る平面楕円形の土坑である。上面には礫が多い。18世紀中頃～後半代の遺物が出土している。

SK68(第13図 2-②)土坑としたが、SD06と同一の遺構である可能性がある。検出延長は約4.8mを測るが、深さは約0.1mとごく浅い。上面には礫が多く、18世紀末～19世紀後半にかけての遺物が出土している。

SK69(第10・13図 2-②)SX07に切られる土坑で、平面は長軸約1.4mの楕円形を呈する。深さは約1.1mを測り、断面は円筒形で単層である。上面には礫が多く存在した。

SK70(第11図 2-①北-2-①)両調査区に跨って検出された東西約1.3m、南北約1.2mの範囲にある不整形土坑。埋土は炭化物を含む4層が確認され、17世紀後半～18世紀中頃の遺物が出土している。

SK71(2-①北)北側が旧校舎基礎に損壊されているため、全容は不明である。検出長軸は約3.9m、深さ約0.5mを測る。SK72・SK73に切られる。

SK72(2-①北)旧校舎基礎のため全容は不明である。SK71を切る。攪乱の可能性がある。

SK73(2-①北)旧校舎基礎により全容は不明である。SK71を切る。18世紀中頃の遺物が出土している。

SK74(2-①北-2-①)旧校舎基礎により上面は損壊している。検出長軸約2.5mを測る大型土坑で、深さは約0.4mを測る。SK76に切られている。

SK75(第11図 2-①)調査区北東隅で検出された長軸約1.2m、短軸約0.9mを平面楕円形の土坑で、深さは約0.2mと浅い。断面形は皿形を呈し、埋土は焼土と炭化物を含む2層が確認できる。

SK76(2-①)SK75の北東に位置する、長軸約1.0mを測る土坑。深さは約0.4mを測る。SK74を切っている。17世紀末～18世紀初頭の遺物が出土している。

SK77(第11図 2-①)長軸約1.3m、短軸約1.0mを測る不整形土坑。断面形は逆台形の掘方で、炭化物を含む5層の埋土の単純堆積が確認できる。SK86を切る。18世紀前半～中頃の遺物が出土している。

SK78(第11図 2-①)検出長軸約1.2mを測る土坑で、深さ約0.4mの椀形の掘方をもつ。埋土は黄灰色粘砂質土の單層である。SK87に切られる。17世紀後半の遺物が出土している。

SK79(2-①)SK75の東に位置する、長軸約0.8mの平面楕円形を呈する土坑である。埋土は焼土と炭化物が混入し、小石を多く含む单層で、浅い。

SK80(2-①)調査区中央東寄りで検出した長軸約1.1mの平面楕円形を呈する土坑。深さは約0.4mを測る。18世紀後半以降の遺物が出土した。

SK81(2-①)SK70の南に位置する落込状の遺構で、深さ約0.1mと浅く、18世紀後半～19世紀初頭の遺物が出土している。埋土には炭化物と礫が少量混入している。

SK82(2-①)調査区南寄りで検出された長軸約0.8m、深さ約0.2mを測る土坑で、埋土は2層である。

SK83(2-①)SK82の北に位置する溝状の土坑。深さ約0.2m、小石と炭化物を含む单層の遺構である。

SK84(2-①)調査区の南隅で検出。南半は旧校舎の基礎で損壊する。埋土は炭化物が混じる单層。

SK85(第11図 2-①)調査区の南寄りで検出された直径約3.5mの大型土坑で、SD07に切られている。

深さは約1.7mを測り、埋土は10層が確認できる。17世紀前半代の遺物が出土している。

SK86(第11図 2-①)調査区の北隅で検出した、長軸約1.2mを測る平面楕円形の土坑で、SK77に切られている。深さ約0.4mを測り、埋土は炭化物を含む3層で、柱穴の様相を呈している。

SK87(第11図 2-①)調査区の西寄りで検出。SK78を切る。17世紀後半代の遺物が出土している。

SK88(2-①)調査区の南西隅で検出。南西側は調査区外へ延び、全容は不明である。検出長軸約2.2m、深さは約1.2mを測る。埋土中には炭化物が塊で混入していた。

SK89(2-①)直径約0.8mを測る平面円形の土坑である。深さは約0.3m、埋土には粗砂と小石を含む。

SK90(第11図 1-②北-2-②)調査区の北東隅で検出した土坑で、SD04を切る。深さ0.4mまで掘削したが、施工時に海拔17.4m地点より円形の掘方が確認されたこと、埋土には大礫が多く含まれていたことから、井戸であった可能性が高い。第1表に記した土色は最下層で確認できたものである。

SK91・SK92(2-③)SK58と同一遺構と考えられる。

SK93(2-①)調査区中央西寄りで検出した土坑で、SD07に切られている。深さ約0.6mまで掘削したが、調査後、施工時に海拔17.4mの地点で正円径の掘方が確認されたことから、井戸であった可能性が高い。施工時に確認した最下層には植物遺体が多く混入していた。

SK94(2-①)調査区北寄り、西壁際で検出したため全容は不明である。検出長軸約3.5m、深さは約0.2mを測る。上層で石を多数検出した。17世紀後半の遺物が出土している。

SK95(2-①)調査区の南東隅で施工時に確認した遺構で、正円形の掘方が確認されたことから井戸であった可能性が高い。最下層では同心円状に2層の埋土が確認でき、レンズ状堆積と考えられる。

SK96(1-①中)調査区の中央東側にて検出。検出面から約0.3mまで掘り下げている。施工時に海拔17.4mまで掘削したところ、掘方が検出された。井戸であった可能性が高い。最下層では植物遺体と炭化物を多く含む軟質の埋土が確認されている。

第3節 井戸(SE)

井戸は計4基検出した。うち2基は調査時には土坑として考えていたが、その後の検討によって井戸と判断したものである。このほかにも掘方、深さから井戸と考えられる遺構が多い。それらについては第1表の備考欄に示してある。

SE01(第12図 1-③)調査区の中央にて検出。長軸約2.0m、深さ約0.9mを測る。調査時において棒と掘肩が明瞭であったため、土層から井戸と判断した。埋土に大石が混入しており、石組であった可能性もある。

SE02(第12図 1-①中)直径約1.8mを測る石積の井戸で、SE03に切られ北半の石積は損壊している。深さ約1.6mまで掘削したが、底面の検出はならなかった。しかし、施工時に海拔17.4m地点で最下層が確認され、レンズ状堆積の埋土が確認されている。18世紀後半代の遺物が出土している。

SE03(第12図 1-①中)SE02を切る。当初は土坑(SK18)と考えていたが、出土した木製品が井戸棒であることが判明し、井戸として報告する。直径約2.0mの円形掘方で、深さは約0.5mまで掘削した。井戸棒は舟の底板の転用である。18世紀前半代の遺物が出土している。

SE04(第12図 1-②北)施工時に井戸棒と考えられる縦板組が検出されている。SK42が井戸の掘方である可能性が高い。

第4節 小穴(P)

検出法量が小さいものを土坑と区別し小穴とした。柱となるものもあるが、明確なものは確認できていないため、すべて小穴として報告する。

P1(第9図 1-①中)SK37を切る形で検出された直径約0.5mの小穴。深さは約0.1mと浅い。

P2(第9図 1-②)遺構図との同定はできなかったが、出土遺物は17世紀中頃のものである。

P3(2-③)SK53に切られる長軸約0.6mの楕円形小穴。埋土は焼土と炭化物を含む灰黄褐色粘砂質土。

P4(2-③)SD06に切られる。直径約0.5m、深さ約0.3mを測るピットである。

P5(第10図 2-③)SK54の南に位置する直径約0.7mの平面円形を呈する小穴。深さは約0.5mを測る。

P6(第10図 2-③)SK54に切られる。直径約0.4mの平面円形を呈する小穴で、埋土は灰黄褐色粘砂質土に地山のブロックが混入する。深さは約0.2mを測る。

P7(第10図 2-③)SK54の中にある直径約0.5mの平面楕円形を呈する小穴で、深さは約0.2mを測る。

P8(2-②)SK61に東接する長軸約0.5m、深さ約0.3mの小穴である。

P9(2-①)調査区南東隅で検出した長軸約0.5mの平面楕円形を呈する小穴で、深さは約0.3mである。

P10(2-①)SK85の南東に位置する長軸約0.4mの平面楕円形を呈する小穴で、深さは約0.1mと浅い。

P11(2-①)SK54の南で検出された長軸約0.7mの平面円形の小穴である。深さは約0.1mを測る。

第5節 溝(SD)

溝状の遺構を一括して報告する。うちSD07は礫が帶状に連なる遺構であり、溝ではなく土塀の基礎等構造物である可能性が高い。主軸、法量等は第4表を参照していただきたい。

SD01(1-③)調査区の南西隅にて検出した溝で、南壁から西壁に弧を描く。検出延長約4.5m、幅は約1.3m、深さ約0.3mを測る。古墳時代前期の土師器片が多く出土し、須恵器も1点含まれている。土層の観察から、廃絶時には北側から埋まっていることが確認できた。平地式建物の周溝であろうか。

SD02(1-③)調査区を東西に直線的に流れる溝である、遺物は出土しておらず、詳細は不明である。

SD03(1-③)調査区北側を東西に直線的に流れる溝で、SK11・SK12に切られる。深さは約0.1mと浅い。17世紀末頃の遺物が出土している。

SD04(第11図 1-①中-2-③)軸を北東-南西方向に持つ石組の溝で、扁平な石で蓋を設える。検出延長は約12.1m、深さは約0.5mを測る。SK90に切られている。19世紀代の遺物が確認されているが、遺構の時期は切り合ひ等からさらに遡るものと考える。近世屋敷境の区画排水溝と考えられる。

SD05(1-①中)調査区中央を東西に直線的に流れる溝で、幅約0.5m、深さは約0.1mと浅い。17世紀後半~18世紀前半代の遺物が出土している。

SD06(第11図 2-③)調査区を南北に流れる溝で、SK49・SK52・SK53を切る。検出延長は約4.1m、幅約0.9m、深さは約0.3mで炭化物を含む3層の埋土が確認できる。18世紀後半~19世紀初頭の遺物が出土している。

SD07(第11図 2-①)東西方向約6.1mにわたり検出したが、1-①中区でも当初検出されていた。こぶし大の礫が多く検出され、溝ではなくSD04と同様空間を区画する施設、土塀の基礎と考えられる。SK85・SK93を切っている。

第6節 その他の遺構(SX)

調査時において、落込状のもの及びその性格が判然としないものについては、その他の遺構として一括して処理している。以下、遺構番号順に報告する。

SX01(第12図 1-①南)18世紀後半代の陶磁器・礫が多数出土したが、遺構プランは不明。包含層あるいは搅乱の可能性がある。

SX02(第12図 1-①南)焼土と煉瓦が多数出土した。17世紀後半代の遺物も含むが、近代以降の搅乱である可能性が高い。

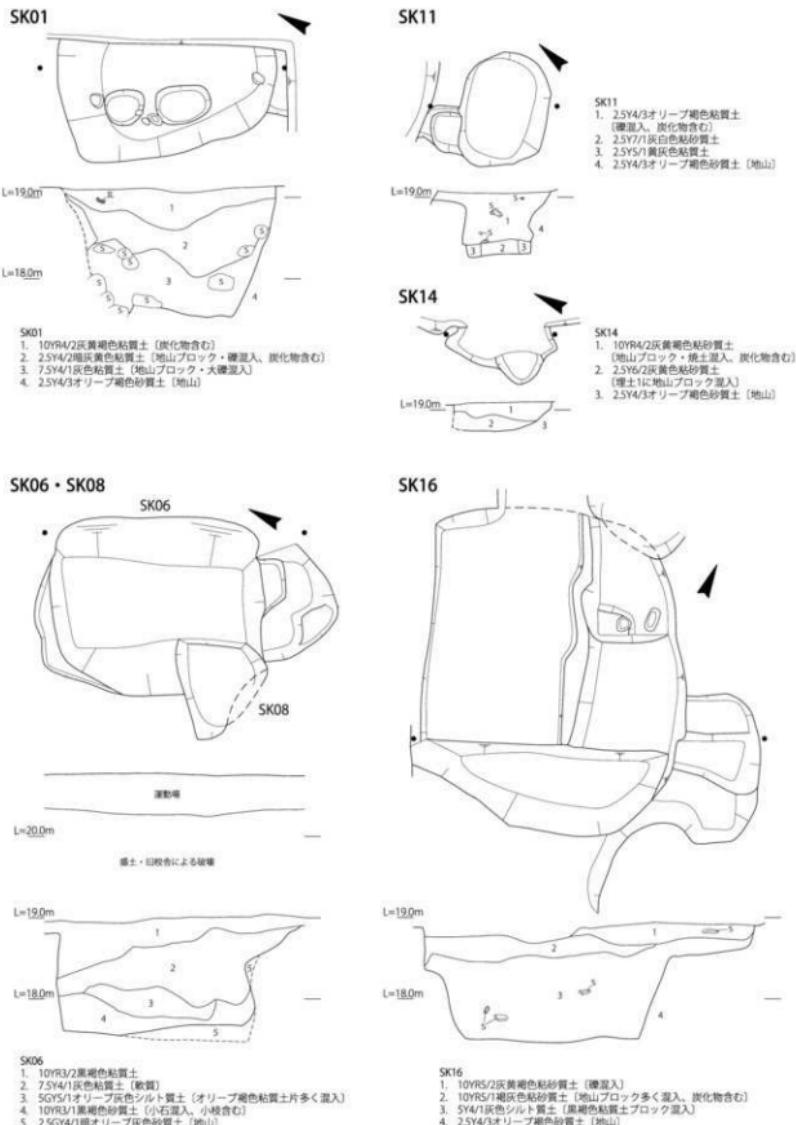
SX03(1-①北)SK33・SK34の上層部分である。

SX04(第13図 1-①北)不整形の土坑状遺構で、埋土は2層が確認でき、いずれも礫・炭化物を含む。

SX05(1-①北)SK35の上層部分である。

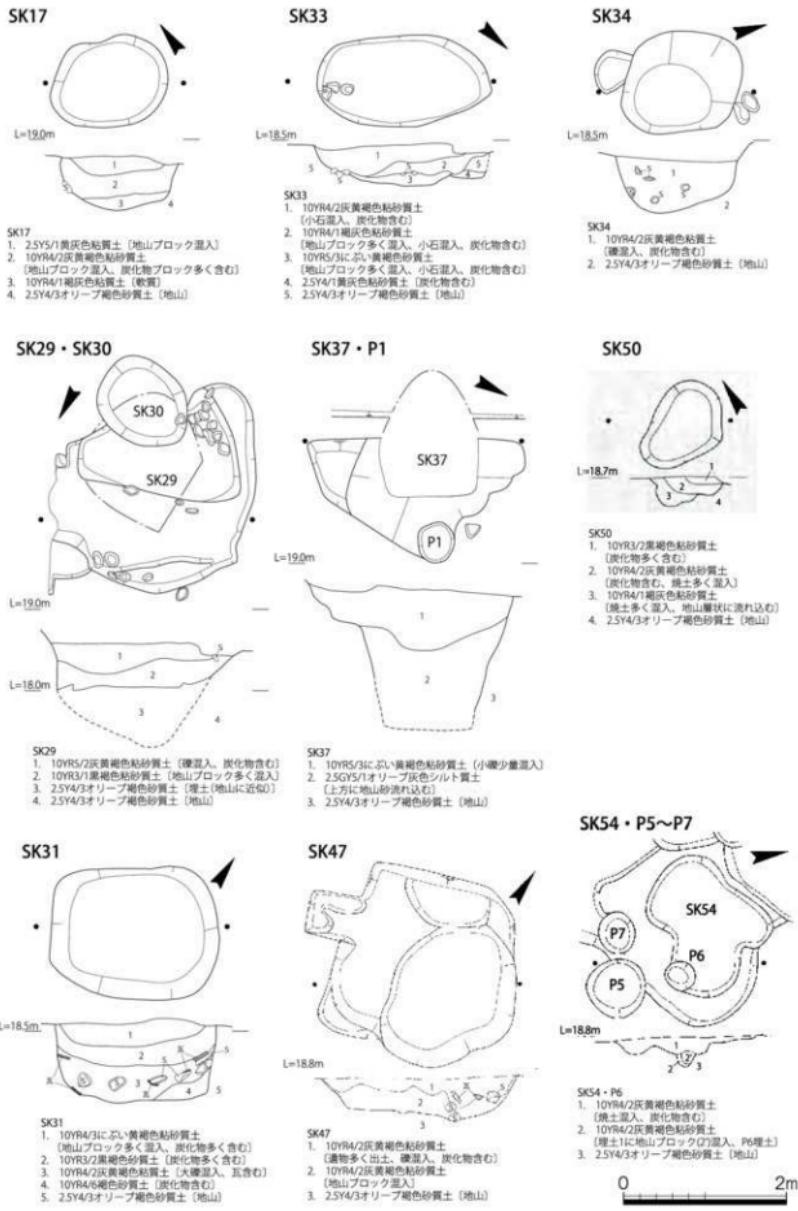
SX06(第13図 1-①南)SX03に後発する遺構で、長軸約1.3mを測る。土層は炭化物を多く含むが、2土坑の集合体の様相を呈する。出土遺物は19世紀代のものである。

SX07(第13図 2-②-2-①北)調査区西半を覆うようにある不明遺構で、SK60・SK61・SK66・SK67・SK68に先行する。南北約4.8m、東西約1.2mの範囲に広がっており、深さは約0.5mを測る。上面で礫が多く検出され、埋土中からは18世紀後半の陶磁器類とともに瓦片が多く出土しているが、SK67・SK68からの混入品であろう。切り合ひからはさらに年代が遡るものと考えられる。

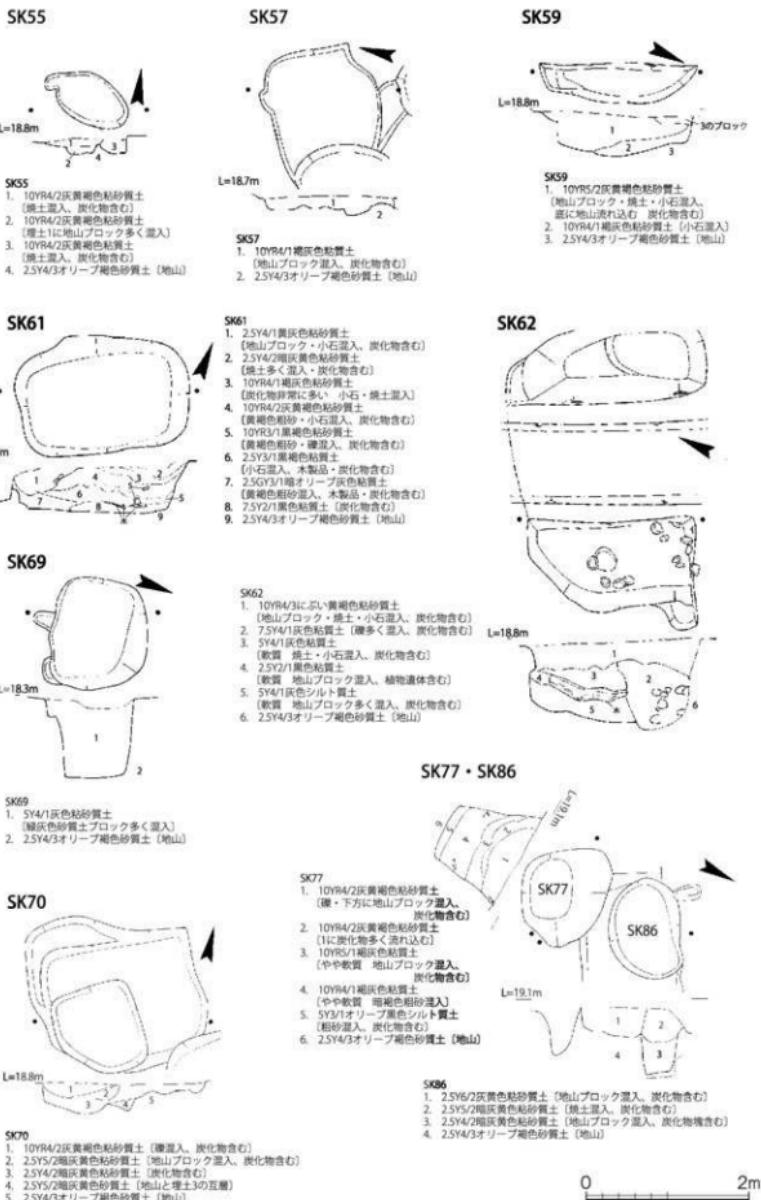


第8図 SK01・SK06・SK08・SK11・SK14・SK16 [S=1/60]

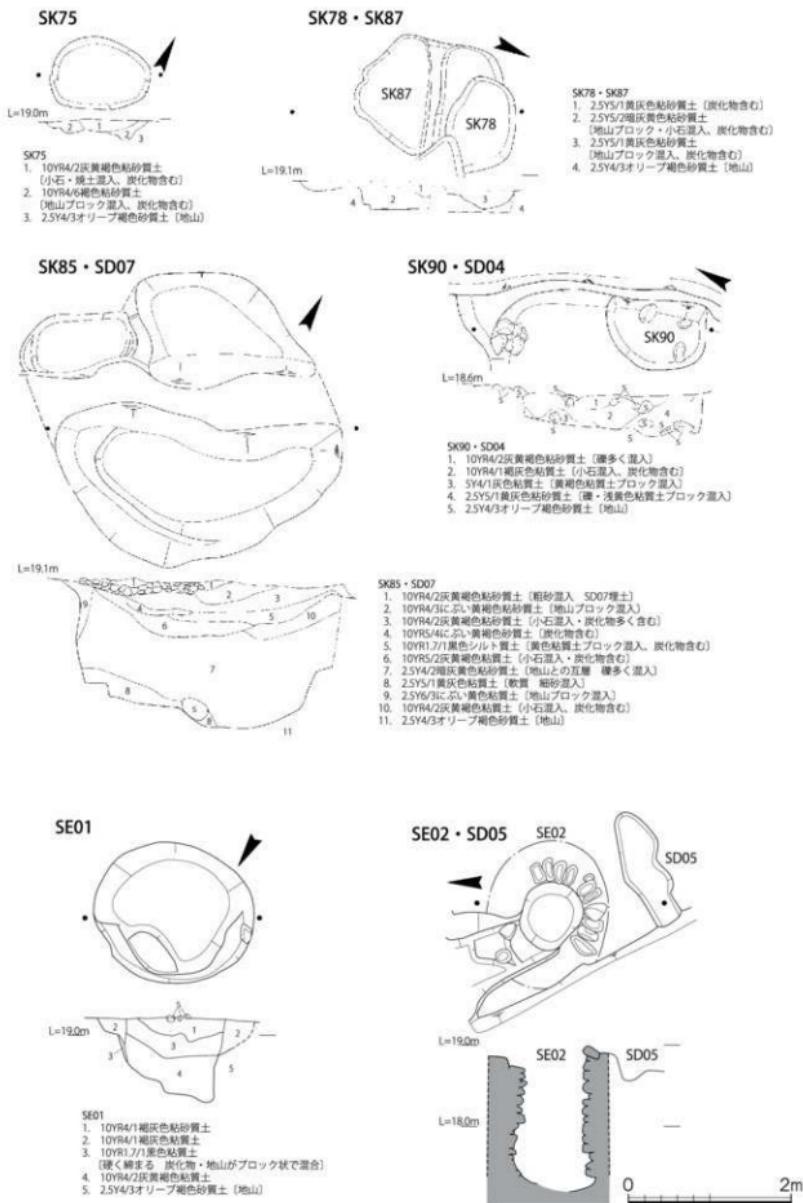
0 2m



第9図 SK17・SK29・SK30・SK31・SK33・SK34・SK37・SK47・SK50・SK54・P1・P5～P7 [S=1/60]

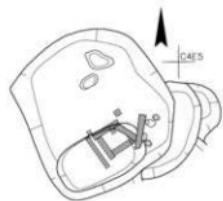


第10図 SK55・SK57・SK59・SK61・SK62・SK69・SK70・SK77・SK86 [S=1/60]



第11図 SK75・SK78・SK85・SK87・SK90・SD04・SD05・SD07・SE01・SE02 [S=1/60]

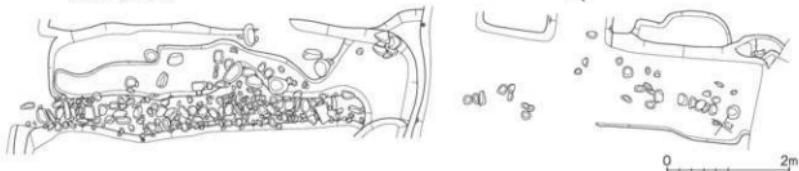
SE03



SE04・SK42



SD04 [S=1/80]

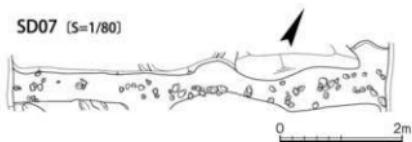


SD06

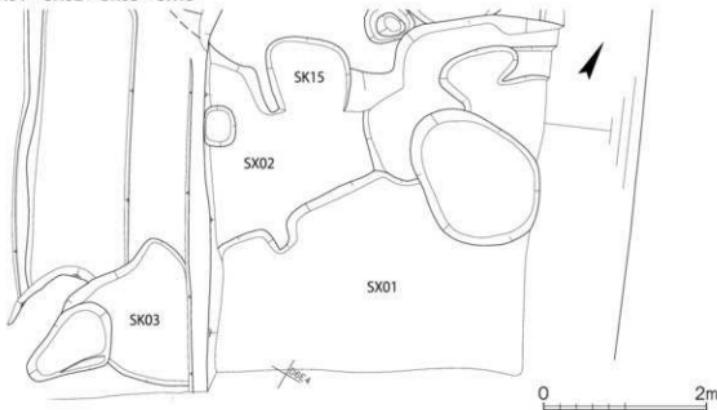


1. 10YR4/2灰黄褐色粘砂質土〔凍湿入、炭化物含石〕
2. 10YR5/2灰黃褐色砂質土
3. 10YR4/2灰黃褐色粘砂質土〔凍湿入、炭化物含石 墓土1と似る〕
4. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土〔地山〕

SD07 [S=1/80]

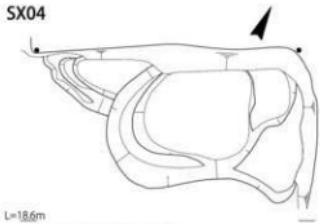


SX01・SX02・SK03・SK15



第12図 SE03・SE04・SK42・SD04・SD06・SD07・SX01・SX02・SK03・SK15 [S=1/60・1/80]

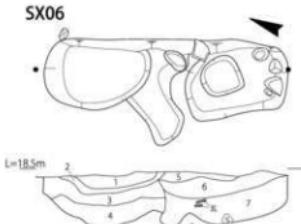
SX04



SX04

1. 10YR4/2灰黄褐色粘質土〔小石・礫混入、炭化物多く含む〕
2. 10YR3/1黒褐色粘質土〔小石・礫混入、炭化物多く含む〕
3. 25Y4/3オリーブ褐色砂質土〔地山〕

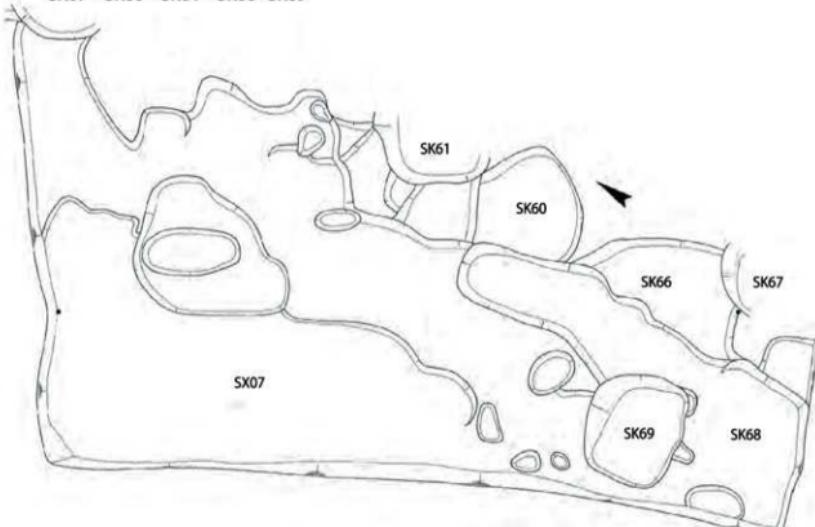
SX06



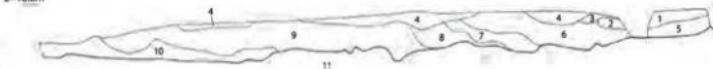
SX06

1. 10YR4/2灰黄褐色砂質土〔小石多く混入〕
2. 10YR4/4褐色砂質土
3. 25Y4/1黒褐色粘質土〔小礫混入、炭化物含む〕
4. 10YR4/1褐色粘質土〔小石混入、炭化物含む〕
5. 10YR4/2灰黄褐色粘質土
6. 25Y4/4褐色粗砂
7. 10YR4/2灰黄褐色粘質土〔炭化物多く混入〕
8. 25Y4/3オリーブ褐色砂質土〔地山〕

SX07・SK60・SK61・SK66～SK69



SX07



SX07・SK60・SK61・SK66～SK69

1. 10YR4/2灰黄褐色粘質土〔礫混入、炭化物含む〕 SK66埋土
2. 25Y4/2灰褐色砂質土〔埋土1流れ込み〕 SK66埋土
3. 7.5Y4/4褐色砂質土
4. 10YR5/1黒褐色粘質土
5. 10YR4/1黒褐色粘質土〔地山ブロック混入、炭化物含む〕 SK67埋土
6. 25Y4/1黒褐色粘質土〔地山ブロック・粗砂混入、炭化物含む〕 SK68埋土

7. 10YR4/1黒褐色粘質土〔炭化物含む〕 SK60埋土
8. 25Y4/2暗灰色粘質土〔炭化物との互層〕 SK60埋土
9. 25Y5/1黒褐色粘質土〔小石・粗砂混入、炭化物含む〕
10. 5Y5/2オリーブ褐色粘質土〔地山ブロック混入〕
11. 25Y4/3オリーブ褐色砂質土〔地山〕

0

2m

第13図 SX04・SX06・SX07・SK60・SK61・SK66～SK69 [S=1/60]

第1表 SK観察表

標本名	説明	平面形	断面形	方解石	真高(m)	幅(m)	深さ(m)	土色等	時代・特記	図版	標本名	説明	平面形	断面形	方解石	真高(m)	幅(m)	深さ(m)	土色等	時代・特記	図版
SK01	1-3 方形	近円形	NNE W	2.7	(1.3)	1.7	-	断面図参照	13c下に大きな岩柱 13c上に岩柱 13c末-14c後	8	SK37	1-16	-	円形	-	2.1	(1.7)	(2.0)	断面図参照 1'~7.5V4/2灰褐色 (地山・小石混、土)	13c後半 井戸戸 19c	3 54
SK02	1-3 條円形	-	NNE W	(1.4)	(1.3)	0.2	-	-	浅い・S形と同一の 構造なし	57	SK38	1-16	-	-	-	2.1	(0.9)	0.9	-	13c初	55
SK03	1-3 不整形 構造	-	(1.8)	1.7	(1.1)	-	蝶瓦小片多く深入	蝶瓦か 無色	12	SK40	-	-	-	-	-	-	-	-	13c後半	-	
SK04	1-3 楕円形	-	NNE W	1.4	(1.2)	1.0	-	-	13c末-14c初	57	SK41	1-16	椭円形	-	NNE W	1.7	1.2	1.0	-	13c前半 日本海側最大 瓦片多い	54
SK05	1-3 方形 構造	-	2.6	(2.2)	1.3	-	断面図参照	13c末-14c初 下層に木製品多い	8	SK42	1-26	-	-	-	(1.4)	(1.0)	1.6	-	SD04の一部か	54	
SK07	1-3 條円形	-	NNE W	(1.6)	1.5	0.3	10V4/2灰褐色 (地山・小石混、土)	土隠れ片	57	SK43	1-26	-	-	-	(1.1)	(1.0)	0.1	-	加工大石・磁器片	54	
SK08	1-3 不整形 構造	-	NNE W	2.4	(2.1)	0.7	10V4/2灰褐色 (地山・小石混、土) 7.5V4/1灰色(地山)	-	57	SK44	1-26	-	-	-	(1.6)	(0.9)	0.7	-	13c後半-14c前半	54	
SK09	1-3 楕円形	-	NNE W	1.1	1.1	0.4	-	13c末-14c初 6.5V4/2灰褐色 下方に瓦片	57	SK45	1-3	-	-	-	1.1	(0.4)	0.2	10V4/2灰褐色 (地山・壁瓦、土)	13世紀中頃	54	
SK10	1-3 楕円形	-	NNE W	1.1	1.1	0.4	-	13c末-14c初 6.5V4/2灰褐色 下方に瓦片	57	SK47	1-3	-	盤形	-	2.1	(2.0)	0.2	断面図参照	SK48と切られ 6.5V4/2灰褐色 下方に瓦片	9 54	
SK11	1-3 條円形	-	NNE W	1.4	1.1	0.7	断面図参照	13c SD03を切り 6.5V4/2灰褐色 下方に瓦片	8	SK48	1-3	-	-	-	(0.7)	0.4	0.1	10V4/2灰褐色 (地山・壁瓦)	SD4に切られ 6.5V4/2灰褐色 (地山・壁瓦)	54	
SK12	1-3 條円形	-	NNE W	0.9	0.5	0.4	10V7/2灰褐色粘土	蝶瓦か	57	SK49	1-3	-	-	-	(1.3)	0.5	0.2	10V4/2灰褐色粘土	SD6に切られ 6.5V4/2灰褐色 (地山・壁瓦)	54	
SK13	1-3 楕円形	-	NNE W	0.8	0.7	0.1	10V4/2灰褐色 (地山・壁瓦、土)	蝶瓦なし	57	SK50	1-3 楕円形 楕形	NNE W	1.2	0.9	0.3	断面図参照	SD06に切られ 6.5V4/2灰褐色 (地山・壁瓦)	9 54			
SK14	1-2 楕形	-	1.4	(0.4)	0.2	断面図参照	SK36と同一可能性	8	SK51	1-3	-	-	-	(1.0)	0.9	0.2	10V4/2灰褐色粘土 (小石混、土)	浅い	54		
SK15	1-3 楕形	-	-	1.0	(0.9)	0.4	10V4/4灰色砂	蝶瓦なし	12	SK52	1-3 不整形	-	NNE W	2.3	1.1	0.3	10V4/2灰褐色粘土 (地山)	SD6に切られ 6.5V4/2灰褐色 (地山)	54		
SK16	1-3 楕円形	楕形	NNE W	4.0	(3.4)	1.4	断面図参照	蝶瓦あり 蝶瓦端少 13c初	57	SK53	1-2 不整形	-	NNE W	1.5	0.4	0.2	1.10V4L1/3灰褐色粘土 1.10V4R1/3灰褐色粘土 (地山)	SD1に切られ 6.5V4/2灰褐色 (地山)	54		
SK17	1-3 楕円形 楕形	NNE W	1.5	1.1	0.8	断面図参照	13c初	57	SK54	1-2 不整形 不規則	NNE W	1.8	1.0	0.1	断面図参照	内を切ら 9 54	9 54				
SK18	1-3 楕形	-	-	(1.5)	1.2	0.6	-	13c前半	58	SK55	1-3 不整形 不規則	NNE W	1.7	0.4	0.1	断面図参照	SK91を切ら 10 54	10 54			
SK20	1-2 楕形	-	NNE W	1.0	0.9	0.3	1'~10V3/1黄褐色粘土 (地質木・板)	木製品底部下層に 竹籠、芦戸 13c中	57	SK56	1-3	-	-	-	1.2	(0.6)	0.2	10V4/2灰褐色粘土 (地山・壁瓦)	54	54	
SK21	2-2 楕形	-	3.7	(2.6)	0.9	SK22は西面参照	SK52と同一 13c後半-14c初 蝶瓦なし	54	SK57	1-3 不整形	-	1.8	1.4	0.2	断面図参照	SD1に切られ 10 54	10 54				
SK22	1-3 楕形	-	-	1.4	(0.7)	1.1	-	13c末	57	SK58	1-3	-	-	-	1.1	(1.1)	0.2	1.2.5V4L1/3灰褐色粘土 1.2.5V4R1/3灰褐色粘土 (地山)	SD5に切られ 10 54	54	
SK23	1-3 楕形	-	-	-	(0.7)	0.7	0.2	10V4/2C/3灰褐色粘土 (地・土)	SK25を切り 6.5V4/2灰褐色 (地・土)	56	SK59	1-3 楕形	-	-	-	(1.7)	(0.5)	0.1	断面図参照	SK56に切られ 10 54	10 54
SK24	1-3 楕形	-	-	-	(0.6)	0.5	0.3	10V4/2灰褐色粘土 (地)	56	SK60	1-2	-	-	-	(2.4)	(1.3)	0.3	1.10V4/1灰褐色粘土 (地・小石混、土)	SK07を切る 13 54	13 54	
SK25	1-3 不整形 楕形	NNE W	0.9	0.8	0.5	10V4/2C/3灰褐色粘土 (小石混、土・壁)	SK23に切られ 6.5V4/2灰褐色 (地・土)	55	SK61	1-2 方形 楕形	NNE W	2.1	1.4	0.7	断面図参照	上部から陶器破片 13c前半-14c初 13c後半	55 54 54				
SK26	1-3 不整形	-	-	(2.9)	2.6	1.1	-	SK23に切られ 6.5V4/2灰褐色 (地・土)	55	SK62	1-2	-	楕形	-	3.7	(2.6)	0.9	断面図参照	SK21・SK23と同一 13c後半	50 55	
SK27	1-3 楕形	-	-	-	-	13c中	54										1.10V4N3/3灰褐色 粘土(地山・壁瓦)	SK21・SK23と同一 13c後半	54 55		
SK28	1-3 楕形	-	-	-	-	13c中	54	SK63	1-2	-	楕形	-	3.7	(2.6)	0.9	断面図参照	1.2.5V4L1/3灰褐色粘土 1.2.5V4R1/3灰褐色粘土 (地山・小石混、土)	SK21・SK23と同一 13c後半	54 55		
SK29	1-3 不整形 楕形	NNE W	2.8	2.4	(1.0)	断面図参照 1'~5V4/1灰褐色 (地・土)	SK23に切られ 6.5V4/2灰褐色 (地・土)	9 54	SK64	1-2	-	楕形	-	2.2	(1.2)	0.1	1.10V4/2灰褐色粘土 (地山・壁瓦)	浅い	54		
SK30	1-3 楕形	-	NNE W	1.2	1.0	0.1	2.5V4/1灰褐色粘土 (地・石混、土)	SK23を切り 13c末-14c初	9 54	SK65	1-2	-	楕形	-	1.8	0.8	0.2	10V4/2灰褐色粘土 (地山・壁瓦)	13c後半	54	
SK31	1-3 楕形	楕形	NNE W	2.1	1.6	0.5	断面図参照	13c前半 蝶瓦多く	54	SK66	1-2	-	-	-	2.1	(1.2)	0.4	-	SK07を切り 13 54	13 54	
SK32	1-3 楕形	-	NNE W	1.8	0.8	0.2	-	石大量に腐葉 13c	54	SK67	1-2	楕形	-	NNE W	1.5	1.4	0.5	-	13c前半-13c後半 上部破片多い	54	
SK33	1-3 楕形	楕形	NNE W	2.2	2.1	0.7	断面図参照	13c後半	54	SK68	1-2	楕形	NNE W	1.4	1.1	0.1	-	13c前半-13c後半 上部破片多い	54		
SK34	1-3 不整形 楕形	NNE W	1.6	1.4	0.4	10V4/2灰褐色粘土 (地・土)	13c末-14c初	54	SK69	1-2	不整形 平整形	NNE W	1.3	1.2	0.5	断面図参照	13c後半-13c前半 上部破片多い	54			
SK35	1-3 不整形	-	NNE W	2.7	1.5	0.8	10V4/2灰褐色粘土 (地・小石混、土)	13c後半-14c初	54	SK70	1-2	不整形 平整形	NNE W	1.3	1.2	0.5	-	SK73に切られ 13 54	54		
SK36	1-3 楕形	-	-	1.3	(1.2)	0.2	10V4/1.7灰褐色粘土 (地・土)	13c末	54	SK71	1-3	-	-	-	(1.6)	0.9	0.4	-	SK73に切られ 13 54	54	
SK72	1-3 楕形	-	-	-	-	-	-	-	SK72	1-3	-	-	-	-	-	-	-	-	-		

第3表 P觀察表

連番	該當区	平野部	地形形	方位角	真高(m)	短波(m)	波長(m)	土色等	時代・特記	図面	連番	該當区	平野部	地形形	方位角	真高(m)	短波(m)	波長(m)	土色等	時代・特記	図面
SK73	I-1-1	-	-	-	(1.6)	0.5	0.6	-	SK71を切る H8c中塗	57	P1	I-1-6	円形	-	NF/E	0.5	0.4	0.1	-	SK73を切る	9 55
SK44	I-1-[8] [2-1]	-	-	NW/E	2.5	0.3	0.4	-	SK61に切られる	56	P2	I-2-2	-	-	-	-	-	-	-	17c中塗	-
SK75	I-1-5	横円形	凹形	NF/E	1.2	0.9	0.2	黒面団参照	-	57	P3	I-2-2	椭円形	-	NF/W	0.6	0.5	0.1	10VF/H(区青面色粉砂 地斑-波)	SK53に切られる	54
SK76	I-2-1	横円形	-	NW/E	1.0	0.5	0.4	-	17c(朱)-18c 初層 SK74を切る	57	P4	I-2-3	椭円形	-	NF/E	0.5	0.4	0.3	-	SD06に切られる	54
SK77	I-2-1	半円形	波形	NW/E	1.3	1.0	1.2	圓面団参照	-	56	P5	I-2-3	円形	-	NF/E	0.7	0.7	0.5	-	-	9 54
SK78	I-2-1	-	椭形	-	(1.2)	1.0	0.4	圓面団参照	SK53に切られる	56	P6	I-2-3	円形	椭	AD/E	0.4	0.4	0.2	圓面団参照	SK54に切られる	9 54
SK79	I-2-1	横円形	-	NF/E	0.8	0.4	-	10VF/H(朱-青い黄褐色粉 砂地斑-小石多生長)	石多生長	57	P7	I-2-3	椭円形	-	NF/E	0.5	0.4	0.2	-	SK54に切られる	9 54
SK80	I-2-1	不整形	-	NF/E	1.1	0.6	0.4	-	H8c後山以降	57	P8	I-2-2	-	-	NF/E	(L5)	0.4	0.1	-	-	54
SK81	I-2-1	-	-	(1.6)	1.3	0.1	-	10VF/H(朱-青い黄褐色粉 砂地斑-小石多生長)	石少生長	56	P9	I-2-1	椭円形	-	NF/E	0.5	0.3	0.2	-	-	57
SK82	I-2-1	-	椭形	NF/E	0.8	0.6	0.2	1.0VF/S(朱面色粉砂 地斑-2.10VF/S(青面色粉砂 地斑-少生長))	有壁	57	P10	I-2-1	椭円形	-	NF/E	0.4	0.4	0.1	-	-	57
											P11	I-2-1	椭円形	-	NF/E	0.7	0.4	0.1	-	-	57

第4章 SD 框容表

第5章 GX編寫事

第2章 SE 開発者

測量名	測量区	干渉形	形状別	長辺(m)	短辺(m)	高さ(m)	土色等	時代・特記	図面	[北] 1955年(昭和30年)に記載された 北方位標の「N」は北を、「S」は南を、「E」は東を、「W」は西を表し 「NSW」は北から東へ90°振れることを示す。		
										BX01	2~2~ 2~1~	- 直形 -
SE01 1~3	有円形	範囲	N/W/E	2.0	1.7	0.9	-	古墳時代-平安時代に亘る 「土塁」(土塁とし、 「土堤」(土堤とし) あり)	11 57			
SE02 1~4	有円形	円筒形	N/S/W	1.8	1.5	(1.6)	1 st , 10TH(10世紀)・古墳時代 「土塁」(土塁とし、 「土堤」(土堤とし) あり)	古墳時代-平安時代に亘る 「土塁」(土塁とし、 「土堤」(土堤とし) あり)	11 57			
SE03 1~4	不整形	-	N/S/W	2.0	1.7	(0.5)	-	SK18 18(築堤、 内凹折線と凸線、 傾斜)	12 55			
SE04 1~2R	方形	-	N/S/W	0.9	0.9	-	-	SK45 調査後尹井峰様	12 54			

後()書きの数値は検出残存値を示す。

全方位軸機の「N」は北を、「S」は南を、「E」は東を、「W」は西を表し、「N50° E」は北から東へ50° 振れていることを示す。

半土色等の「結」は結晶を、「砂」は砂質を、「炭」は炭化物を示す。

第4章 出土遺物

第1節 概要

本書で報告する出土遺物の大半は江戸時代に属するものであり、土坑、溝等から大量に出土している。第2節から個別遺構ごとに報告するが、紙幅の都合により、その遺構の年代を示すものや特殊なものなどを主にとりあげる。基本的に器種別となっており、報告は番号順に行うのでご了承願いたい。遺物が属する調査区、個々の遺物の法量や調整等は第6表～第12表を参照願いたい。また、文中の分類や年代観については、巻頭凡例に示した各論考を参照願いたい。

第2節 土坑(SK)出土遺物

SK01(第14図) 1は磁器製ミニチュア碗、2は磁器小杯である。このほか、肥前産陶器の胎土目皿、砂目皿、すり鉢など17世紀代のものも出土しているが、青磁染付筒碗が出土していることから17世紀末～18世紀後半が下限であろう。

SK04(第14・42図) 第14図3は肥前産陶器鉢で白泥の刷毛目が施され、見込みは蛇目釉剥となっている。17世紀末～18世紀初頭か。第42図1～5は板状木製品、6は棒状木製品、7は栓。8も端部が斜めに削ってあるため、栓状の形状を呈する。

SK06(第14・35・42図) 第14図4は肥前産磁器猪口で被熱のためか器の表面が白濁し染付の一部が退色している。5は肥前産磁器小杯、6は同紅皿である。7～10は肥前産磁器碗、12は肥前産磁器蓋物である。7は高台内に「大明年製」銘がある。17世紀後半～18世紀のものであろう。8の碗の内外には赤を中心とした色絵が施されている。12・13は肥前産磁器皿で、12の皿は高台内のみ染付の上に濃灰色の釉がかけられている。高台内の銘は「寿福」とみられ、17世紀後半代のものか。隣接するSK08から12の破片が出土している。14は肥前の波佐見産磁器鉢で高台内は蛇目釉剥され鉄釉が塗られており、高台内が大きく歪んでいる。15は京焼の陶器碗で高台内に「仁清」と刻印が残る。16・17は陶器碗である。16は京・信楽産の碗で、器形は下ぶくれで高台内に釘彫りが見られる。17は肥前産の陶胎染付碗である。18は肥前産陶器皿で見込みが蛇目釉剥されていて白泥で刷毛目を描いている。19～29は在地産土師器皿で、19や20など外面底部にシロ目が残る17世紀前半のものから、21～29などの内面底部に凹線が巡る18世紀中頃や18世紀末～19世紀初頭にかけての製品と思われるものまでが混在している。第35図1は赤瓦の丸瓦である。第42図9～12は板状木製品であるが、六角形の板の一部のように見える。13～17は板状木製品、18・19は棒状木製品、20は刷毛である。21は漆器椀で内面赤漆、外面黒漆が塗布されている。22は曲物の蓋または底であろうか、円板状の木製品である。23～25は差歛下駄である。

SK08(第15図) 1は肥前産磁器碗で外面にコンニャク印判が押されており、17世紀末頃～18世紀前半のものである。2は京焼陶器の皿であろうか。3～5は在地産土師器皿で体部内面に凹線が入る。17世紀末頃～18世紀初頭のものか。そのほか、絵唐津向付と思われる破片や、肥前産陶器の白泥による刷毛目鉢、在地産土器の火鉢などが出土している。

SK09(第15図) 6は肥前産磁器紅皿である。高台内に墨書が見られる。7は肥前磁器碗で漆織がある。高台内の銘は「年」のみ残存しており、染付に朱・緑・黒などの色絵が施してある。8は肥前産磁器皿で手塙皿か。9は在地産軟質施釉陶器で、楽焼の抹茶碗か。全体に縁釉をかけ、外面体部にはヘラ描きで文様があり、高台内は中心部が釘彫りしてある。口縁部が欠けたときの漆織痕が残る。10は肥

前産陶器甌である。11～14は在地産土師器皿である。体部から口縁部が外反し、体部内面に凹線が巡り、底部は丸みを帯びている。18世紀中葉のものであろう。13の口縁部には灯明の芯を固定するための丸い凹みが有り、その周辺のみ灯芯油痕が付着している。底部には径3mmの穿孔が1つある。

SK10(第15・40・42図)第15図15は肥前産磁器碗で、16は肥前産磁器皿で見込にコンニャク印判の五弁花があり、高台内には「大明年製」の銘がある。18世紀前半のものか。17は肥前産陶器向付。18は器種が不明であるが、水盤か建水または灰器であろうか。内面は無釉である。19～22は土師器皿で、19・20は体部から口縁にかけて外反し、体部内面に凹線が巡る丸底のもので18世紀中頃のものであろう。21・22はV類でも小型で、18世紀初頭～中頃のものか。23は三足が付く在地産の火鉢である。第40図1は粘板岩製の砥石である。第42図26～30は円盤状木製品である。31は板状木製品、32は箸、33は棒状木製品、34は連齒下駄である。

SK11(第16図)1は瀬戸産磁器碗で、文様はコウモリ文様であろうか。2は九谷産陶器鉢で、灰釉地に鉄釉で模様が描かれ、口縁は外反し先端は内側に折れる。3は京・信楽産陶器灯明皿で、灰釉が施されている。いずれも19世紀に入る時期であろう。

SK12(第16図)4は瀬戸産磁器皿である。口縁部には染付の口紅が施されている。19世紀代のものであろう。

SK16(第16・43図)第16図5は肥前産陶器火入で鉄絵の格子文が描かれている。16世紀末のものである。そのほか、在地産土師器皿で底部にムシロ目の残るものなども出土している。第43図1は匙のような形をした不明木製品、2は連齒下駄である。かなり使用したのか、すり減り方が激しい。

SK17(第16・43図)第16図6は中国産の青磁碗で、体部外面下方に沈線が巡り、高台疊付中程から高台内面にかけて無釉である。室町時代のものであろう。7・8は在地産土師器皿で、7は体部から口縁にかけて開き端部が内側へ折れる。17世紀後半のものである。8は底部が小さく平坦で内面に凹線が巡る。18世紀初頭のものである。第43図3は差歛下駄である。

SK19(第16図)17は外面二重網目文、内面一重網目文で見込中央に花文様が描かれる肥前産磁器碗で、18世紀前半～中頃のものである。18は肥前産磁器青磁合子の身で、糸切り底となっている。疊付と蓋が被さる返しの部分のみ無釉である。

SK20(第16・34・43図)第16図9は肥前産磁器の白磁猪口で口縁部が外反する。17世紀後半～18世紀初頭のものか。10は肥前産磁器合子蓋である。外面に染付で「寿」という文字が8字書かれている。11は肥前産白磁の鉢か。内面は型で陽刻の文様が施されている。12は肥前産磁器の青磁染付の鉢で蛇目凹型高台である。18世紀後半～19世紀代のものか。13は京・信楽産陶器の碗で外面に鉄絵が見られる。14は施釉土器の水注で、赤褐色の胎土に白泥文様が描かれ透明釉がかけられている。15は在地産土師器皿で体部から口縁にかけて外反し、内面に凹線が巡る。18世紀中頃のものであろう。16是在地産施釉土師器皿で耳が付く。第34図18は煙管の雁首である。第43図4は棒状木製品で2箇所穿孔がある。5・6は箸、7は円盤状木製品である。

SK21(第17・34・43図)第17図1は肥前産陶器碗で、口縁部には灰釉地に鉄釉で口紅が施されている。底部から高台にかけて内外面鉄釉が塗布されている。17世紀後半～18世紀初頭のものか。2は肥前産陶器で絵唐津の皿または向付である。透明釉に鉄釉で草花文が描かれている。16世紀末～17世紀初頭のものである。3・4は在地産土師器皿で、3は体部内面に凹線の入るタイプのもので17世紀末～18世紀初頭のものか。4は内面に凹線が入らない丸底のもので、17世紀末頃のものか。5は在地産土器の火鉢である。内外面は墨で塗ったように黒くなっている。第34図19は煙管の吸口で、外面に鶴の文様が彫ってある。第43図8は桶側板で焼印が見られる。9は連齒下駄である。10は差歛下駄の歯である。

SK22(第16・43図) 第16図19は肥前産磁器の小坏である。20は在地産土師器皿。底部の丸いタイプで17世紀末頃のものか。第43図11は板状木製品で穿孔が1箇所ある。12は先端部分をとがらせ、もう一方の端を加工してある不明木製品。13・14は箸、15は棒状木製品、16は棒状竹製品。17は不明木製品であるが、加工痕が見られる。

SK27(第17・35図) 第17図6は在地産土師器皿で、底部は広く平坦で体部の開きが強い。器壁は比較的薄い作りのI 3類か。17世紀中葉のものと考えられる。そのほか、肥前陶器の砂目皿なども出土している。第35図2は焼瓦の平瓦片で、「□上」と刻印がある。

SK28(第17図) 7は肥前産磁器皿で内面に格子文、見込は蛇目釉剥ぎである。17世紀後半～18世紀中頃の波佐見の製品か。

SK29(第17・34・39・40図) 第17図8・9・11は肥前産磁器碗である。8は外面にコンニャク印判による团鶴や菊のような文様が付けられている。18世紀前半代のものか。9は青磁染付の筒碗で、内面口縁部には四方擣が巡り、見込みには二重圓線とコンニャク印判の五弁花文がある。18世紀後半のものである。11は小丸碗で外面には雪の輪文が描かれている。見込みには手描きの五弁花文がある。18世紀後半～19世紀初頭までに作られたものであろう。10は産地不明の碗である。胎土は砂が多く混ざっているようでガサガサしている。外面が青磁釉、内面が透明釉で貰入が多い。高台の豊付は無釉で砂が付着しており一部外側を削っている。12は肥前産磁器皿で見込が蛇目釉剥ぎになっている。17世紀後半～18世紀中頃の波佐見の製品か。13は肥前産磁器蓋で染付の上に色絵が施してある。14～17は陶器碗である。14と15は外面に飛ガンナで付けたような細かい文様が見られる。瀬戸美濃産の鎧手か。18は陶器土瓶、19～21は在地産土師器皿で、19は丸底で内面の凹線が体部上位に巡る。18世紀後半のものか。20・21は底部が比較的平坦で凹線が体部と底部の間に明確に入るもので、18世紀末～19世紀初頭にかけて作成されたものであろう。21は底部外面に墨書が認められる。22は在地産施釉土器皿である。23は在地産土器の火鉢で外面に花の刻印が見られ、口縁部には敲打痕が多数ある。第34図22は銅製の匙か。24は鉄製の舟釘状の製品である。25は鉄製の刃物か。第39図1は土人形で、天神様である。5は中心に穿孔があり、孔を縁取るように墨で四角が描いてある。また、墨書も見られる。孔には金属の棒状のものが残存していた。独楽か。16はミニチュアの釜である。第40図2・3は明確な接合点はないが石製棗瓦の様な形状をしている。越前産笏谷石と考えられる緑色凝灰岩製である。

SK30(第18・34・40図) 第18図1は肥前産磁器碗である。18世紀末～19世紀初頭のものであろう。2と3は陶器の植木鉢である。2は内外面鉄泥が塗られている。越前産であろう。第34図26～28は鉄製の釘である。第40図4は温石で穿孔が1箇所ある。頁岩製か。

SK31(第18・19・35・36・40図) 第18図4・5は肥前産磁器で白磁の猪口、6は肥前産磁器小坏である。17世紀後半～18世紀前半頃のものか。7～14は肥前産磁器碗である。7～12は17世紀後半～18世紀前半頃のものか。13は色絵碗で、白磁に朱・青・緑・黒の色絵が施してある。17世紀中頃～後半のものであろう。14は碗で、17世紀後半～18世紀初頭にかけてのものか。第19図1は肥前産陶器すり鉢で口縁部にのみ鉄釉がかかる。17世紀中頃のものである。2～7は在地産土師器皿で体部が開き気味に立ち上がり端部を内側へ折り曲げる形で、いずれも17世紀後半のものか。第35図3～8は焼瓦である。3～5が丸瓦、6～8が平瓦で、3の丸瓦の内側には刺縫痕が残る。4の丸瓦の内側には刺縫痕とコビキB技法による粘土切り離し技法が残る。5には花びらを表現しているのか円に細かなキザミを入れた中に梅鉢文がある刻印が見られる。6には四つ割り菱の家紋に似た刻印、7には「○十」の刻印が見られる。第36図1は焼瓦で、平瓦である。第40図5～7は砥石で、5と6は中粒砂岩、7は泥岩であろうか。

SK32(第19・34・36・40図) 第19図8・9は肥前産磁器合子である。10は肥前産磁器小坏で漆縫痕が残る。11・12は肥前産磁器碗で、高台内には二重圓線が巡る。18世紀前半のものか。14は肥前の京焼風陶器碗で、外面に鉄絵、底部外面に鎬文様の陰刻が巡る。15は肥前産陶器小杯で、鉄軸がかけられ高台は無軸である。16は越前産陶器鉢で鉄泥がかけられている。17～19は在地産土師器皿で小さめの底部から体部が開き気味に立ち上がる。17と18は口縁端部を丸く収め、19は小さく内側へ曲げる。とともに17世紀後半のものである。第34図29・30は鉄製の釘である。第36図2は燧平瓦で、3は腰瓦(壁に使用される煙瓦)である。表には図に破線で示したとおり色が変色した箇所がある。破線の外側が本来の色で、内側が退色したような白っぽい色になっている。表面の辺中央には方形の凹みがあり、壁に取り付ける際に釘で打ち留められていた箇所である。この凹みは実測図下の辺の割れ口部分にもあったようだ痕跡が残っている。第40図8・9は砥石である。

SK33(第19図) 20は肥前産磁器小坏、21は肥前産磁器碗である。13は中国産青磁鉢か。22は産地不明陶器土瓶、23是在地産土師器皿で体部から口縁にかけて大きく開き端部を丸く収めている。17世紀後半のものであろう。

SK34(第20図) 1は漳州窯の磁器碗である。高台には砂が付着し、疊付は10/12程度の範囲で打ち欠かれたようになっている。2は肥前産磁器碗で口縁部に口紅が施されている。また体部上方口縁部附近には型紙摺りで七宝文が施されている。高台内には二重圓線が巡る。17世紀後半～18世紀前半のものであろう。3は肥前産磁器碗で青磁染付、見込にコンニャク印判ではあるが花びらなどが鮮明にわかる五弁花、高台内に「大明年製」銘がある。18世紀前半のものである。4も肥前産磁器の小広東碗で、18世紀後半のものである。5は中国産磁器皿で、高台に砂が付着している。疊付は無軸、高台内は中心部が無軸となっており、褐色に変色している。6・7は肥前産磁器皿で、6は内面に虎の絵が描かれている。17世紀中頃～後半のものか。8・9は肥前産磁器鉢である。9は焼縫痕が見られ高台は蛇目四型高台である。18世紀末のものか。10は肥前産陶器皿で見込に胎土目跡が4つ残る。16世紀末～17世紀初頭のものである。11は17世紀中頃～後半に盛行する肥前産京焼風陶器か。12は陶器皿である。13は肥前産陶器鉢で、白泥による刷毛目文様である。見込に砂目跡が残る。18世紀代のものであろう。14は越前産陶器鉢で、19世紀代のものである。15是在地産施釉土器皿で同破片がSX04からも出土している。内面は型押し文様で木目文様になっており、口縁には沈線が5条巡る。刻印「井□」がある。底部は布痕が残る。広坂遺跡のSK2380から類似品が出土している。16是在地産土器秉燭。17・18是在地産土師器皿で、体部から口縁にかけて開き、丸底である。17世紀末頃のものであろう。隣接するSK33の古い土器が混在しているがSK34は18世紀末～19世紀初頭の土坑であろう。

SK35(第21図) 1は肥前産磁器小坏で見込に胎土目風の付着物がある。17世紀中頃のものであろう。2は瀬戸産磁器碗で19世紀代に入るものである。周囲からの混入品か、この磁器のみ年代が新しい。3は肥前産磁器皿で青磁釉がかけられ、見込みは蛇目釉剥ぎしてある。17世紀中頃～後半にかけて作られたものであろう。4は青磁の香炉である。底部の削りこみは浅く、高台内を鉄泥のような釉で塗ってある。肥前産であろうか。隣接するSK41でも同一の破片が出土した。5は肥前産陶器碗で呂器手と呼ばれる碗である。やや小ぶりで外面には緑釉で文様が描かれている。17世紀中頃～後半に作られたものである。6・7は肥前産陶器碗で京焼風陶器である。口縁部に口紅、高台の外面から内面にかけて鉄軸がかけられている。17世紀中頃～後半にかけて作られたものである。8は肥前産陶器すり鉢で17世紀後半に多く作られたものである。9～13是在地産土師器皿で体部から口縁部にかけて開き、底部が丸いことから、概ね17世紀後半～末頃に作られたものと考えられる。

SK36(第21図) 14は肥前産陶器すり鉢で底部が糸切りになっているものである。17世紀後半に多く作ら

れたものである。15は在地産土師器皿で体部から口縁部にかけて開き、底部が丸底であることから17世紀末頃のものと考える。

SK37(第21図)16は肥前産磁器碗で、雲龍文を描いた小広東碗である。19世紀に入るものであろう。17は肥前産磁器碗で外面文様は型紙摺りである。17世紀後半～18世紀前半にかけて作られたものである。18は肥前磁器皿である。17世紀後半～18世紀中頃に作られたものか。19は肥前磁器皿である。20は产地不明の陶器壺である。

SK38(第22図)1は肥前産磁器蓋で、外面にコンニャク印判で文様が付けられている。17世紀後半～18世紀後半代のものか。2は京・信楽産陶器の煎じ碗で、灰釉と透明釉をかけ分けし、内外面に色絵付けしている。特に内面見込は目跡2つと傷跡1箇所を隠すように水色の花模様で絵付けしている。

SK39(第22図)3は在地産土師器皿で、底部は小さく平坦気味。体部見込際に凹線が巡る。18世紀初頭のものか。

SK40(第22図)4は肥前産磁器小杯、5は肥前の京焼風陶器碗で、透明釉を施した後、鉄釉で高台外面と口縁部に口紅を施している。17世紀中頃～後半にかけて作られたものである。6・7は在地産土師器皿で、体部から口縁にかけて開き、口縁端部を丸く収める器形である。17世紀後半のものか。

SK41(第22・34・36図)第22図9は肥前産磁器碗で、白磁に青・緑・黒で絵付けしている。17世紀中頃～後半のものか。10は肥前産磁器碗で、外面にコンニャク印判で模様を付けている。18世紀前半のものか。11は产地不明の磁器瓶で外面に鉄釉がかけられている。12は肥前産磁器仏飯器で、杯部は青磁釉がかけられ、底部は無釉で高台内の削りこみは浅い。13は肥前産磁器皿で内面には矢羽根文が描かれ、見込は蛇目釉剥ぎされている。波佐見の木場山窯で17世紀中頃～後半にかけて多く生産された製品であろう。高台には砂が付着している。14は肥前陶器皿で外面が透明釉、内面が銅緑釉で、見込は蛇目釉剥されている。17世紀中頃～後半のものか。15～18は在地産土師器皿で17世紀後半～17世紀末のものか。18は底部に大きさの異なる穿孔が2箇所残る。地鎮などに使用された特別な皿か。第34図31は鉄製の釘である。第36図4～8は瓦である。4は焼瓦の丸瓦で穿孔が1箇所ある。内面には刺繍痕が残る。5は赤瓦の平瓦、6～8は焼瓦の腰瓦である。このうち6と8には破線部分で変色が見られ、「〇堺」の刻印が見られる。7は「〇十」の刻印が見られる。

SK42(第22図)第22図8は肥前産磁器皿である。

SK44(第23図)1・2は肥前産磁器小杯である。1は17世紀中頃～後半のものか。2は型紙摺りで花模様が描かれている。17世紀後半～18世紀前半にかけてのものである。3～6は肥前産磁器碗で時期は概ね17世紀後半代のものである。6は鉄釉と珊瑚釉をかけ分けたもので、形状は筒形を呈する。7はミニチュアの鏡子である。8は肥前産磁器で青磁の皿である。色調は白に近く、見込は蛇目釉剥ぎされている。17世紀中頃～後半のものである。9は肥前産陶器すり鉢で17世紀後半のものである。底部は回転糸切りになっている。10～12は在地産土師器皿で、丸底で体部から口縁にかけて開く。17世紀末頃のものである。

SK46(第24・34・39・43図)第24図1・2は肥前産磁器碗である。1は波佐見の製品と思われる。見込を蛇目釉剥する。17世紀後半～18世紀前半のものである。2は青磁染付で、口縁部に鉄釉で口紅が施してある。18世紀前半のものであろう。3は肥前であろうか。磁器の蓋物で、漆縫痕がある。4は京・信楽産の陶器碗である。外面に鉄絵、外面底部に縱縞文様の陰刻が巡る。5は肥前産陶器すり鉢で、17世紀末～18世紀中頃に作られたものである。6は軟質施釉土器碗である。7・8は在地産土師器皿で内面見込み付近に凹線が巡る。17世紀末～18世紀初頭のものか。9は在地産焼塙壺で、鉢形のものである。第34図21は不明銅製品である。第39図2は袴を着た男性の土人形である。第43図18は板状木

製品。19は棒状木製品で先端が尖るよう加工されている。

SK47(第23・39・40図)第23図13は肥前産磁器皿である。型で成形されており輪花となっている。高台は蛇目凹型高台である。18世紀後半～19世紀代のものである。14は陶器天目碗、15は在地産土師器皿で内型作り成形、16は在地産土錘、いずれも18世紀末～19世紀前半のものである。第39図7は土製の独楽で、12はミニチュアの舟である。第40図10は蠟石で作成した印章である。11は凝灰岩製の砥石である。

SK50(第23図)17は高杯の脚である。古墳時代のものか。18は在地産土師器皿で平坦な広い底を持つ。外面には指頭圧痕がはっきり残る。17世紀前半のものである。

SK58(第24・39図)第24図10は在地産土師器皿で底部は平坦、体部はやや折れ気味に立ち上がり口縁部は丸く収める。凹線は見込近くに巡る。18世紀末～19世紀初頭のものであろう。第39図6は土製の独楽である。型成形で車輪のような文様が付けられ、中央に芯を通す穿孔が1箇所ある。

SK59(第24・37図)第24図11は肥前産磁器紅皿で、型打ち成形で貝殻風にしたものである。19世紀初頭のものか。12は中国産磁器碗である。漳州窯製か。13は在地産土器風炉である。第37図1は焼瓦の平瓦で「○△」の刻印が見られる。

SK60(第24・37図)第24図14は肥前産磁器碗で18世紀前半のものである。第37図2は焼瓦の腰瓦で「○堺」の刻印がある。

SK61(第24・37・43図)第24図15は肥前産磁器碗で高台内に砂が付着している。17世紀前半のものであろう。16・17は肥前産陶器すり鉢である。16は口縁にのみ鉄軸がかかる。17世紀前半のものである。17は玉縁の口縁で口縁部のみ鉄軸がかかる。17世紀後半のものである。18・19は在地産土師器皿である。体部から口縁にかけて開き、底部は丸みを帯びる。口縁端部は内側に小さく折れ曲がる。17世紀後半のものであろう。第37図3焼瓦の丸瓦である。内面は刺縫痕、コビキBによる粘土切り離し技法痕、棒状圧痕が見られる。第43図20～23は板状木製品、24は漆器椀で内面赤漆、外面は黒漆で、赤と金で花文様が描かれている。25は漆器の椀か皿である。内面赤漆、外面黒漆が塗布されている。

SK62(第25・37・43図)第25図1は肥前産磁器紅皿、2～5は肥前産磁器碗である。2の高台内には「富貴長春」銘、見込には手書きの五弁花が描かれている。18世紀後半代のものであろう。3は波佐見のくらわんか碗で外面には草花文や雪の輪文が描かれている。高台内には銘がある。18世紀中頃～後半のものか。4は内面口縁部付近に四方攢文が巡り、見込にコンニャク印判の五弁花がある。18世紀後半代か。5は青磁染付の筒碗で、内面にはコンニャク印判五弁花が見られる。18世紀後半代か。6は陶器蓋で把手が動物形(犬か)となっており、鉄絵や染付、白泥による装飾が見られる。7は在地産土師器皿で、体部から口縁にかけて内湾気味に短く立ち上がる。凹線は体部上方に巡る。18世紀後半代のものか。第37図4は焼瓦の平瓦である。第43図26～28は板状木製品、29は箸、30は桶等の持ち手であろうか、棒状の木製品である。31～33は桶側板で、籠痕が残る。31には焼印が見られる。34は桶の蓋で焼印が見られる。35・36は円板状木製品で、36には内外面に黒漆が塗られる。37は不明木製品。38は柄杓の容器部分か。39は差歛下駄である。

SK63(第44図)1は円板状木製品である。

SK65(第25図)8は肥前産陶器皿である。透明釉がかけられ、見込に鉄絵の一部が見られる。体部外下方から高台にかけて無釉。京焼風陶器であろう。9是在地産土師器皿である。丸底で体部内面に凹線が巡る。17世紀末～18世紀初頭のものか。

SK67(第25図)10は肥前産磁器の筒碗で、見込に五弁花文の一部、外面底部には折れ松葉の文様が見られる。18世紀中頃～後半のものか。

SK68(第25図)11・12は肥前産磁器小壺である。11は外面に蛸唐草文、12は外面に水裂文が描かれている。18世紀末～19世紀後半のものか。

SK70(第25図)13は肥前の波佐見産磁器碗で、外面にはコンニャク印判の文様、高台内には崩れた銘が見られる。17世紀後半～18世紀中頃のものであろう。

SK73(第25図)14は肥前産磁器猪口で、口縁部外面に雨降文が巡る。18世紀中頃のものか。15は肥前産陶器小壺か。16は陶器の小型壺か。17は在地産土師器皿である。比較的大ぶりで体部から口縁にかけて開き、丸底である。17世紀末頃のものであろう。

SK76(第25図)18は在地産施釉土器の小壺か。型打ち成形で六角形になっている。内面は茄子が2個描かれ、外面には小花のスタンプが巡る。19・20は在地産土師器皿で、体部内面に凹線が巡り丸底であることから17世紀末～18世紀初頭のものと考えられる。

SK77(第25・39図)第25図21は肥前産磁器小壺である。22・23は肥前産磁器小壺である。22は内面にも釉がかかっているが、底部外面は無釉である。23は内面が無釉である。蓋が付く薬壺か。24・25は肥前産磁器碗で18世紀前半のものか。26は肥前産磁器皿で口縁部に口紅が施され、輪花になっている。17世紀中頃のものである。27は越中瀬戸産陶器碗である。28は瀬戸美濃産陶器碗である。18世紀中頃のものか。29は美濃産陶器皿で長石釉がかかる稜皿。30～32は在地産土師器皿である。30・31は17世紀末のもので、32は18世紀初頭のものであろう。第39図10は陶器製の水鳥で、全体に透明釉、首後ろに染付、尾に鉄釉が施されている。大阪の堂島窯跡出土品に似たものがある。

SK78(第26図)1は瀬戸美濃産陶器すり鉢である。2は在地産土師器皿である。比較的大ぶりで体部から口縁にかけて開き、丸底だが凹線が入らないタイプである。17世紀後半のものである。

SK80(第26図)3は陶器蓋で、外面に桜のスタンプが見られる。4は瀬戸美濃産陶器鉢である。18世紀後半以降か。

SK85(第26・27・40・44図)第26図9・10は肥前産磁器碗である。9は筒碗で外面上部に四方擗が巡る。高台には砂が付着し、文字が書かれている。17世紀前半代のものであろう。11は中国産磁器皿である。漳州窯であろう。12は肥前産陶器小壺で内面及び体部外面中程まで白っぽい灰釉がかけられている。体部下から高台は無釉。口縁部が外反する。17世紀前半のものか。13は産地不明陶器の茶入である。外面は鉄釉と薺灰釉のかけ分けとなっており平底の底部には粗い砂が少量付着している。胎土の一部には黒色土が練り込まれているようにも見える。14は肥前産陶器の碗であろうか。15・16は肥前産陶器皿で、高台内と見込みに砂目が付着している。17世紀前半のものである。17は産地不明の水盤または灰器のようなものであろうか。鉄絵や刷毛目で装飾が施されている。18は産地不明の火入か。白泥で文様を描いてあり底部には三足が付く。第27図1は肥前産陶器鉢で見込と高台内に砂目痕が残る。17世紀前半代のものである。2は肥前産陶器すり鉢で、17世紀前半のものである。3は越中瀬戸産のすり鉢か。4は肥前産陶器の壺で17世紀代のものである。5～13は在地産土師器皿である。平坦な底部から体部が比較的急に立ち上がり口縁部は内湾気味に收めている。主に17世紀前半代のものであろう。第40図12は凝灰岩製の砥石である。第44図2は板状木製品、3は棒状木製品、4・5は箸である。6は櫛の様な不明木製品である。7は漆器蓋で、内面は赤漆、外面は黒漆が施され、黄と赤で花の文様が描かれている。8は漆器椀で内面に赤漆、外面には黒漆が塗られ、赤で花の文様が描かれている。9は円板状木製品である。

SK87(第26・44図)第26図5・6は在地産土師器皿で、小さめの底部から体部が開き気味に立ち上がる。口縁端部を丸く收め、丸底であることから、17世紀後半のものであろう。第44図10は漆器椀で内面赤漆、外面には黒漆が施されており、高台内に赤漆で丸が描かれている。

SK88(第34・37図) 第34図9・10は寛永通宝である。9は新寛永、10は古寛永である。第37図6は赤瓦の軒桟瓦である。瓦を留めるための穿孔が2箇所見られる。

SK91(第37図) 7は樵瓦の丸瓦である。内面に刺縫痕とコビキB技法による粘土切り離し技法痕が見られる。

SK94(第26・37図) 第26図7は磁器の火入で、外面に青磁釉と釘彫りのような装飾が見られる。8は在地産土器皿で、小さめの体部から口縁にかけて開き、口縁端部を内側へ小さく折り曲げる形で17世紀後半のものか。第37図8は樵瓦の平瓦で、「○堺」の刻印が見られる。

SK96(第44図) 11は板状木製品で、穿孔が1箇所ある。

第3節 井戸(SE)出土遺物

SE02(第28図) 1は京・信楽産陶器碗で基筈底となっている。灰釉がかけられており、内面には貫入が多い。外面は火を受けたのか白っぽく変色している。2は肥前産陶器碗で陶胎染付である。17世紀後半～18世紀中頃に作られたものである。3は須佐産陶器すり鉢である。高台内には工具痕が残る。4は在地産土器皿で、内面の凹線が体部上位に巡る。18世紀後半のものであろう。

SE03(第28・38・41・44～47図) 第28図5は肥前産磁器紅皿で、外面が貝殻状に型押し成形されやや青みがかった白磁釉がかけられている。6は肥前産磁器碗で17世紀後半～18世紀前半のものか。7は肥前産磁器の白磁の変形皿でロクロ型打ち成形である。第38図1は樵瓦の鎌桟瓦である。第41図1は泥岩製の硯、2は越前産笏谷石の製品である。第44図12は板状木製品で建築部材か。両端に加工痕や釘孔が見られる。13・14も板状木製品である。15・17は棒状木製品、16は杭か。18～20は円板状木製品で、18には焼印が見られる。「木越屋」か。21～25は桶側板で、21と22には酒瓶のような焼印が見られる。同一の桶であろう。26は不明木製品。第45図は建築部材であろうか。7を除く木製品にホゾやホヅ穴などの加工痕が見られる。

第46図と第47図はSE03の井戸枠として転用されていた舟の底板である。出土した材の厚さは6.4cm～8cmで、それぞれ3枚の板を結合してある。これらの底板を説明するために第47図の模式図に表したとおり、便宜的に板ごとにa～kのアルファベットを振った。実測図の左側が表面で、断面図・側面図を挟んで右側が裏面である。また、第46図の1と2、第46図3と第47図1はもともと接合していたが、井戸枠として使用する際に第46図の1と2は裁断し、第46図の3と第47図1はホゾを外し、真中の板は折ったと考えられる。前グループと後グループは同一の底板であるかは不明であるが、板厚などは似ている。

第46図1の底板について、aには側面からbに向かって2箇所の通り釘が残存し、1箇所通り釘があったと思われる孔がある。また、a側面には漆のような暗褐色の付着物が所々に見られ、柵板との接着剤として使用したと考えられる。柵板と結合するために2箇所舟釘が打たれていたと思われ、1箇所のみ舟釘が残存している。舟釘を打ち込む際に底板の表面を彫り凹めてある。この凹みに埋木があったと考えられるが残存しない。cの板にはbに向かって4箇所の通り釘があり通り釘が残存している。柵板と結合するための舟釘が打たれた思われる孔が2箇所残る。cの側面にも漆のような暗褐色の付着物が見られる。cの裏には木釘と考えられるものが3箇所打たれ、その孔と思われるものが2箇所見られる。bの裏にも木釘の穴と思われるものが1箇所ある。a・b・cの上面にはホゾがあつたのか痕跡が残っている。

第46図2の底板について、dの板には表側に3箇所、柵板と底板を結合するための舟釘が打たれている。その際、打ち込む部分を方形に穿ち、底から柵板に向けて舟釘を打っている。穿たれた穴には

釘隠しのための埋木がはめ込まれていたと考えられるが残存しない。fの板も同じように棚板に向かって舟釘が3箇所打たれている。dの裏にはやはり釘を打ち込むための穴が彫られ、通り釘がdからeに打たれている。ここは埋木が残存している。同じものがfの裏側にもあり、通り釘がfからeに向かって打たれている。dとe、eとfを結合するためにチキリが埋め込まれている。チキリは底板の木目と逆の木目にしてあり、強度を考えてつくられている。整理作業中に、dとe結合しているチキリが外れたので、チキリの裏を見ると漆が塗られたような痕跡があった。eとf接合部には木の皮のようなものが挟まっている。木と木の間にマキハダ(植肌：檜などの皮を纖維状にしたもの)と漆を詰め充填剤として使用したものであろう。

第46図3の底板について、3もほかと同様にもともと3枚の板を結合していたと考えられるが、左側の板は残存していなかった。gの表面右には、gとhを結合するための鎌が打たれている。この鎌の上には鎌隠しの薄板が漆で貼られている。この鎌の反対側にも、gと現存しない別材を結合するための鎌を打ち込んだ痕が見られる。また、hの板の下には、kと結合するためのホゾが設けられている(kにはホゾ穴が穿たれている)。ホゾで結合した上からも鎌で繋いであった痕跡が残っている。hの底板表面には棚板と結合するための舟釘跡が3箇所あり、釘隠しの埋木は残っていない。これらの舟釘の下には鉄の釘が3箇所に打たれている。hの裏には舟釘3箇所、釘穴9箇所が残る。gの裏には舟釘1箇所、釘穴1箇所が残る。

第47図1の底板について、iの板には側面に3箇所、棚板と底板を結合するための舟釘が棚板方向から底板に向かって打たれている。また、2箇所に平たい木製の楔のようなものが打ち込まれている。iの板の表面下方には底板から棚板方向へ舟釘を打ち込んである。その際、打ち込む部分を長方形に穿ち、釘隠しのための埋木がはめ込まれていた形跡が残る。iの板中程にはiとjを結合するための通り釘を打ち込むために長方形に表面を凹ませてあり、釘隠しの埋木が残存している。さらにiとjを結合するために鎌が打たれ、鎌隠しの薄板が漆で貼り付けられている。iの上方には第46図3と結合するための鎌の跡が残る。iの裏面には舟釘4箇所、木釘が1箇所残る。kの板には底板から棚板に向けて3箇所舟釘が打ち込まれている。kの表面下方にもiと同様に底板から棚板へ舟釘を打ち込むため底板表面を長方形に穿ってあり、釘隠しの埋木があったと考えられるが埋木は残存しない。kの表面中程には、kとjを結合するための鎌と、通り釘を打ち込むための長方形の凹みがあり、凹みには釘隠しの埋木が残る。kの上方には第46図3のhと結合するための鎌の痕が残る。k裏面には舟釘4箇所と木釘が1箇所残る。iとkの上端部にはホゾ穴が造られ、第46図3と結合できる。真中のjと第46図3のgは同じ板である。ホゾで結合するあたりで折られている。

SE04(第28・48・49図)第28図8は陶器瓶で、漆緞されている。産地は不明。第48図1～8と第49図1～5はSE04の井戸枠で桶を転用している。外面に籠跡が残る。

第4節 小穴(P)出土遺物

P2(第28図)9は肥前産陶器皿で見込に胎土目が1つ、高台に胎土目痕が二つ見られる。16世紀末のものである。10は肥前産陶器瓶であろうか、高台は極浅い。内外面に黄白色の釉がかかるが、熱を受けたように火ぶくれを起こし光沢はない。外面の釉の一部は剥がれている。11は在地産土師器皿で17世紀中頃のものか。

P3(第28図)12は瀬戸美濃産陶器皿である。灰釉がかかっている。

P7(第28図)13は京・信楽産陶器碗で、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。外面に鉄絵が見られる。

P11(第28図)14は在地産施釉土器の植木鉢である。底部に穿孔が1箇所ある。

第5節 溝(SD)出土遺物

SD01(第28・29図) 第28図15～21は土師器壺である。15は有段擬凹線の口縁部を持つ。22と23は壺か壺の底部である。24と25は土師器壺である。24は段を持つ口縁部のみ残る。第29図1も土師器壺で、2は壺か壺か不明である。3～6は土師器高杯で、7～9は高杯あるいは器台の脚部である。10は土師器の小型壺、11は埴形土器である。概ね古墳時代前半のものであろう。

SD03(第29・34図) 第29図12は在地産土師器皿である。開き気味の体部で内面に凹線は見られない。N4類で17世紀末頃のものか。第34図32と33は鉄製の釘である。

SD04(第29・34・37・40・49図) 第29図13は瀬戸美濃産磁器碗で外面に雲龍文の釘彫りと瑠璃釉がかけられている。高台付無釉で高台内は透明釉。焼継がある。19世紀のものか。14は肥前産磁器皿で型押し成形。内面は全体が菊花でその中に小さい2種類の菊花が散らされている。15は九谷産硬質施釉陶器皿で胎土は乳白色、細かな貫入がある。16は九谷産陶器すり鉢である。底部外側から高台にかけ鉄泥を塗り、外側底部から内面にかけては鉄釉をかけてある。第34図8は牡蠣貝で作られた貝杓子か。柄と結合するための穿孔が1箇所認められる。20は煙管の雁首である。34は鉄製の舟釘である。第37図5は焼瓦の平瓦である。第40図13は泥岩製の砥石である。第49図6～8は円板状木製品である。

SD05(第29図) 17は肥前産磁器の青磁の皿で見込を蛇目釉剥したものである。高台は無釉で砂が付着する。漆継痕があり、口縁部の1/6程度に煤のような黒色の付着物が付いていたようにも見える。灯明皿として使用したものか。17世紀後半～18世紀前半のものであろう。

SD06(第30図) 1は須恵器の壺。2は肥前産磁器碗で高台は浅く小さい。18世紀後半～19世紀初頭のものである。3は产地不明の陶器すり鉢で小型である。外側底部以外に鉄釉を二度かけている。4は在地産土師器皿で底部が平坦で内面に凹線が入る。18世紀末～19世紀初頭のものである。

第6節 そのほかの遺構(SX)出土遺物

SX01(第30・39図) 第30図8は肥前産磁器小杯で白磁に赤で色絵付けされている。高台が径15mmと非常に小さいので紅皿の可能性が高い。9は肥前産磁器碗で、高台内に「大明年製」の銘がある。17世紀後半～18世紀前半のものか。高台部分に漆継痕が残る。10は肥前磁器の小丸碗である。見込に手描きの五弁花が見られるが簡略化されたものである。また、見込の透明釉が薄く削られ、無数の傷跡が残る。口縁部付近内面には手描きの四方擗が巡る。18世紀中頃～後半のものか。11は肥前産磁器蓋物である。12は肥前産磁器の薄手半球碗である。13は肥前産磁器皿で鍋島の色絵皿である。内面には菊花文や赤で渦巻き、外側はおそらく七宝文が染付で描かれている。高台は高く外側に櫛歯文が描かれる櫛目高台である。18世紀代のものか。14は肥前産磁器皿で蛇目四型高台に「渦福」の銘が見られる。見込には松竹梅文が巡る。18世紀後半のものか。15は肥前産磁器蓋である。16は陶器碗で、鉄釉が体部外側から内面にかけて塗られている。外側には長石釉で模様が付けられ、2箇所のみ凹ませてある。瀬戸美濃産か。17は在地産土師器皿で体部内面に凹線が巡る。18世紀後半のものか。18是在地産施釉土器皿である。第39図8は土製の犬である。11は舟で、穿孔が2箇所ある。

SX02(第30図) 5は肥前産陶器皿である。見込に胎土目跡が4箇所残る。16世紀後半～17世紀前半のものである。6は肥前産の京焼風陶器碗で、高台内に「森」の刻印がある。17世紀中頃～後半のものである。7は在地産土師器皿で、底部がやや丸みを帯び口縁が外反し端部がやや内側に折れ曲がる。17世紀後半のものであろう。

SX03(第31・37・39図)第31図1は肥前産磁器紅皿で、外面に蛸唐草文を型押してある。19世紀中頃～後半のものである。2は肥前産磁器小壺。3は肥前産磁器の小丸碗で口縁部内面に手描きの四方擗が巡る。18世紀後半～19世紀初頭のものか。4は肥前産磁器皿で高台が蛇目四型高台になっている。18世紀後半～19世紀後半のものか。5は肥前産の京焼風陶器皿で、見込には山水文様が描かれ、高台内に「柴」の刻印がある。17世紀中頃～後半のものである。6は九谷産陶器鉢であろうか。灰釉がかけられているが、体部下方から高台にかけては無釉となる。内面に鉄釉の模様がある。高台内に墨書きが見られる。7～9は在地産土器師器皿で、7と8は内形作り成形、19世紀前半以降のものである。9は17世紀末頃か。10は在地産土器火鉢で、外面に赤漆が塗布してある。11は在地産土器焼塙壺で鉢形を呈する。第37図9は焼瓦の丸瓦である。第39図13は土製のミニチュアの台座である。

SX04(第31・32・34・38・39・40図)第31図12は肥前産磁器ミニチュア碗である。体部外面には草花文が描かれている。13は肥前産磁器小壺としたが、高台径が14mmしかないで紅皿の可能性が高い。外面は金・朱・不明の3色で絵付けしてある。14は肥前産磁器小壺である。高台径は広い。小壺としたが、ミニチュア碗の可能性もある。15は肥前産磁器小壺としたが、器高が低く浅いため紅皿の可能性がある。外面に染付文様がある。17は肥前産磁器の台付きの小壺で外面下部に斜行カンナ目が認められる。18～22は肥前産磁器碗である。21は色絵素地か。22は18世紀後半の小広東碗である。23は肥前産磁器皿で輪花になっている。見込には五弁花が見られる。24も肥前産磁器皿で、熱を受けたのか全体が白濁している。焼継ぎされている。25は肥前の波佐見産磁器皿で、高台内には「満福」の銘がある。18世紀後半～19世紀初頭のものである。26は肥前産磁器仏飯器で底部に砂が付着している。外面は斜格子文である。27・28は肥前産陶器の刷毛目碗である。27は被熱したように釉が白く変色した箇所がある。17世紀後半～18世紀後半のものである。第32図1は京・信楽焼の碗で、外面に鉄泥をかけ、高台内を拭き取り無釉としている。その上に白泥で文様を描き透明釉をかけてある。2は肥前産陶器の呉器手碗で外面は熱を受けたように白濁している。縁釉で文様が描かれる。漆緋痕も見られる。17世紀中頃～後半のものである。3は在地産質施釉陶器碗であるが、内外面にかけてあった釉は痕跡のみが残る。見込に別の碗の高台痕と釉が溶けて固まったような黒色付着物がある。サヤ鉢として使用したものか。高台はもともと無釉であったが、煤が骨付を中心付着している。4は産地不明の陶器鉢で3足が付く。5は産地不明陶器の製品で高台が3足になっている。外面は鉄泥を塗布しその上に白泥で文様を付けてある。内面と高台は無釉。6は産地不明陶器蓋で四角く成形してある。鉢は丸紐状の粘土を貼り付けてある。7は須佐産陶器すり鉢である。口縁が玉縁で外へ開く感じに成形されている。8は産地不明陶器の甕で、灰釉に鉄釉を流し掛けしてある。9は瀬戸美濃産陶器鉢である。10は産地不明陶器灯明皿で、赤褐色の胎土で内面のみ鉄泥が塗布されている。灯芯油痕が口縁部全周に付いている。11～16は在地産土器師器皿である。11～13は丸底で体部上位に凹線が巡る。18世紀中頃か。14～16は底部が平坦で体部はやや折れ気味に立ち上がり、口縁部は丸く収める。18世紀末～19世紀初頭のものか。17は在地産土器師器皿であるがロクロ成形で大型である。内面は内面黒色土器のように黒く、凹線が巡る。18は在地産土器秉壺。19と20は在地産土器の焼塙壺の蓋と身(砲弾型)である。21・22は在地産土器火鉢とともに3足で外面に花の刻印が見られ、口縁部に使用のための敲打痕が残る。第34図23は銅製の針金のような細い棒で、先端が丸まっている。第38図2～4は瓦で、2は赤瓦の丸瓦である。3・4は焼瓦の平瓦である。第39図9は土製の魚で、型合わせとなっている。15は土製のミニチュアの釜である。第40図14は粘板岩製の砥石である。

SX05(第30・37図)第30図19は陶器の水滴か。外面は型で菊花が表現されている。20は肥前産磁器碗で高台内に「大明年製」の銘が見られる。18世紀前半のものであろう。21～23は在地産土器師器皿である。

丸底で底部から口縁にかけて開き気味に立ち上がる。17世紀末のものか。第37図10は焼瓦の丸瓦で、「□上」の刻印が見られる。

SX06(第33・34図)第33図1～3は肥前産磁器小壺である。3は外面が一重網目文で、高台に砂が付着する。4・5は肥前産磁器碗で、5は高台内に「大明年製」の銘がある。また、外面の兩降文も丁寧に描かれている。18世紀前半のものであろう。6は九谷産の磁器碗であろうか。外面が被熱したように釉が白濁している。7は肥前産磁器皿で白磁の菊花文を型押しした製品である。口縁部に口紅が見られる。高台は蛇目四型高台。19世紀初頭～後半のものか。8は肥前産磁器で白磁の合子身である。9は京・信楽焼産陶器の小壺か。外面に鉄釉で梅が描かれている。高台は無釉。10は京焼陶器皿で外面に山水文が描かれている。11は肥前産陶器すり鉢で、口縁部は玉縁で、口縁部のみに鉄釉が施される。17世紀後半のものである。12は肥前産陶器甕で内面に格子目の当具痕が残る。17世紀後半のものである。13～17、19・20は在地産土師器皿である。13～17は小さめの底部から体部が開き気味に立ち上がる。端部を丸く收める。17世紀後半のものであろう。18は器壁が薄く体部から口縁にかけて丸く立ち上がり、底部中心はわずかにヘソ状に凹んでいる。口縁部には灯芯油痕が巡り灯明皿として使用されたと考えられるが、元々は焼塙壺の蓋として作成された可能性もある。21はロクロ製で搬入品か。広坂遺跡からもロクロ製土師器皿が出土しているが、21は広坂より胎土が緻密であること、胎土色の赤みが少ない、外面底部立ち上がりが急である点が異なる。22は在地産土器の土鍤である。第34図35・36は鉄製の釘である。

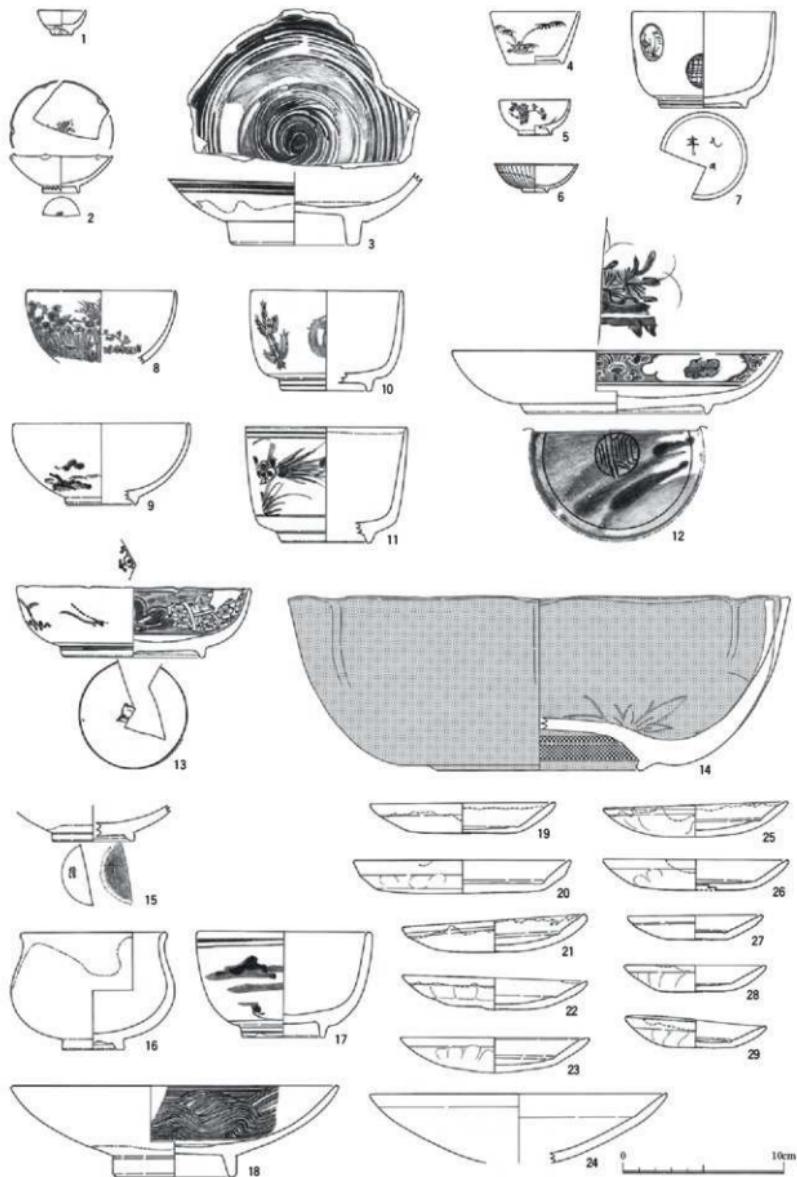
SX07(第33・37・40・49図)第33図23は肥前産磁器小壺で高台に砂目跡が1箇所見られる。17世紀前半のものである。24は肥前産磁器碗で筒形を呈する。見込に崩れたコンニャク印判の五弁花が見られる。18世紀後半のものであろう。第37図11は赤瓦の平瓦である。第40図15は黒の募石で頁岩製か。第49図9・10は板状木製品である。

第7節 整地層・包含層・攪乱出土遺物

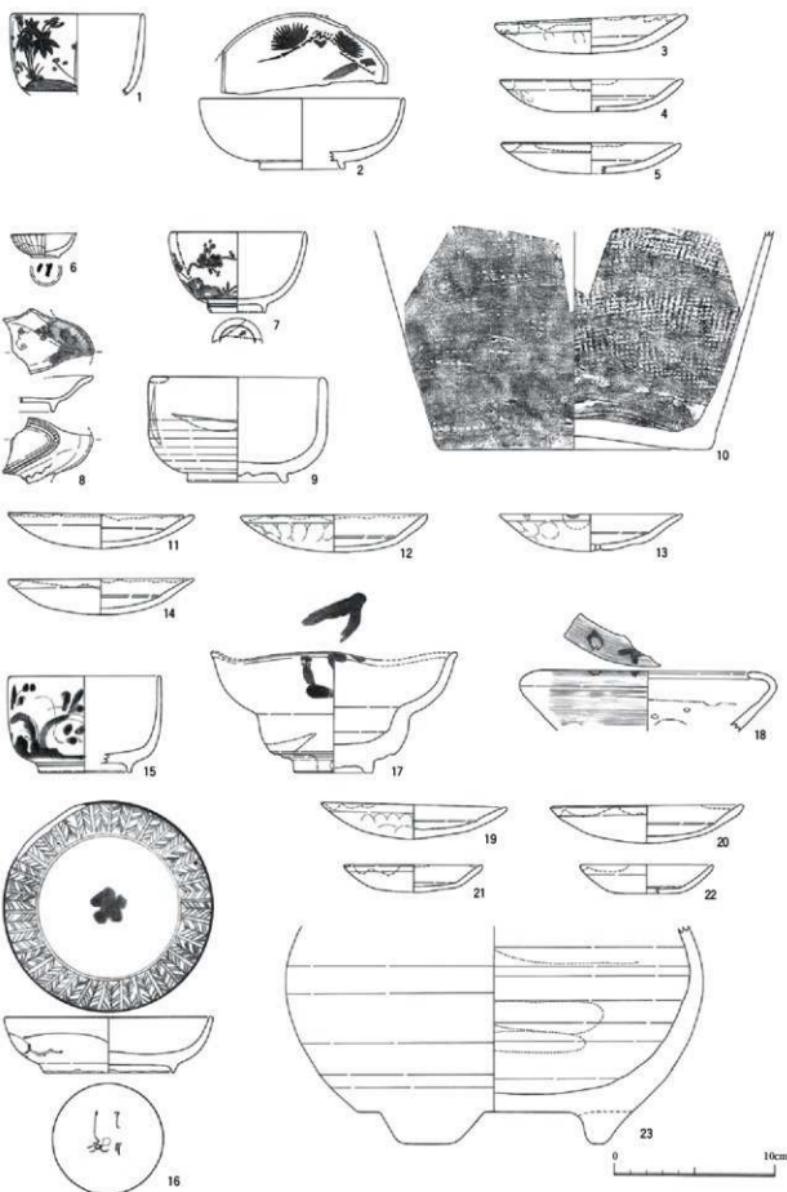
整地層(第34・38・39・41図)第34図1は肥前産磁器蓋物で17世紀後半～18世紀後半のものか。2は九谷産磁器皿か。3は肥前産磁器蓋で外面は菊花が型押ししてあり、底部の返し部分は梢円形に成形されている。菊花は赤で色絵付けされている。4は肥前産陶器鉢で二彩、刷毛目で装飾してある。5は珠洲焼の鉢。第38図5～11は瓦である。5・6は焼瓦の丸瓦で、5は「○」、6は「□上」の刻印がある。第39図3・4は土人形で、男性座像と狛犬である。第41図3は泥岩製の硯で内面は凹んでいる。4と5は黒の募石で頁岩製か。6は越前産笏谷石と考えられる緑色凝灰岩製の製品である。用途は不明。7は凝灰岩製の鉢か。

包含層(第38・39図)第38図12は焼瓦の雁振瓦。第39図14は土製のミニチュア釜の蓋である。

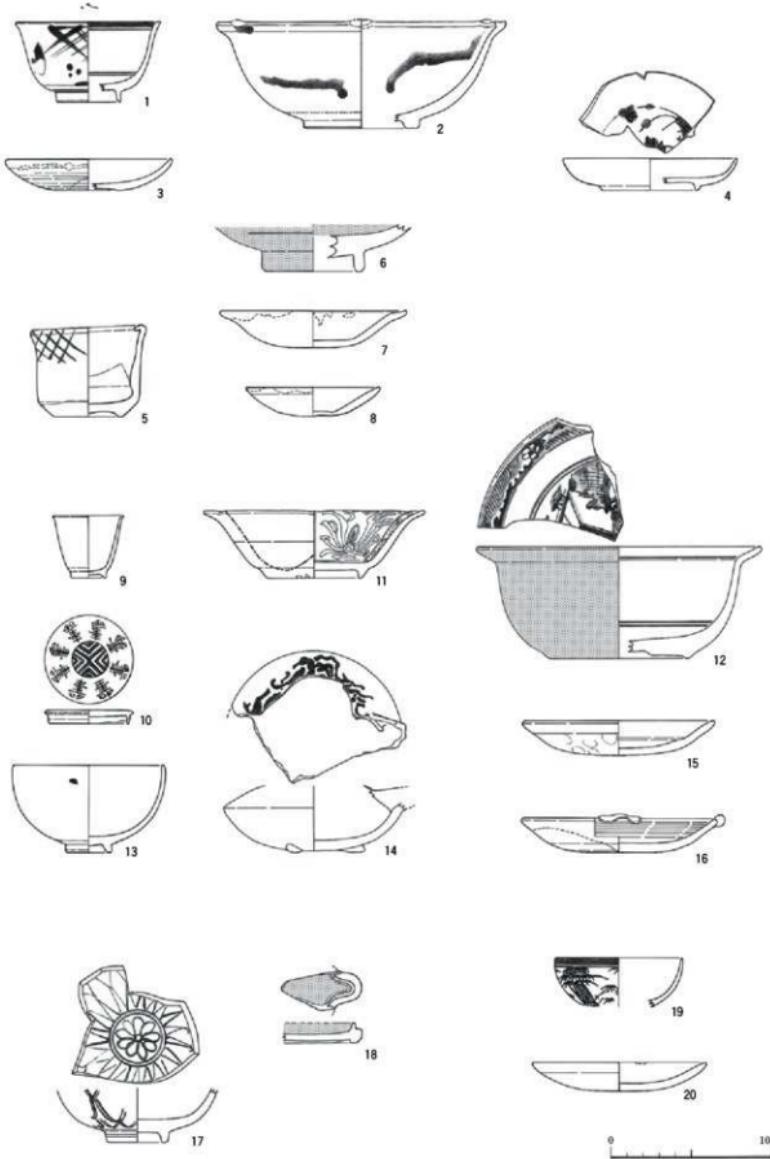
攪乱(第34図)第34図6は京・信楽焼陶器土鍋か。7是在地産土師器皿で、底部に穿孔が1箇所ある。18世紀前半のものか。11～17は古銭である。11は宋銭、12～14は新寛永で14は文銭。15は古寛永で、16は2枚が鋸でくっついている。片方は古寛永と判読できたが、もう片方は不明である。37～39は鉄製の釘であろうか。



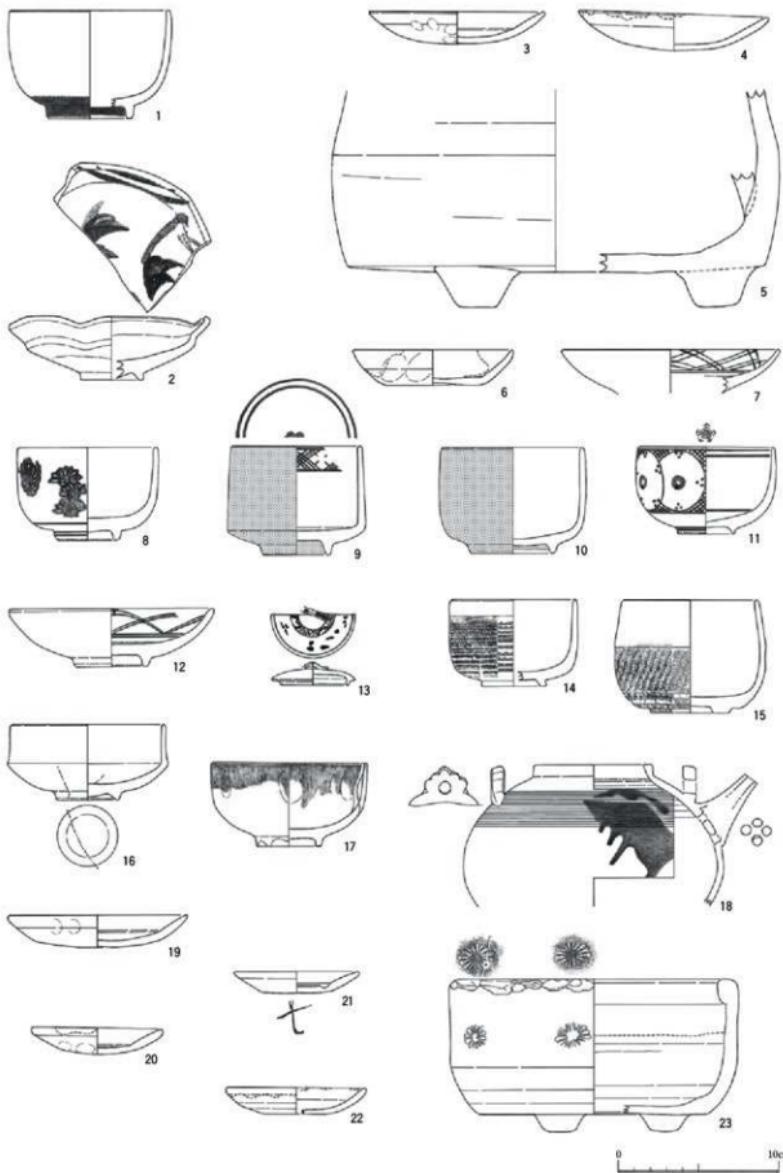
第14図 SK01、SK04、SK06出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]



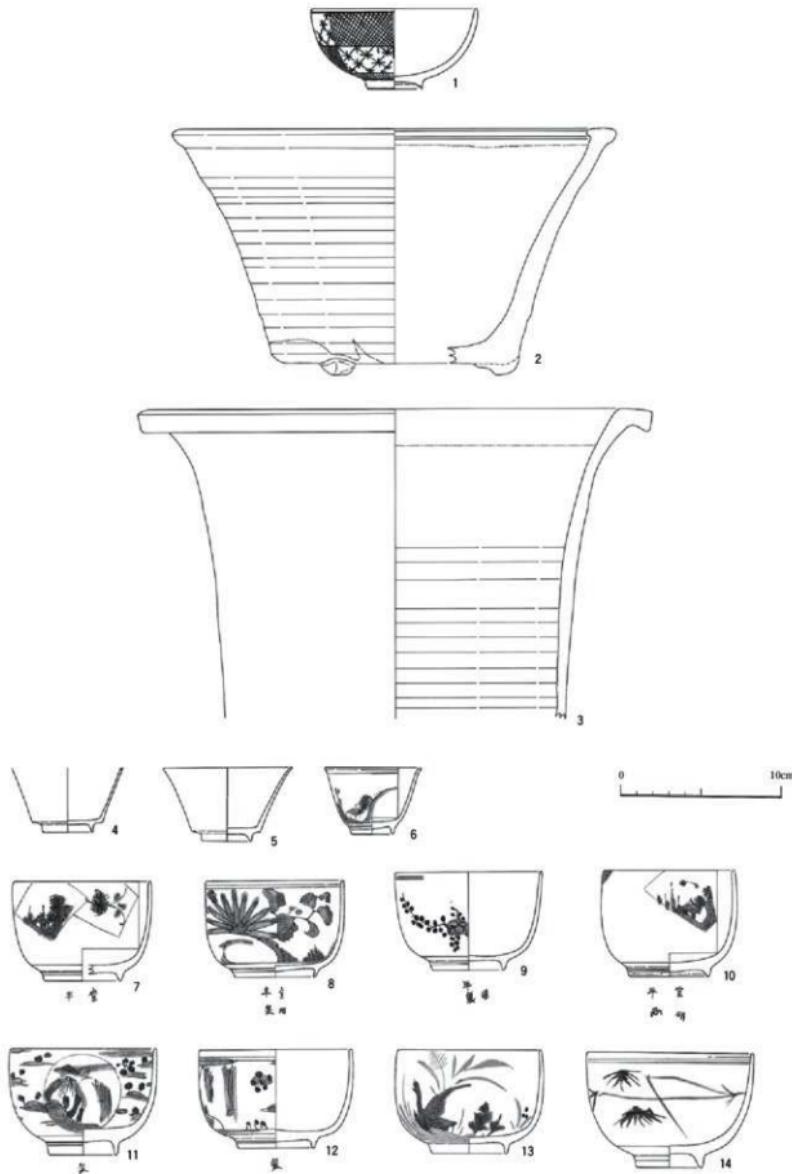
第15図 SK08、SK09、SK10出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]



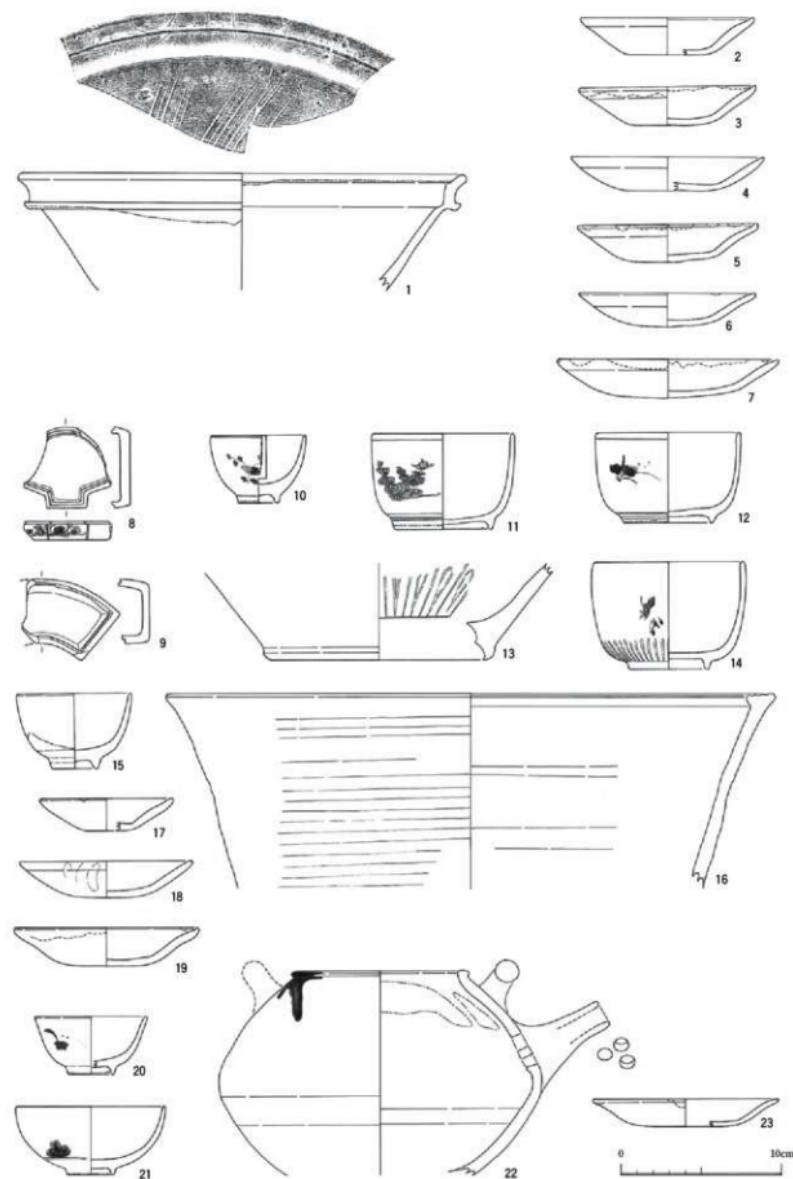
第16図 SK11、SK12、SK16、SK17、SK19、SK20、SK22出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]



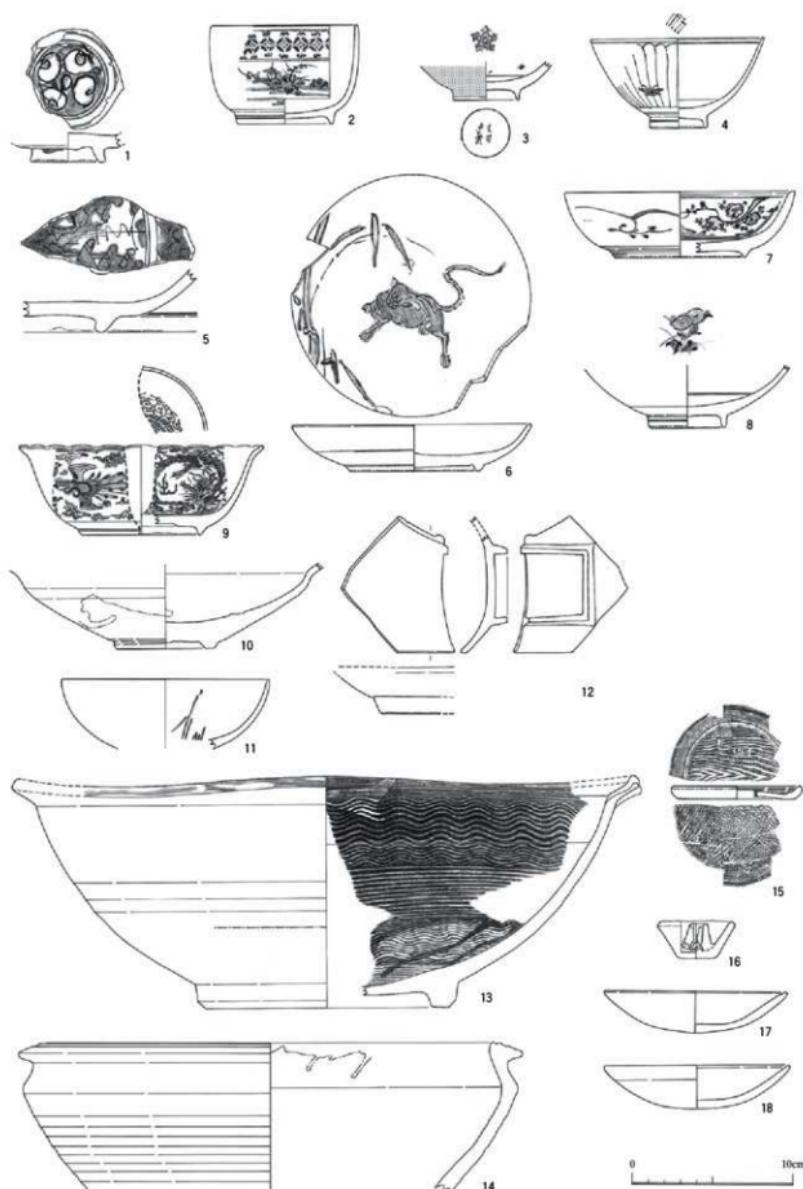
第17図 SK21、SK27、SK28、SK29出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]



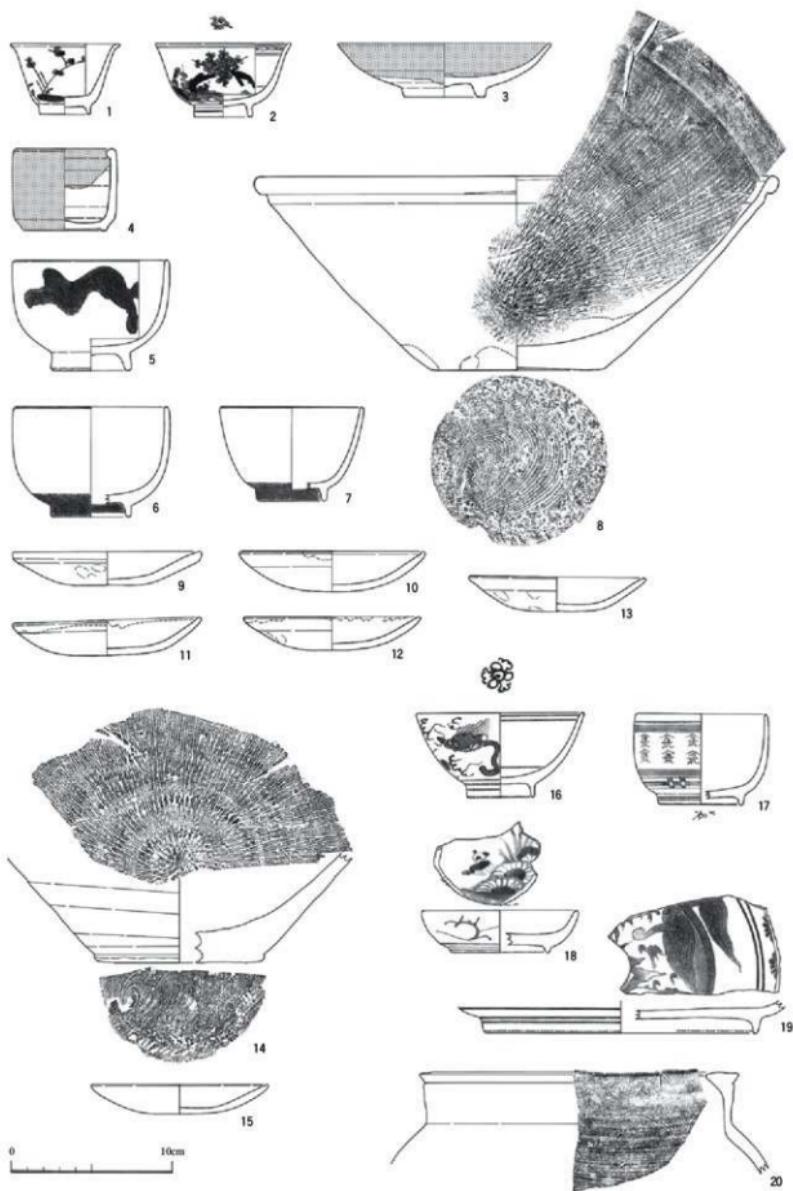
第18図 SK30、SK31出土陶磁器実測図 [S=1/3]



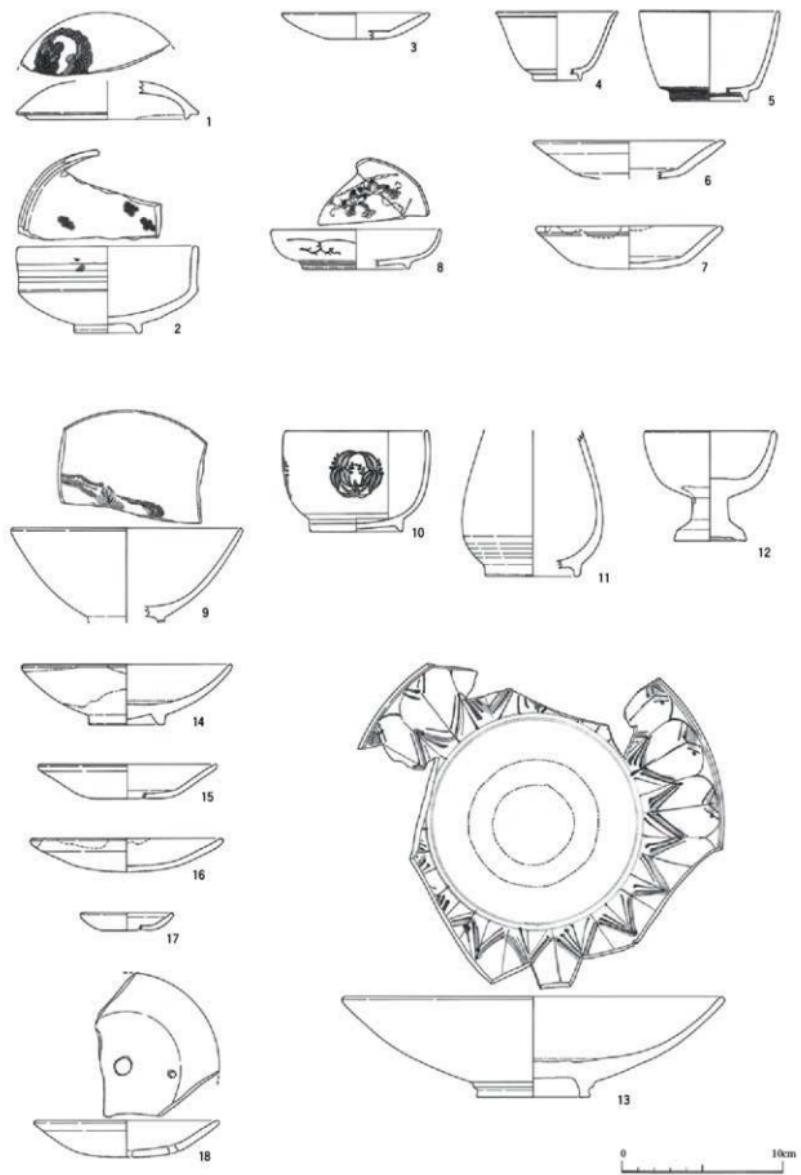
第19図 SK31、SK32、SK33出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]



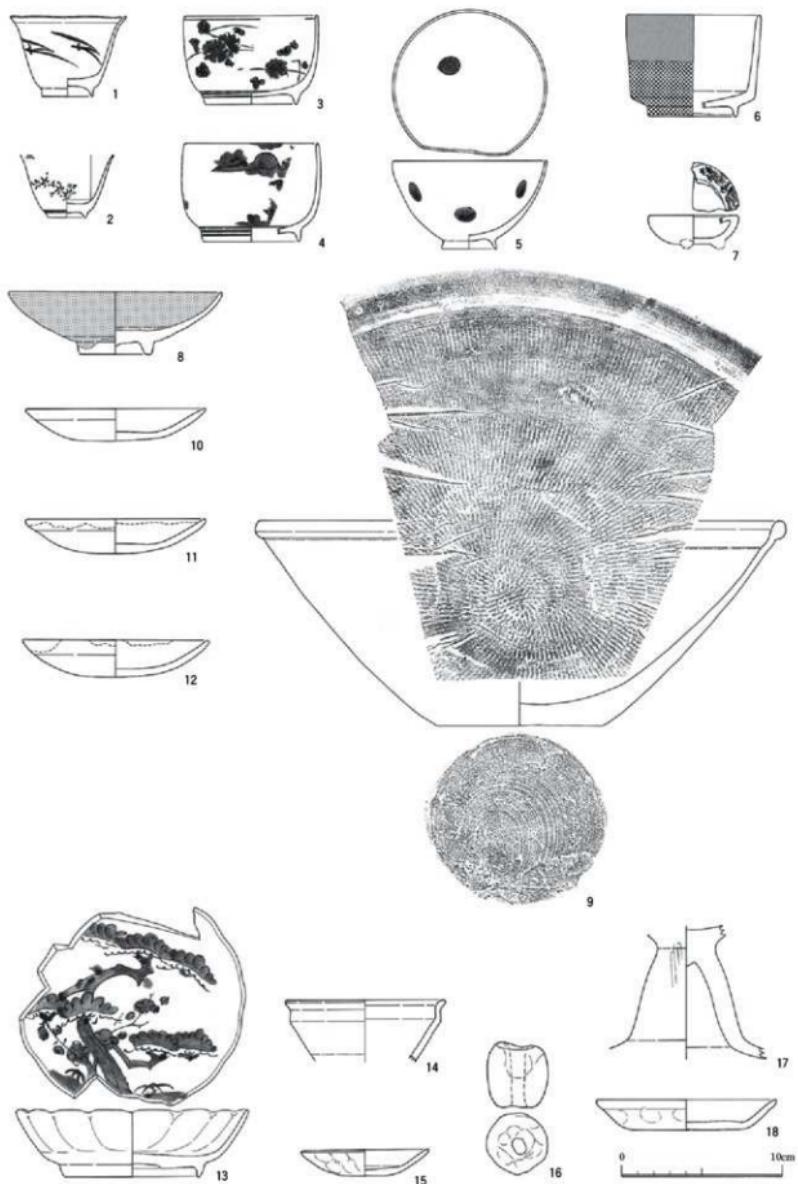
第20図 SK34出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]



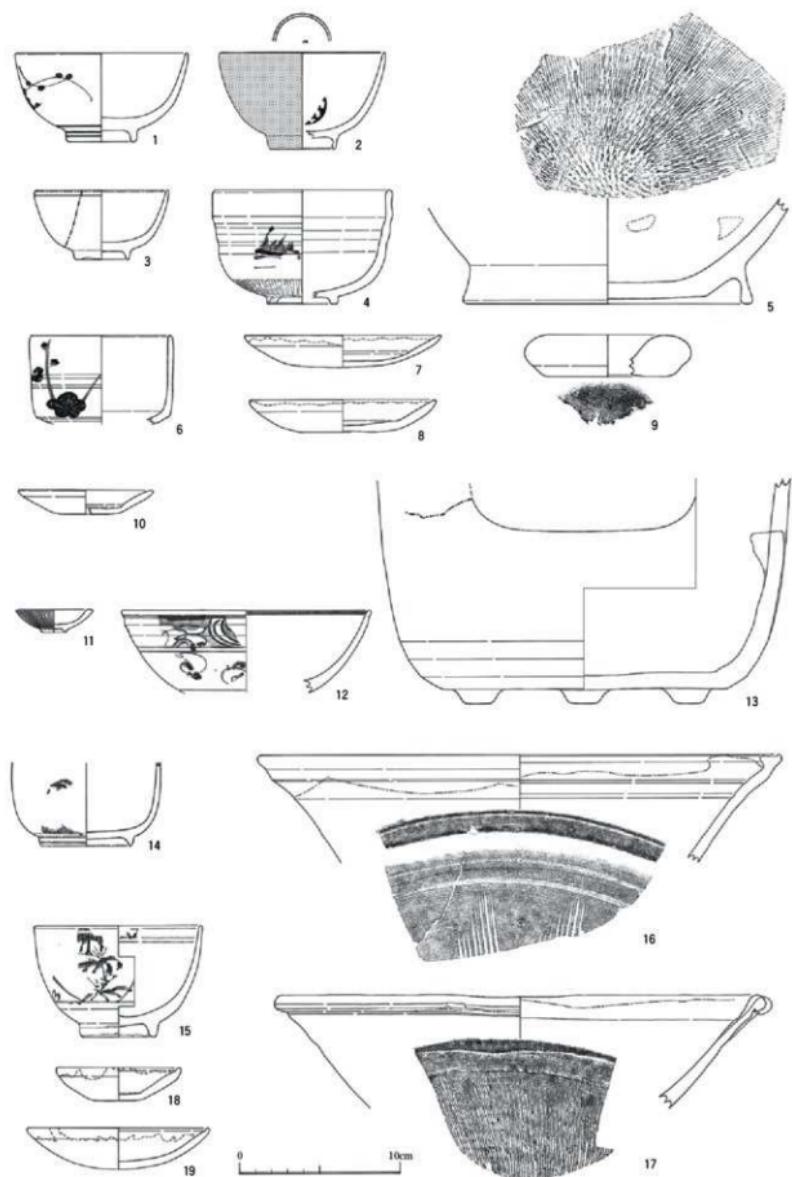
第21図 SK35、SK36、SK37出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]



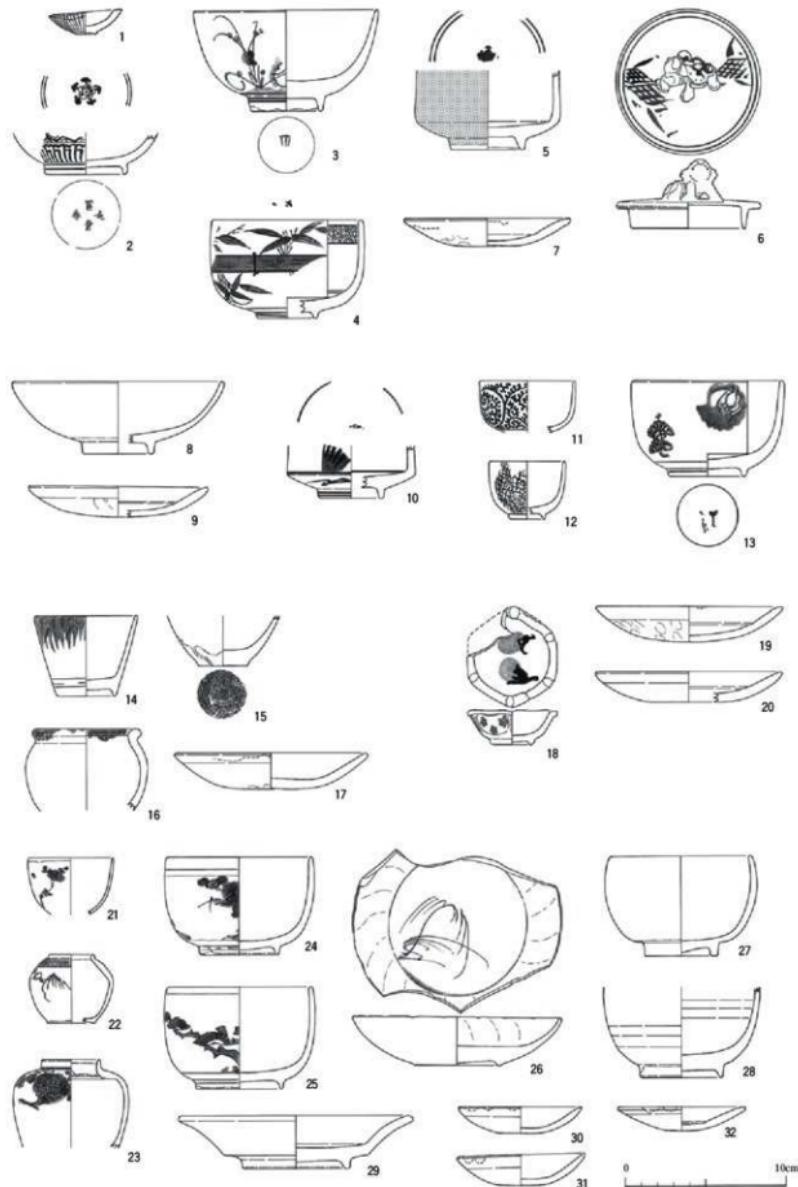
第22図 SK38、SK39、SK40、SK41、SK42出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]



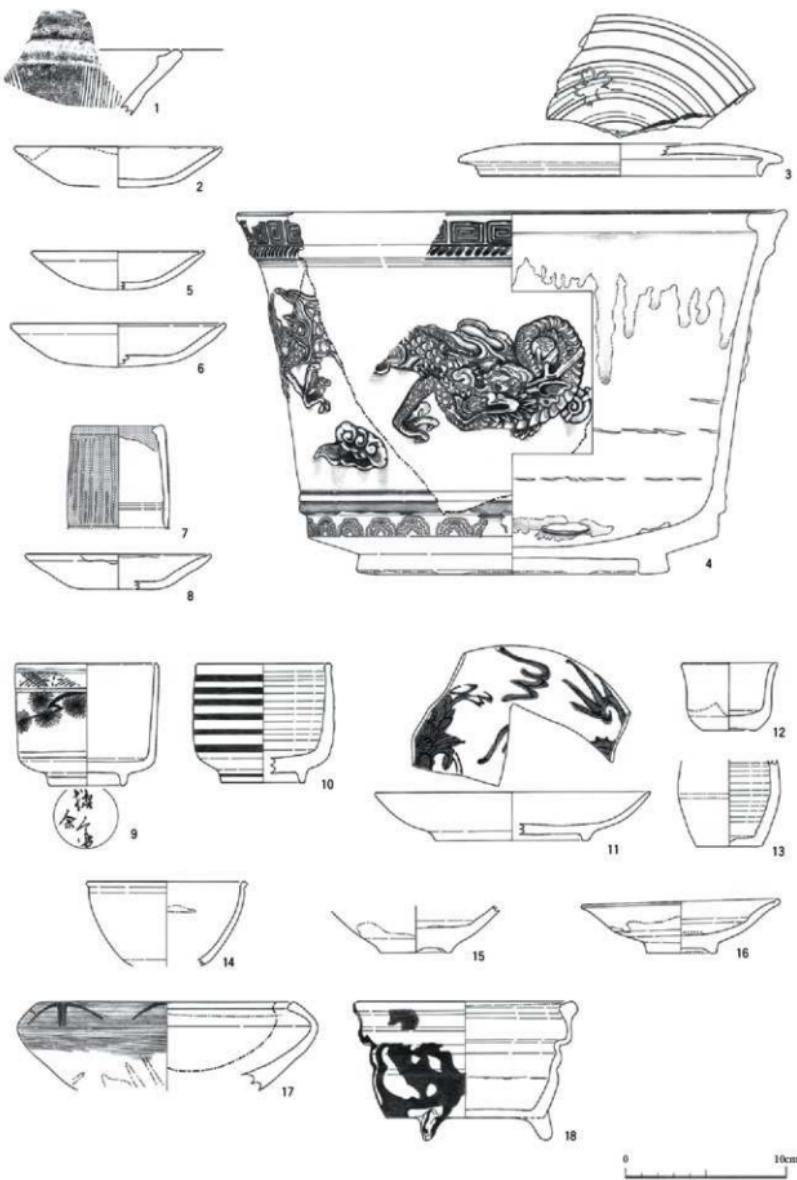
第23図 SK44、SK47、SK50出土陶磁器・土器・土製品実測図 [S=1/3]



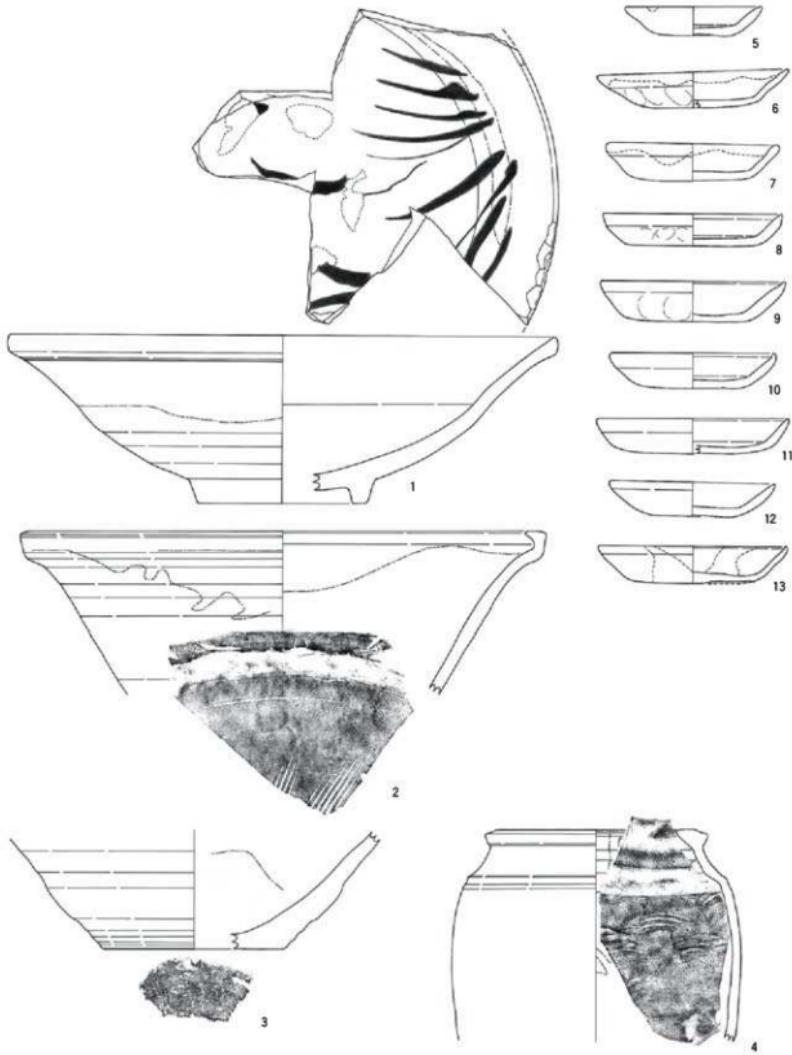
第24図 SK46、SK58、SK59、SK60、SK61出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]



第25図 SK62、SK65、SK67、SK68、SK70、SK73、SK76、SK77出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]

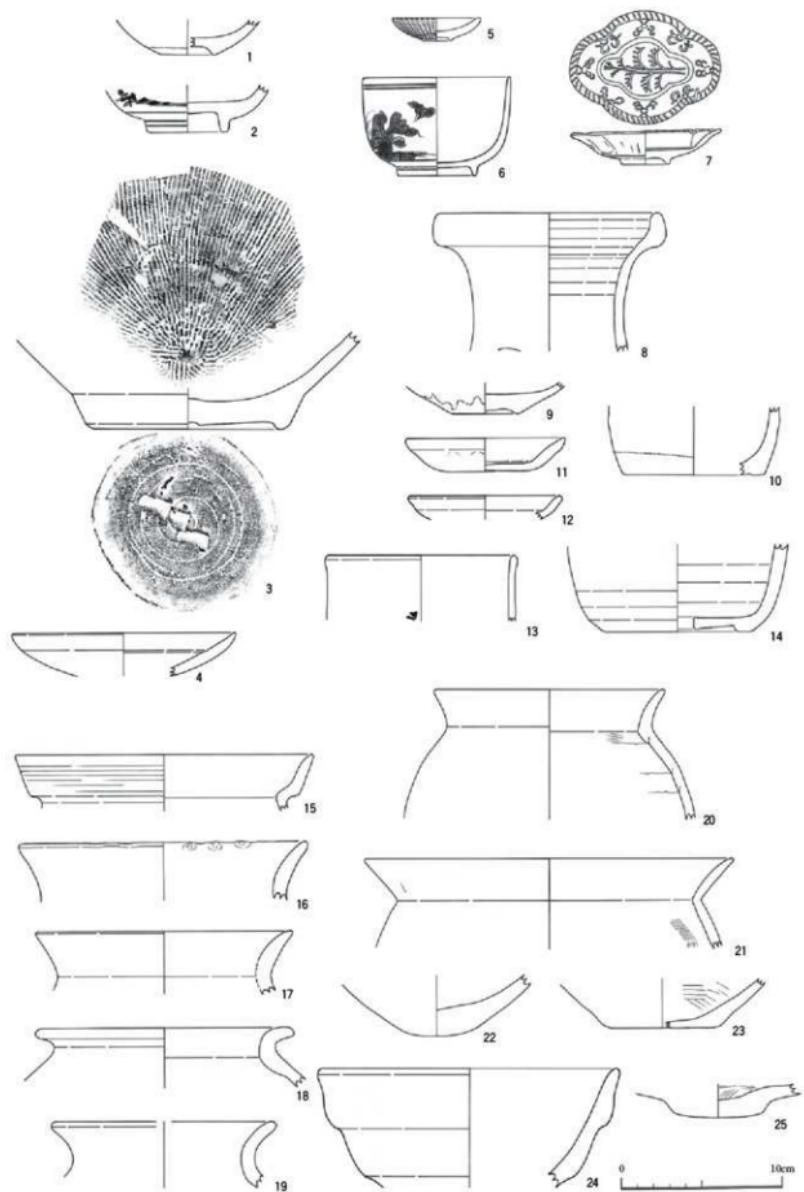


第26図 SK78、SK80、SK87、SK94、SK85出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]

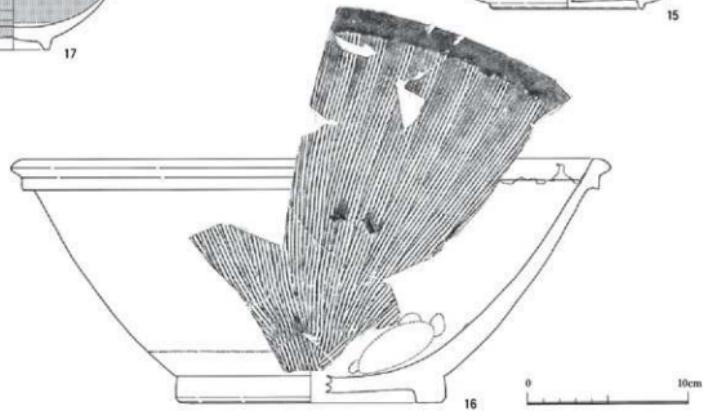
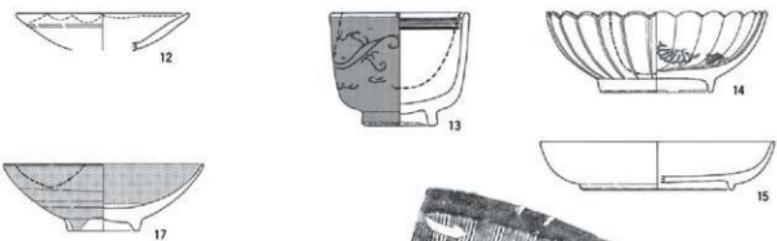
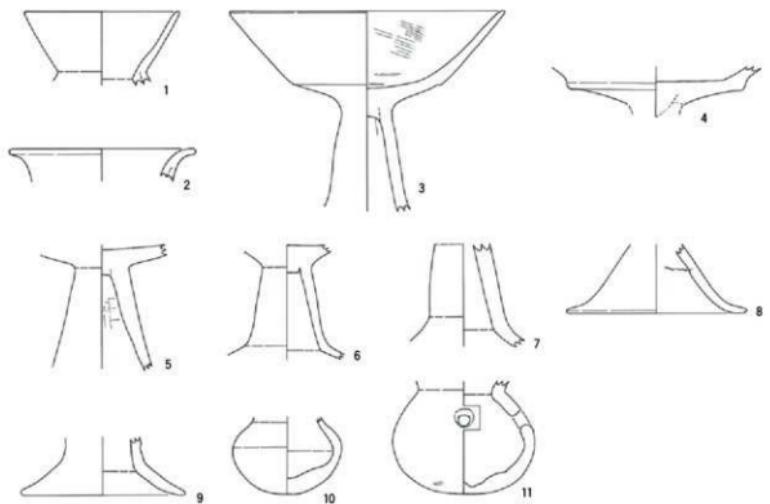


第27図 SK85出土陶器・土器実測図 [S=1/3]

0 10cm



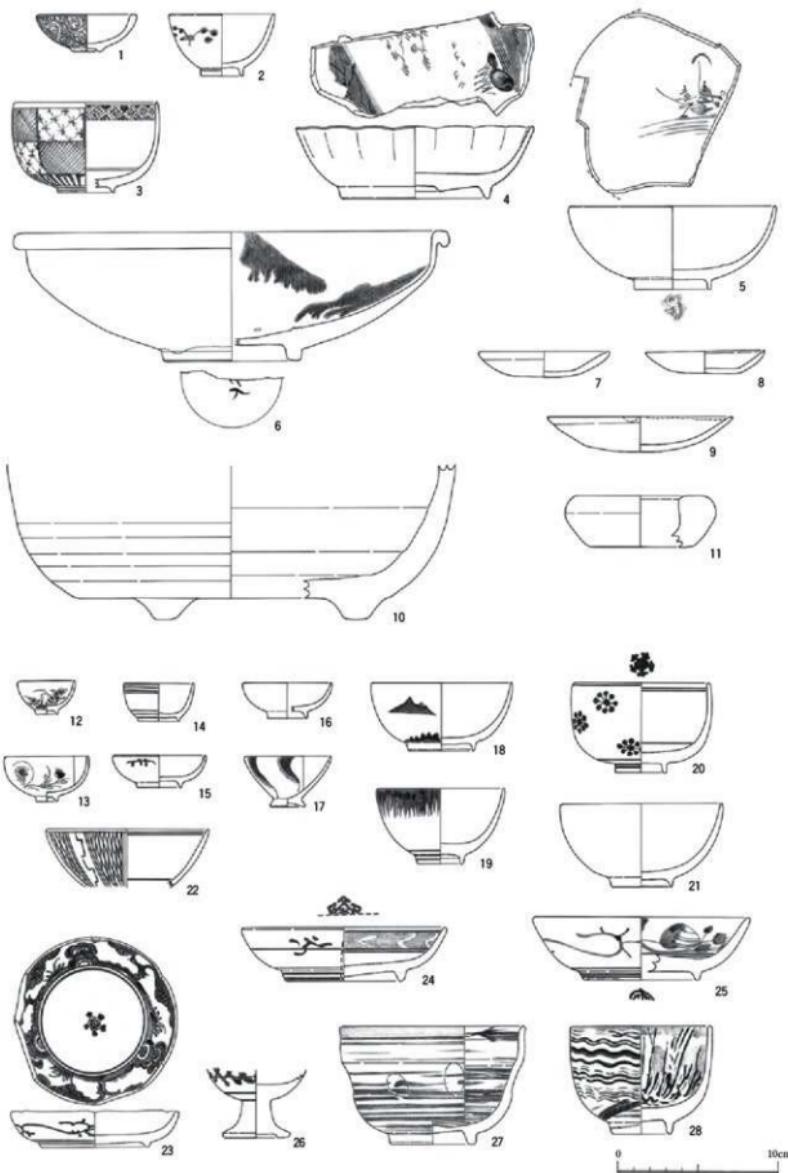
第28図 SE02、SE03、SE04、P2、P3、P7、P11、SD01出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]



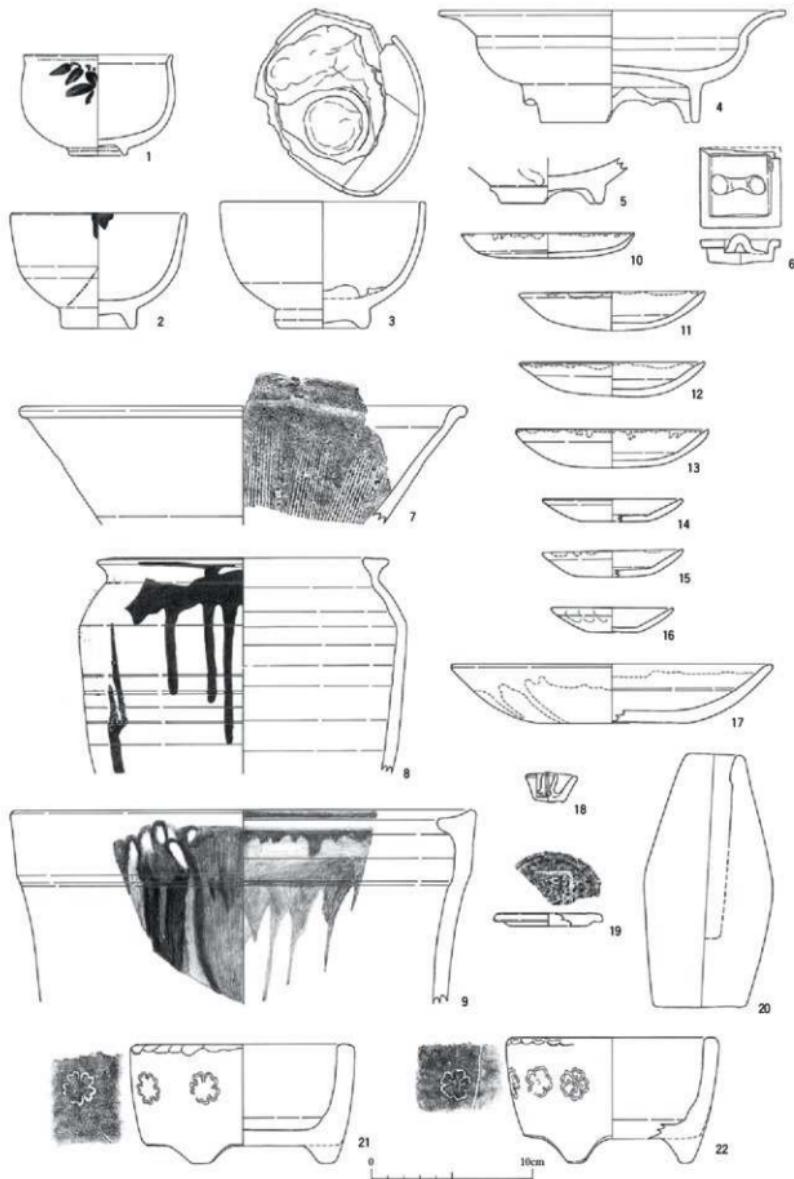
第29図 SD01、SD03、SD04、SD05出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]



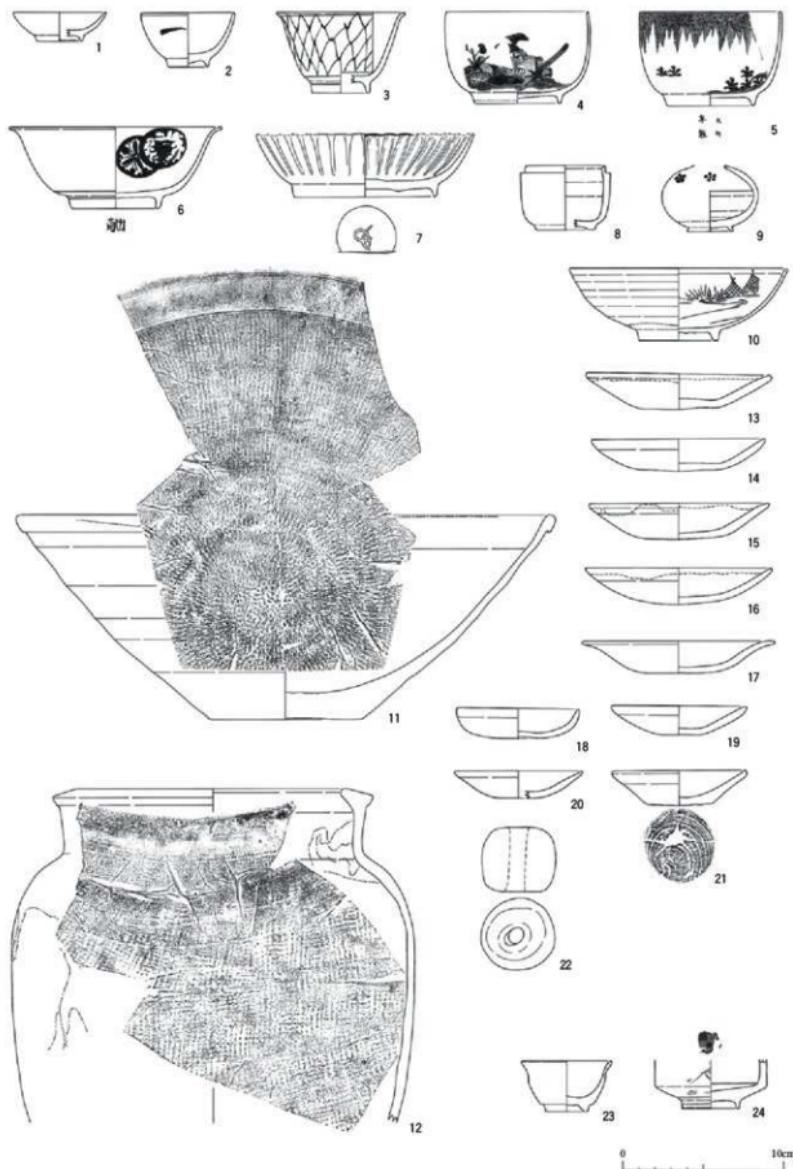
第30図 SD06、SX01、SX02、SX05出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]



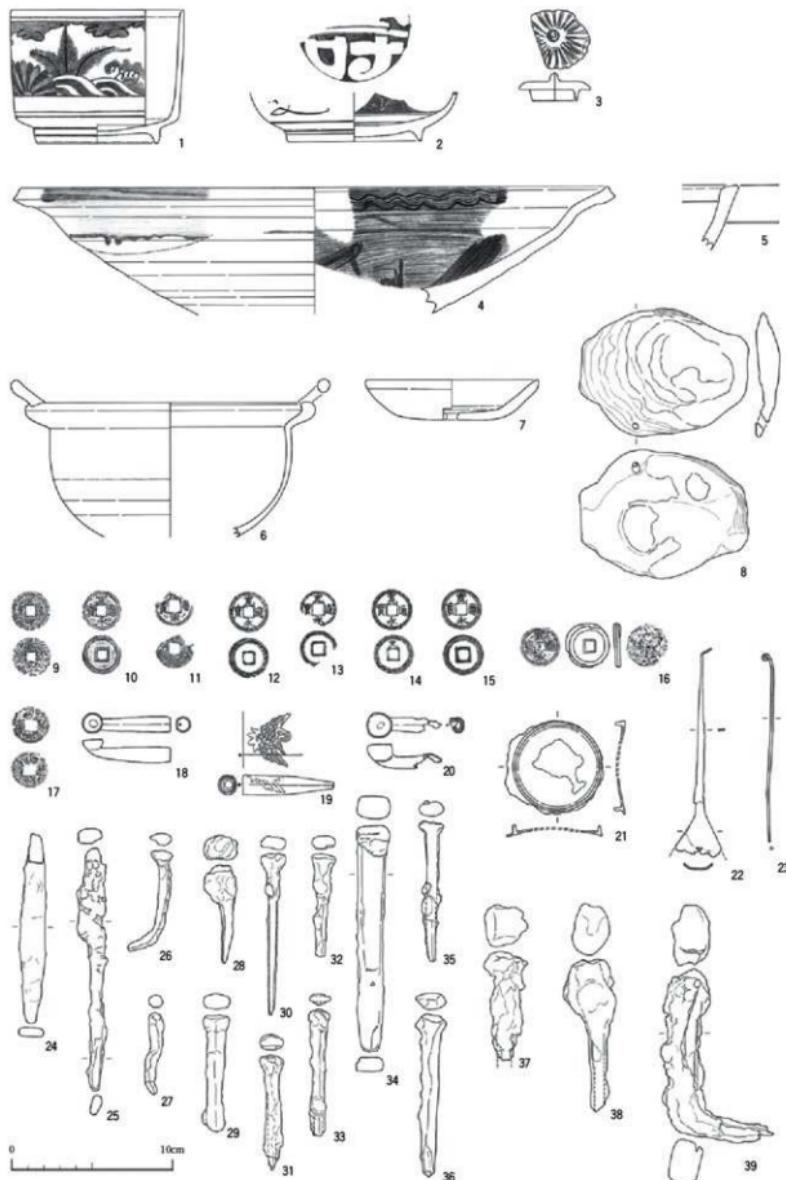
第31図 SX03、SX04出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]



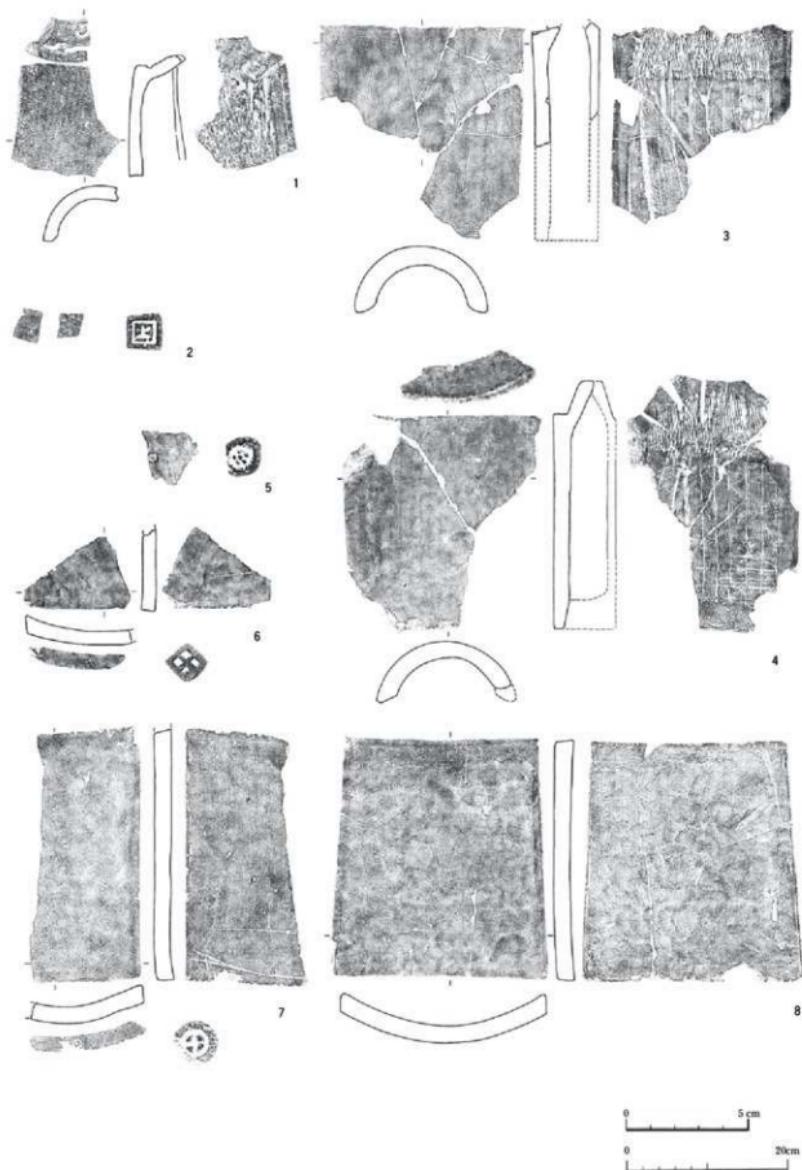
第32図 SX04出土陶器・土器実測図 [S=1/3]



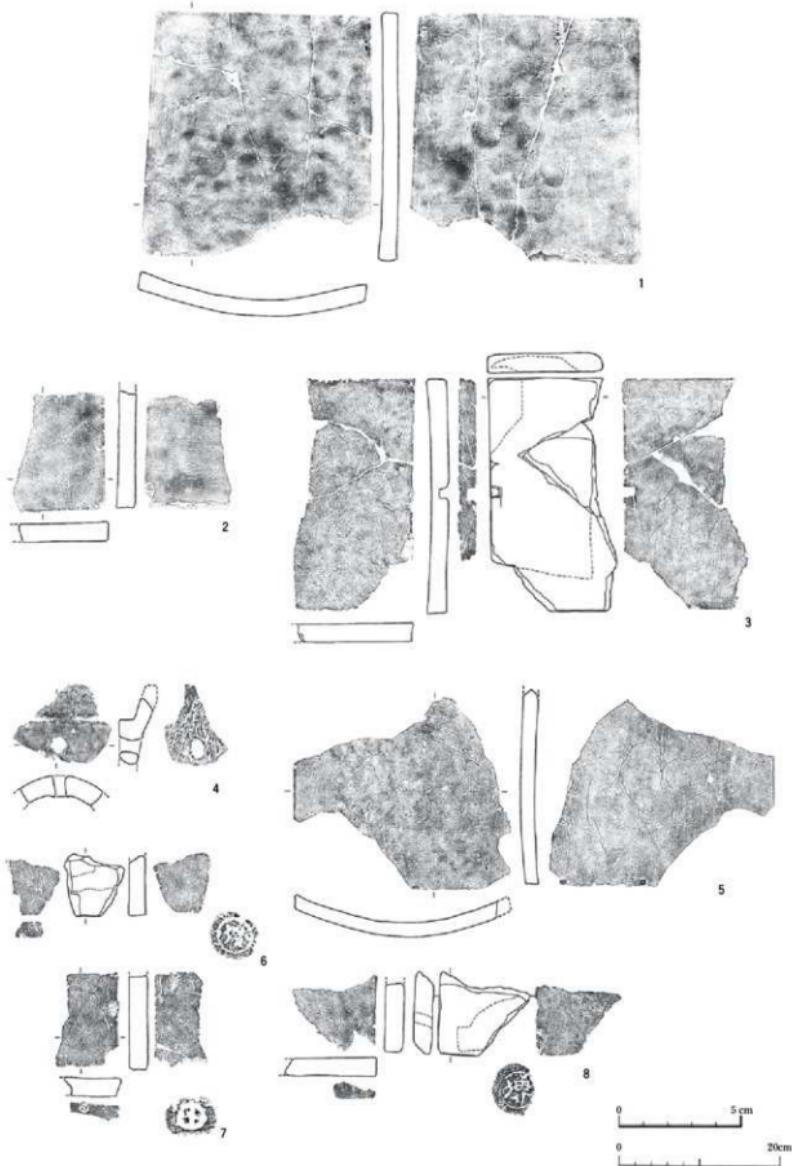
第33図 SX06、SX07出土陶器・土器・土製品実測図 [S=1/3]



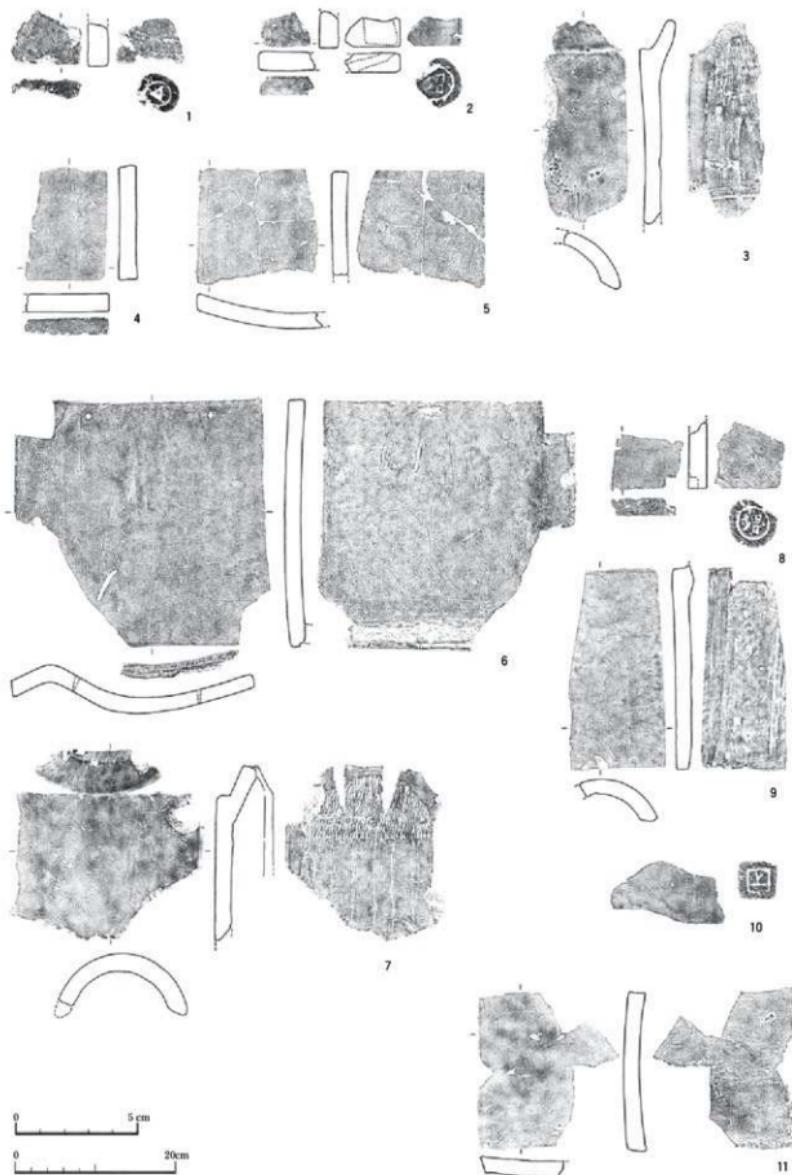
第34図 整地層、カクラン出土陶磁器・土器実測図 [S=1/3]、貝製品・金属製品実測図 [S=1/3]



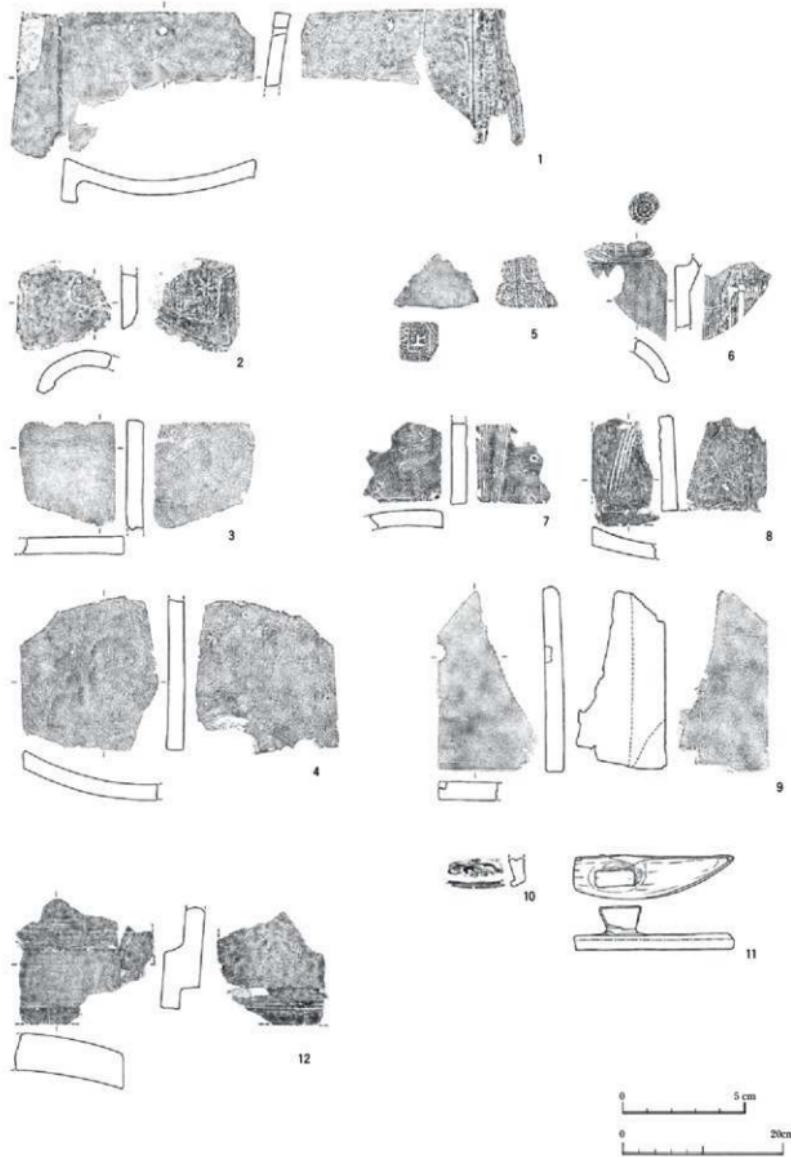
第35図 SK06、SK27、SK31出土瓦実測図 [S=1/6、刻印は S=1/2]



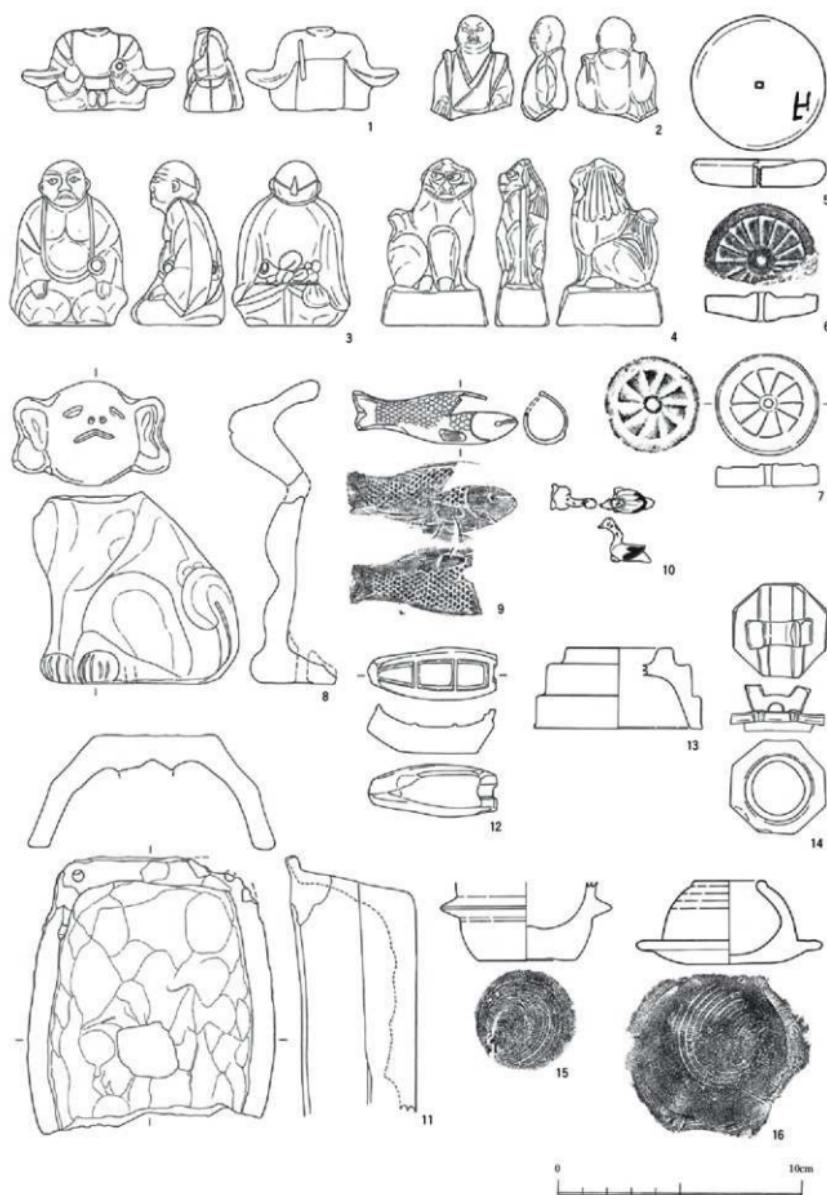
第36図 SK31、SK32、SK41出土瓦実測図 [S=1/6、刻印は S=1/2]



第37図 SK59、SK60、SK61、SK62、SK88、SK91、SK94、SD04、SX03、SX05、
SX07出土瓦実測図 (S=1/6、刻印は S=1/2)



第38図 SE03、SX04、整地層、包含層出土瓦実測図 [S=1/6、刻印は S=1/2]

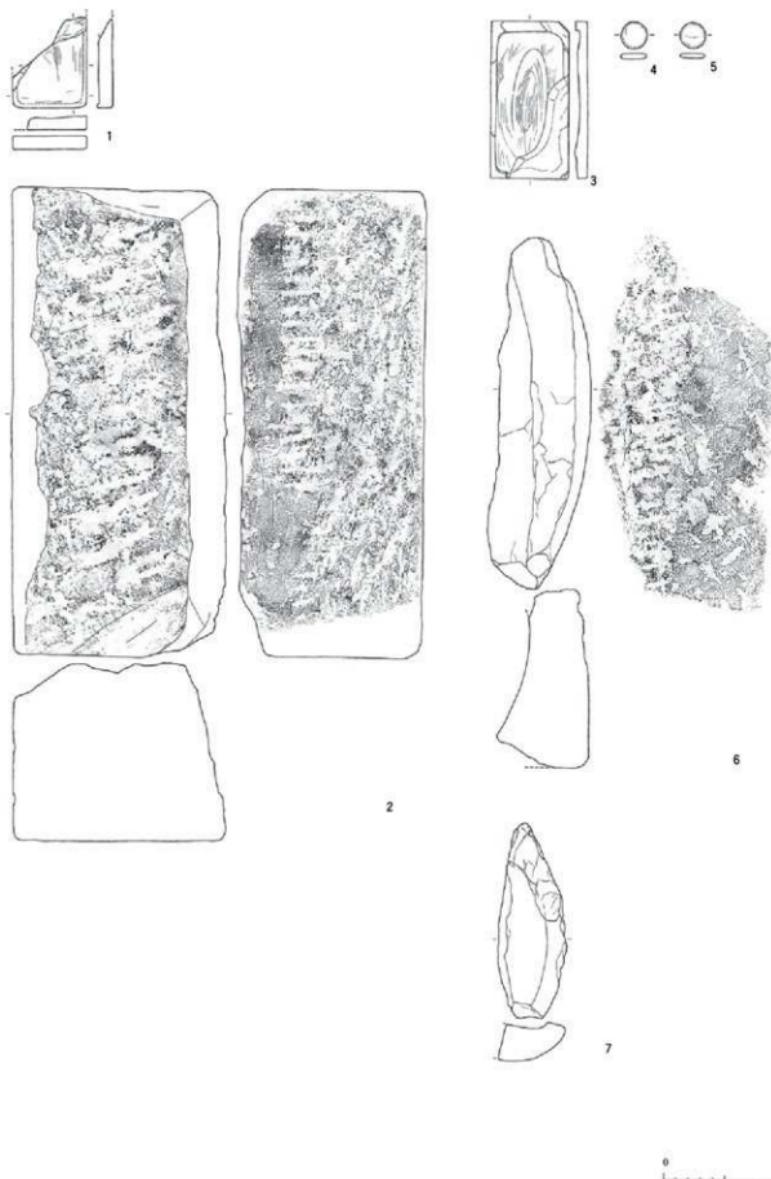


第39図 土人形実測図 [S=1/2]

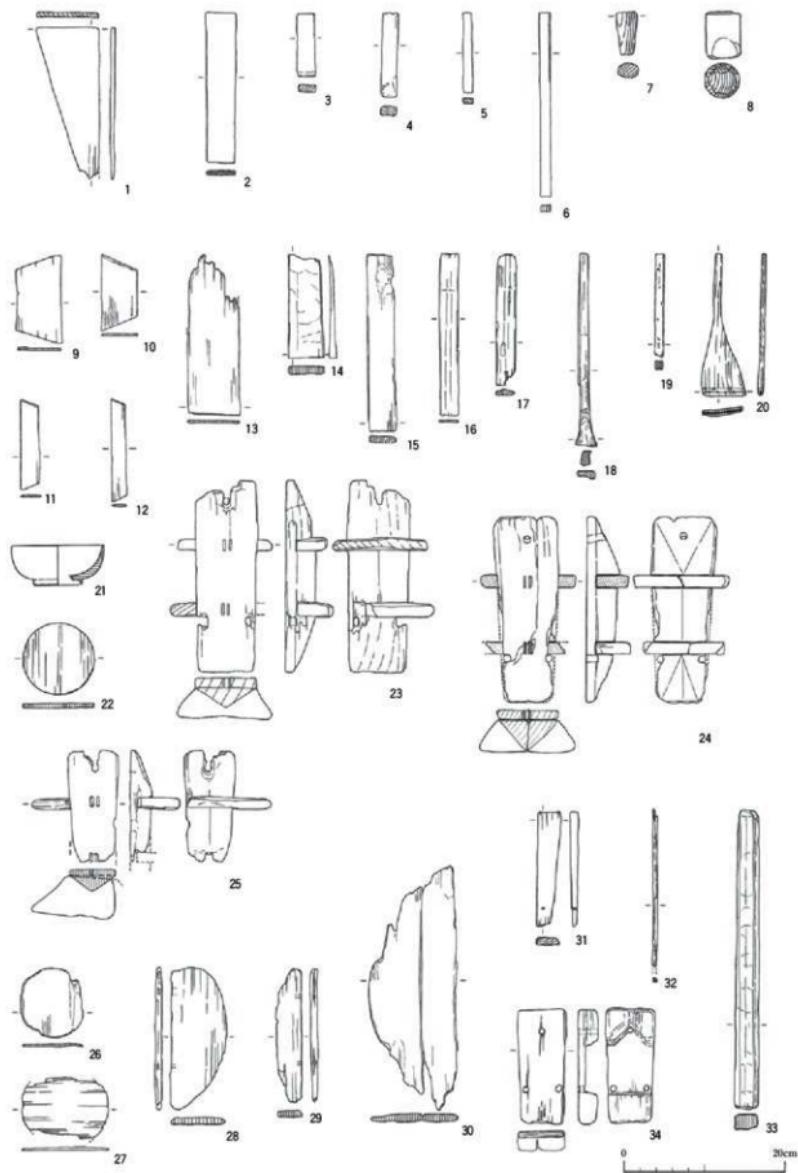


0 5 cm
0 10cm

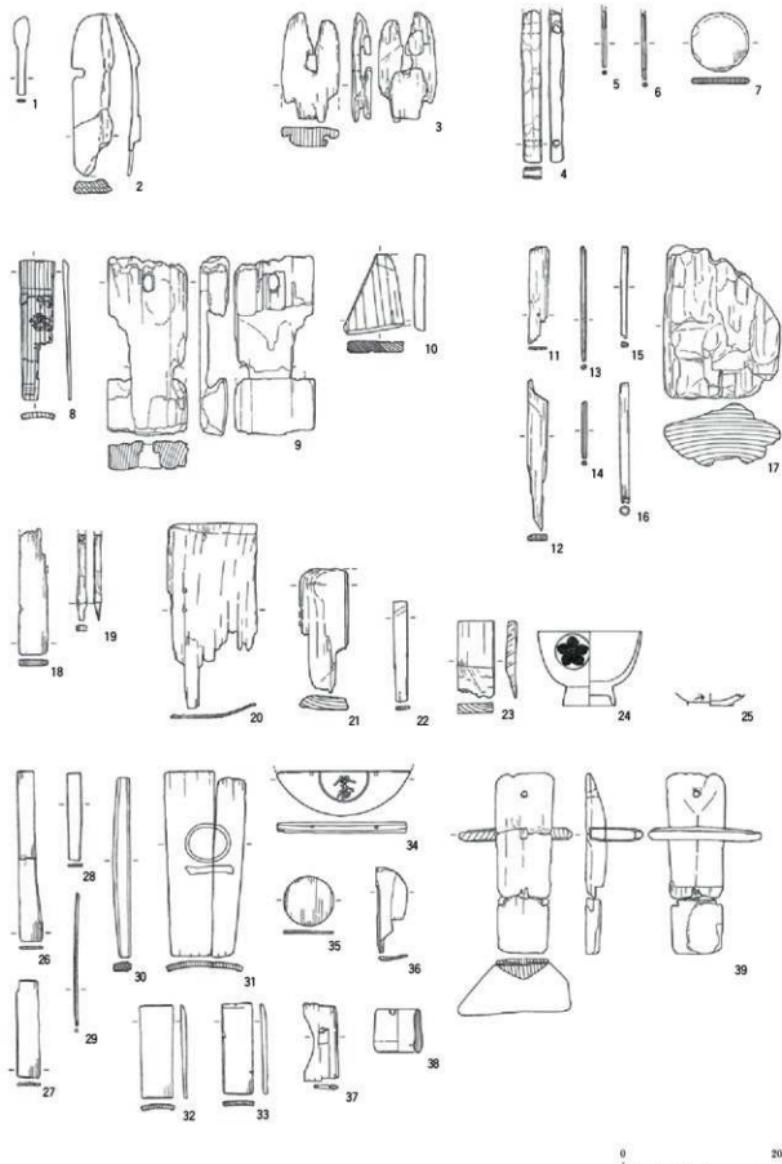
第40図 SK10、SK29、SK30、SK31、SK32、SK47、SK85、SD04、SX04、SX07出土石製品実測図 [S=1/4・1/2]



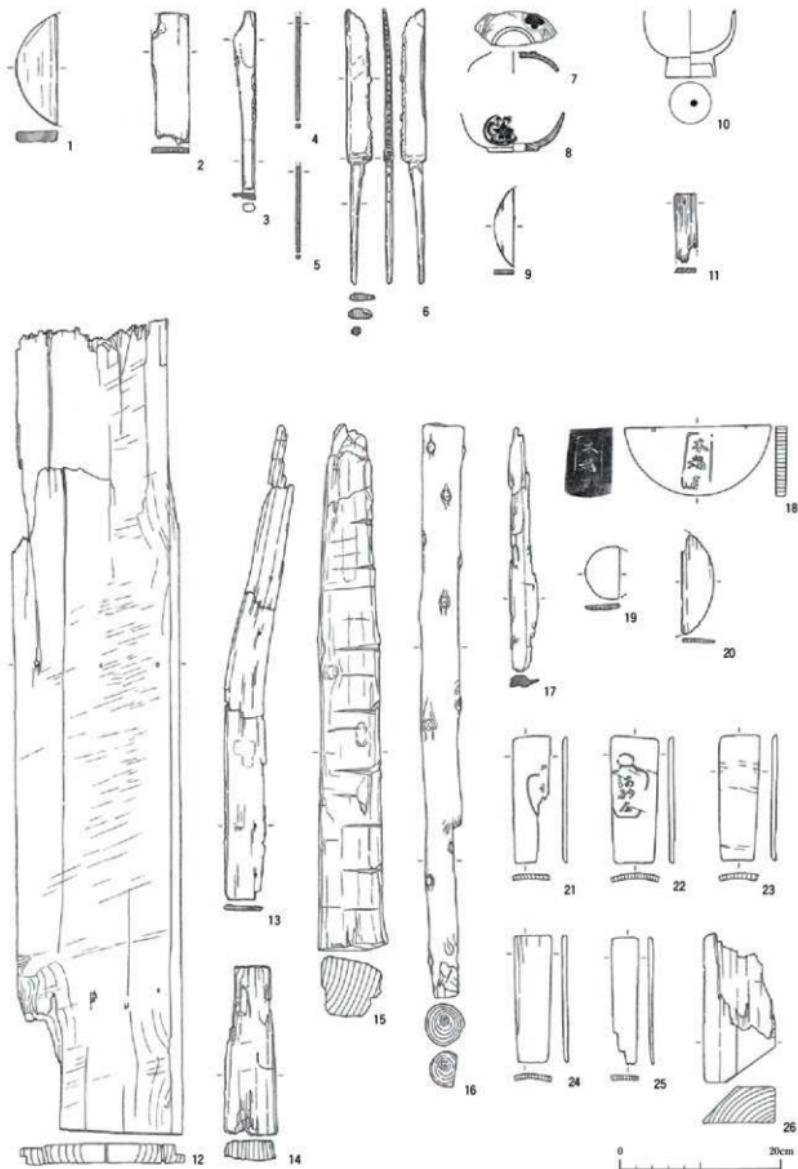
第41図 SE03、整地層出土石製品実測図 [S=1/4]



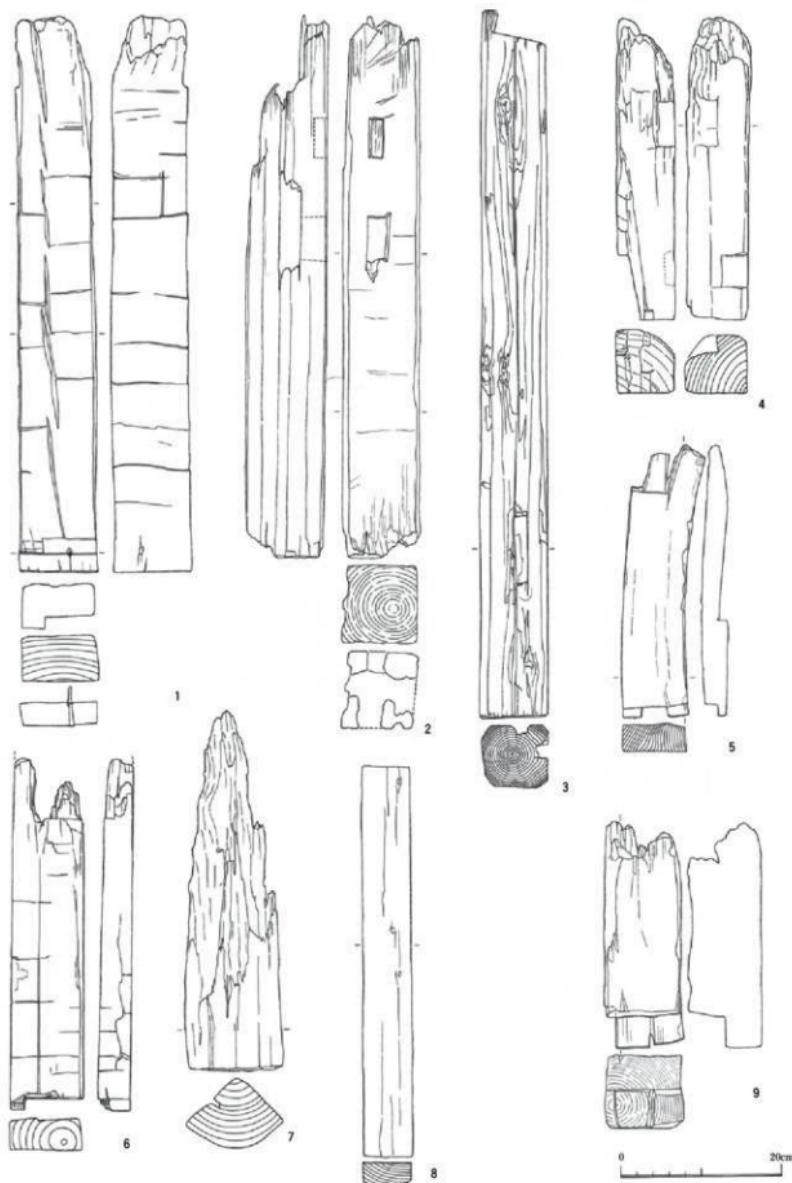
第42図 SK04、SK06、SK10出土木製品実測図 [S=1/6]



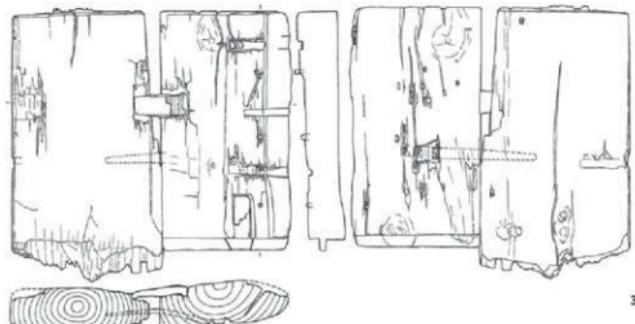
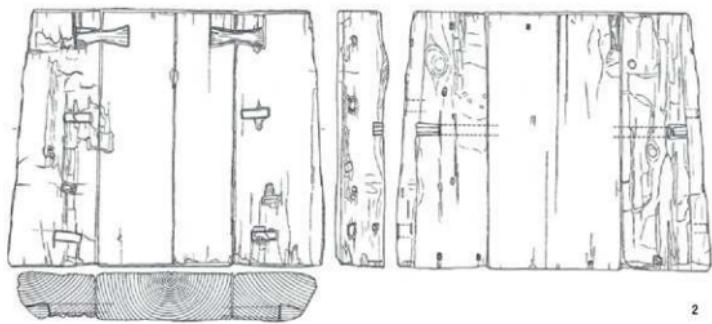
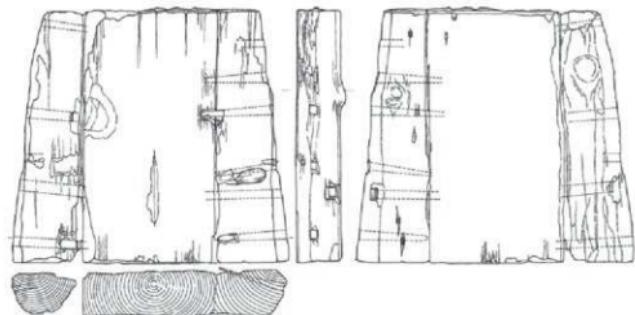
第43図 SK16、SK17、SK20、SK21、SK22、SK46、SK61、SK62出土木製品実測図 [S=1/6]



第44図 SK63、SK85、SK87、SK96、SE03出土木製品実測図 [S=1/6]

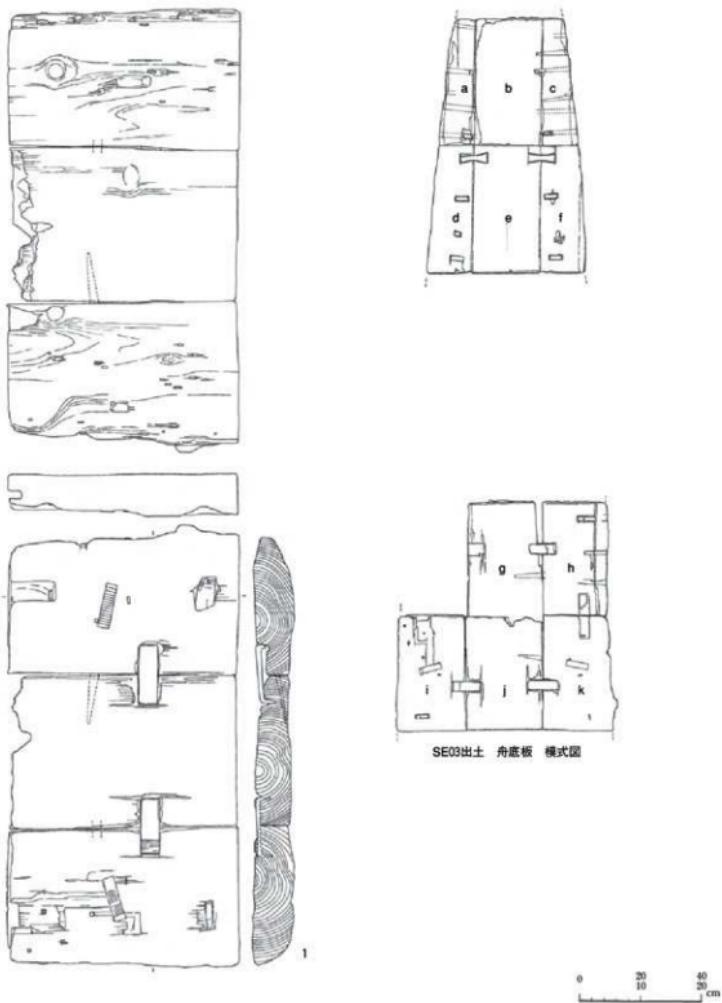


第45図 SE03出土木製品実測図 [S=1/6]



0 20cm

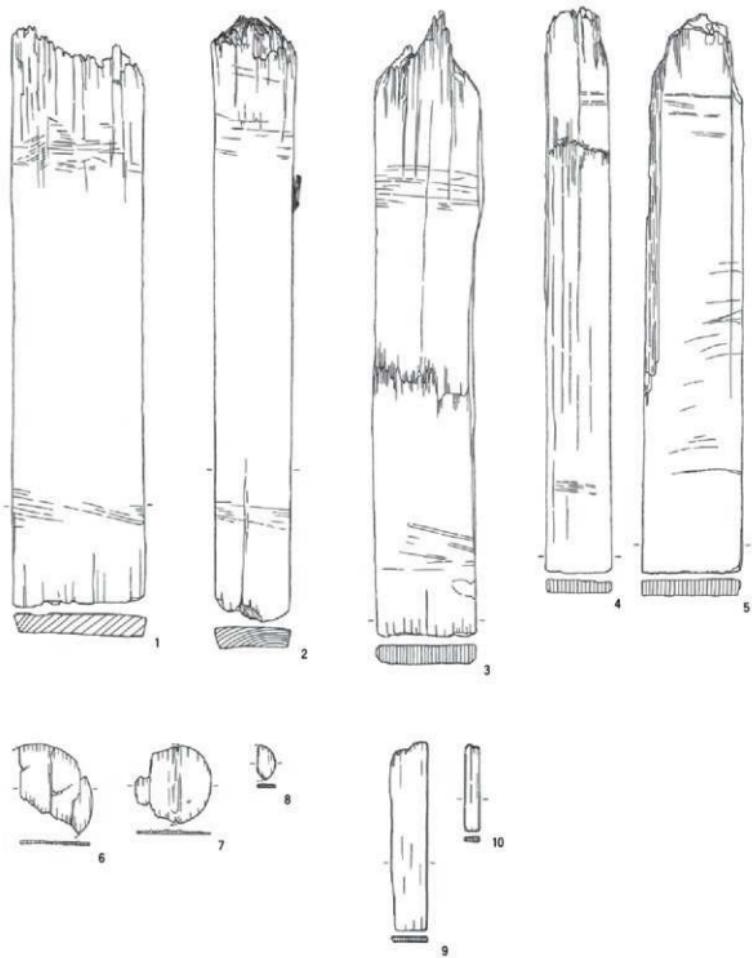
第46図 SE03出土木製品実測図 [S=1/8]



第47図 SE03出土木製品実測図 [S=1/8、舟底板模式図は S=1/16]



第48図 SE04出土木製品実測図 [S=1/6]



第49図 SE04、SD04、SX07出土木製品実測図 [S=1/6]

第6表 陶磁器土器等観察表

番号	種類	器種	a mm	c mm	直径 mm	断面 外観 内面	底面	備考	支度 番号	直径 (mm)					直角 (mm)		直角 外観 内面	直角 備考	支度 番号
										a mm	c mm	直径 mm	断面 外観 内面	底面	備考				
第14回																			
1 SH01	豆	17.7 内面	30	15	CB	直筒	N/S	子鉢	M9	126	137	121	直筒	直筒	SY7/1 直白	透明白		77	
2 SH01	小鉢	24	24	C12	直筒	色白	N/S	子鉢 (金・不透明)	M7	115	115	123	直筒	直筒	1098/2 直白	透明白		73	
3 SH02	豆	21	21	(45) C12	直筒	色白	1095/4 直筒	透明白	M6	120	25	25	直筒	直筒	1098/3 直白	透明白	透明白	72	
4 SH02	豆	16	13	CB	直筒	色白	1095/4 直筒	透明白	M6	120	25	25	直筒	直筒	1098/3 直白	透明白	透明白	71	
5 SH02	小鉢	44	22	C12	直筒	色白	N/S	子鉢 (金・透明白)	M7	122	18	124	直筒	直筒	1098/3 直白	透明白	透明白	74	
6 SH02	豆	21	21	C12	直筒	色白	N/S	子鉢 (金・透明白)	M7	120	18	124	直筒	直筒	1098/2 直白	透明白	透明白	75	
7 SH02	豆	22	17	C12	直筒	色白	N/S	子鉢 (金・透明白)	M7	120	18	124	直筒	直筒	1098/2 直白	透明白	透明白	76	
8 SH02	豆	30	60	CB	直筒	色白	N/S	子鉢 (金・透明白)	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/2 直白	透明白	透明白	77	
9 SH02	豆	50	145	CB	直筒	色白	N/S	子鉢 (金・透明白)	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/2 直白	透明白	透明白	78	
10 SH02	豆	110 44	51 111	C12	直筒	色白	N/S	子鉢 (金・透明白)	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/2 直白	透明白	透明白	79	
11 SH02	豆	56	62	C12	直筒	色白	N/S	子鉢 (金・透明白)	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/2 直白	透明白	透明白	80	
12 SH02	豆	56	56	C12	直筒	色白	N/S	子鉢 (金・透明白)	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/2 直白	透明白	透明白	81	
13 SH02	豆	208 112	33 112	CB	直筒	色白	N/S	子鉢 (金・透明白)	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/2 直白	透明白	透明白	82	
14 SH02	豆	146 89	44	CB	直筒	色白	N/S	子鉢 (金・透明白)	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/2 直白	透明白	透明白	83	
15 SH02	豆	312 127	108	CB	直筒	色白	N/S	子鉢 (金・透明白)	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/2 直白	透明白	透明白	84	
16 SH02	豆	51	122	CB	直筒	色白	N/S	子鉢 (金・透明白)	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/2 直白	透明白	透明白	85	
17 SH02	豆	92	73	CB	直筒	白	1098/1 直筒	透明白	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/1 直白	透明白	透明白	86	
18 SH02	豆	68	68	CB	直筒	白	1098/1 直筒	透明白	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/1 直白	透明白	透明白	87	
19 SH02	豆	204 77	57	C12	直筒	白	2,1098/4 直筒	透明白	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/4 直白	透明白	透明白	88	
20 SH02	土器	115	20	CB	直筒	白	1098/3 直筒	透明白	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/3 直白	透明白	透明白	89	
21 SH02	土器	126	21	CB	直筒	白	1098/3 直筒	透明白	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/3 直白	透明白	透明白	90	
22 SH02	土器	115	21	CB	直筒	白	1098/3 直筒	透明白	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/3 直白	透明白	透明白	91	
23 SH02	土器	132	22	CB	直筒	白	1098/3 直筒	透明白	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/3 直白	透明白	透明白	92	
24 SH02	土器	132	22	CB	直筒	白	1098/3 直筒	透明白	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/3 直白	透明白	透明白	93	
25 SH02	土器	115	23	CB	直筒	白	1098/4 直筒	透明白	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/4 直白	透明白	透明白	94	
26 SH02	土器	115	23	CB	直筒	白	1098/4 直筒	透明白	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/4 直白	透明白	透明白	95	
27 SH02	土器	115	23	CB	直筒	白	1098/4 直筒	透明白	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/4 直白	透明白	透明白	96	
28 SH02	土器	115	23	CB	直筒	白	1098/4 直筒	透明白	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/4 直白	透明白	透明白	97	
29 SH02	土器	115	23	CB	直筒	白	1098/4 直筒	透明白	M12	126	170	125	直筒	直筒	1098/4 直白	透明白	透明白	98	
第15回																			
1 SH02	豆	94 内面	50	CB	直筒	色白	N/S	子鉢	M1	100	67	123	透明	透明	2,1098/3 透明	透明白	透明白	99	
2 SH02	豆	128	44	CB	直筒	色白	2,1098/2 直筒	透明白	M1	100	67	123	透明	透明	1098/1 透明	透明白	透明白	100	
3 SH02	土器	125	25	C12	直筒	色白	1098/3 直筒	透明白	M12	126	45	123	透明	透明	2,1098/2 透明	透明白	透明白	101	
4 SH02	土器	125	25	C12	直筒	色白	1098/3 直筒	透明白	M12	126	45	123	透明	透明	1098/2 透明	透明白	透明白	102	
5 SH02	土器	112	19	CB	直筒	色白	SY02/5 直筒	透明白	M12	91	68	123	透明	透明	1098/4 透明	透明白	透明白	103	
6 SH02	土器	125	15	CB	直筒	色白	SY02/5 直筒	透明白	E5	42	42	123	透明	透明	1098/4 透明	透明白	透明白	104	
7 SH02	豆	86	50	CB	直筒	色白	SY02/5 直筒	透明白	E5	42	42	123	透明	透明	1098/4 透明	透明白	透明白	105	
8 SH02	豆	—	23	CB	直筒	色白	SY02/5 直筒	透明白	E5	42	42	123	透明	透明	1098/4 透明	透明白	透明白	106	
9 SH02	豆	112	65	CB	直筒	透明白	7,1098/4 直筒	透明白	E6	91	68	123	透明	透明	1098/4 透明	透明白	透明白	107	
10 SH02	豆	125	17	CB	直筒	透明白	7,1098/4 直筒	透明白	E6	91	68	123	透明	透明	1098/4 透明	透明白	透明白	108	
11 SH02	豆	116	22	CB	直筒	透明白	7,1098/4 直筒	透明白	E6	91	68	123	透明	透明	1098/4 透明	透明白	透明白	109	
12 SH02	豆	116	24	CB	直筒	透明白	7,1098/4 直筒	透明白	E6	91	68	123	透明	透明	1098/4 透明	透明白	透明白	110	
13 SH02	豆	114	23	CB	直筒	透明白	1098/3 直筒	透明白	E6	91	68	123	透明	透明	1098/3 透明	透明白	透明白	111	
14 SH02	豆	116	22	CB	直筒	透明白	1098/3 直筒	透明白	E7	91	68	123	透明	透明	1098/4 透明	透明白	透明白	112	
15 SH02	豆	95	60	C12	直筒	透明白	1098/3 直筒	透明白	E7	92	70	123	透明	透明	2,1098/1 透明	透明白	透明白	113	
16 SH02	豆	130	35	C12	直筒	透明白	1098/3 直筒	透明白	E7	92	70	123	透明	透明	2,1098/1 透明	透明白	透明白	114	
17 SH02	豆	95	55	CB	直筒	透明白	1098/3 直筒	透明白	E7	92	70	123	透明	透明	1098/3 透明	透明白	透明白	115	

年号	播種 時期	品種名	性状		播種 期日	播種 量	播種方法		出土後各項		栽培 方法
			株 距	行 距			外因	内因	葉	花	
第18回											
1	SKE30	穀	穀	34	100	50	CII	透明細粒	7.5YR5/1 NS	開散	E115
2	SKE30	穀	穀	278	152	50	CII	粗粒	7.5YR5/3 NS	開散	E115
3	SKE30	穀	穀	278	172	50	CII	粗粒	2.5YR5/2 NS	平張	E145
4	SKE30	穀	穀	—	140	—	III	白細	NS 白	開散	N185
5	SKE30	穀	穀	50	—	50	III	白細	NS 白	開散	N175
6	SKE30	小穀	穀	27	41	—	CII	透明細粒	NS 白	開散	N195
7	SKE30	穀	穀	67	62	62	CII	透明細粒	NS 白	開散	N225
8	SKE30	穀	穀	61	61	61	CII	透明細粒	NS 白	開散	N225
9	SKE30	穀	穀	61	61	61	CII	透明細粒	NS 白	開散	N225
10	SKE30	穀	穀	57	68	68	CII	透明細粒	NS 白	開散	N215
11	SKE30	穀	穀	43	64	64	II	透明細粒	NS 白	開散	N245
12	SKE30	穀	穀	65	61	61	CII	透明細粒	NS 白	開散	N195
13	SKE30	穀	穀	44	44	44	CII	透明細粒	NS 白	開散	N205
14	SKE30	穀	穀	42	—	—	II	透明細粒	NS 白	開散	N205
第19回											
1	SKE30	子	子	382	72	72	CII	粗粒	7.5YR0/1 NS	開散	T215
2	SKE30	子	子	323	23	23	CII	粗粒	7.5YR0/4 NS	在地	N175
3	SKE30	子	子	110	25	25	II	粗粒	7.5YR0/4 NS	在地	N175
4	SKE30	子	子	120	21	21	CII	粗粒	7.5YR0/1 NS	在地	N175
5	SKE30	子	子	112	24	24	II	粗粒	7.5YR0/4 NS	在地	N175
6	SKE30	子	子	110	21	21	CII	粗粒	7.5YR0/4 NS	在地	N175
7	SKE30	子	子	54	54	54	CII	粗粒	7.5YR0/4 NS	在地	N175
8	SKE30	子	子	55	12	—	II	透明細粒	NS 白	開散	T225
9	SKE30	子	子	40	18	18	II	透明細粒	NS 白	開散	T225
10	SKE30	小穀	穀	40	42	42	CII	透明細粒	NS 白	開散	T185
11	SKE30	穀	穀	60	60	60	CII	透明細粒	NS 白	開散	T185
12	SKE30	穀	穀	54	54	54	CII	透明細粒	NS 白	開散	T185
13	SKE30	穀	穀	—	160	—	II	粗粒	7.5YR0/2 NS	在地	T225
14	SKE30	穀	穀	140	—	—	II	粗粒	7.5YR0/2 NS	在地	T225
15	SKE30	穀	穀	67	67	67	CII	粗粒	NOYR0/2 NS	開散	T225
16	SKE30	小穀	穀	27	47	47	II	粗粒	NOYR0/1 NS	開散	T185
17	SKE30	穀	穀	380	120	120	CII	粗粒	7.5YR0/1 NS	在地	T225
18	SKE30	穀	穀	106	22	22	CII	粗粒	7.5YR0/3 NS	在地	T145
19	SKE30	土著	土著	24	—	—	II	粗粒	SYR0/2 NS	有地	T145
20	SKE30	小穀	穀	29	36	36	CII	透明細粒	NS 白	開散	T225
21	SKE30	穀	穀	54	43	43	II	透明細粒	NS 白	開散	T225
22	SKE30	土著	土著	110	—	—	CII	透明細粒	NOYR0/3 NS	在地	T225
23	SKE30	土著	土著	116	17	17	CII	透明細粒	7.5YR0/4 NS	在地	T225
第20回											
1	SKE30	穀	穀	—	110	110	II	透明細粒	7.5YR0/4 NS	中國	Q25
2	SKE30	穀	穀	62	62	62	CII	透明細粒	NS 白	開散	G31
3	SKE30	穀	穀	42	(—)	(—)	II	透明細粒	NS 白	開散	G31
4	SKE30	穀	穀	108	56	56	II	透明細粒	NS 白	開散	Q35
5	SKE30	穀	穀	62	(30)	(30)	II	透明細粒	NS 白	中國	Q45
6	SKE30	穀	穀	140	29	29	CII	透明細粒	NS 白	開散	Q45
7	SKE30	穀	穀	62	62	62	CII	透明細粒	NS 白	開散	Q45
8	SKE30	穀	穀	—	(30)	(30)	II	透明細粒	NS 白	開散	Q45
9	SKE30	穀	穀	152	56	56	CII	透明細粒	2.5YR0/4 NS	開散	Q35
10	SKE30	穀	穀	61	(52)	(52)	II	透明細粒	10.5YR0/2 NS	開散	Q45
11	SKE30	穀	穀	130	(42)	(42)	CII	透明細粒	7.5YR0/2 NS	開散	Q45
12	SKE30	穀	穀	46	29	—	II	粗粒	SYR0/3 NS	半張	Q25

品名	種類	規格	単位	在庫	販売区分		備考	販路
					内需	外需		
SK43	鋸	φ 5	φ 5	102	C22	透明樹脂 付付	N/S/ 白	搬出
SK43	鋸	192	143	C22	透明樹脂 付付	N/S/ 白	搬出	販路A(販路B)
SK43	鋸	314	(34)	C21	透明樹 脂付	N/S/ 白	搬出	7.5WVA-3 搬出
SK43	鋸	82	8	C4	透明樹 脂付	N/S/ 白	搬出	7.5WVA-6 搬出
SK43	鋸	125	25	C22	透明樹 脂付	N/S/ 白	搬出	7.5WVA-7 搬出
SK43	鋸	25	25	C22	透明樹 脂付	N/S/ 白	搬出	7.5WVA-8 搬出
SK43	鋸	112	26	C24	透明樹 脂付	N/S/ 白	搬出	10WVA-3 搬出
SK43	鋸	116	27	C22	透明樹 脂付	N/S/ 白	搬出	7.5WVA-9 搬出
SK43	鋸	140	20	C22	透明樹 脂付	N/S/ 白	搬出	7.5WVA-10 搬出
第21回								
1	SK43	小鋸	98	44	C20	透明樹脂 付付	N/S/ 白	搬出付付竹 竿及工具1束
2	SK43	鋸	94	45	C15	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出
3	SK43	鋸	133	34	C210	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出付付竹 竿及工具1束
4	SK43	鋸	94	30	C12	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出付付竹 竿1束
5	SK43	鋸	98	89	C29	透明樹 脂付付	2.5VVA-2 搬出	搬出
6	SK43	鋸	98	89	C29	透明樹 脂付付	2.5VVA-3 搬出	搬出
7	SK43	鋸	90	24	C23	透明樹 脂付付	2.5VVA-3 搬出	搬出付付竹 竿及工具1束
8	SK43	手鋸	327	120	C26	鉄鋸	10WVA-2 搬出	搬出付付竹 竿及工具1束
9	SK43	手鋸	118	21	C26	鉄鋸	10WVA-4 搬出	搬出
10	SK43	手鋸	113	25	C23	鉄鋸	7.5WVA-4 搬出	搬出付付竹 竿及工具1束
11	SK43	手鋸	113	24	C23	鉄鋸	7.5WVA-5 搬出	搬出付付竹 竿及工具1束
12	SK43	手鋸	116	21	C21	鉄鋸	7.5WVA-6 搬出	搬出付付竹 竿及工具1束
13	SK43	手鋸	110	21	C26	鉄鋸	EVVA-1 搬出	搬出
14	SK43	手鋸	104	(60)	C26	透明樹 脂付付	2.5WVA-5 搬出	搬出付付竹 竿及工具1束
15	SK43	手鋸	110	19	C22	透明樹 脂付付	10WVA-4 搬出	搬出
16	SK43	手鋸	102	53	C23	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出
17	SK43	鋸	82	58	C22	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出付付竹 竿及工具1束
18	SK43	鋸	82	26	C21	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出付付竹 竿及工具1束
19	SK43	鋸	170	(20)	C21	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出付付竹 竿及工具1束
20	SK43	鋸	195	(43)	C22	鉄鋸	2.5VVA-2 搬出	不搬
第22回								
1	SK43	鋸	114	24	C23	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出
2	SK43	鋸	113	54	C22	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出付付竹 竿及工具1束
3	SK43	手鋸	106	(40)	C20	透明樹 脂付付	10WVA-4 搬出	搬出
4	SK43	手鋸	95	30	C23	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出
5	SK43	手鋸	95	56	C22	透明樹 脂付付	2.5VVA-3 搬出	搬出
6	SK43	手鋸	120	(24)	C24	透明樹 脂付付	EVVA-1 搬出	搬出
7	SK43	手鋸	116	27	C23	透明樹 脂付付	10WVA-4 搬出	搬出付付竹 竿及工具1束
8	SK43	手鋸	102	29	C23	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出付付竹 竿及工具1束
9	SK43	手鋸	144	(10)	C23	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出付付竹 竿及工具1束
10	SK43	手鋸	90	63	C23	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出付付竹 竿及工具1束
11	SK43	鋸	—	(80)	C25	鉄鋸	N/S/ 白	搬出付付竹 竿
12	SK43	手鋸	83	68	C26	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出
13	SK43	手鋸	70	62	C23	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出付付竹 竿及工具1束
14	SK43	鋸	131	38	C24	透明樹 脂付付	2.5VVA-7 搬出	搬出付付竹 竿及工具1束
15	SK43	手鋸	120	22	C23	透明樹 脂付付	7.5WVA-3 搬出	搬出
16	SK43	手鋸	100	21	C26	透明樹 脂付付	5WVA-6 搬出	搬出付付竹 竿及工具1束
17	SK43	手鋸	102	19	C22	透明樹 脂付付	2.5WVA-7 搬出	搬出
18	SK43	手鋸	116	23	C23	透明樹 脂付付	7.5WVA-3 搬出	搬出付付竹 竿(大:φ12mm 小:φ5mm)
第23回								
1	SK44	小鋸	95	32	C24	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出
2	SK44	小鋸	—	39	C22	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出付付竹 竿及工具1束
3	SK44	手鋸	95	61	C25	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出
4	SK44	手鋸	95	62	C23	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出付付竹 竿及工具1束
5	SK44	手鋸	95	34	C22	透明樹 脂付付	N/S/ 白	搬出

第32回

1	SX04 種	鮎 37	93 -83	雄2 雌2	浅海物 底泥、底石 附着物	NB 底白	♀+♂ 底内+外-弱逆游	MII
2	SX04 種	鮎 110	72 -72	雄2 雌2	附着物	2, SY/S-2 底泥、底石	漂游物 底泥、底石	MII
3	SX04 種	鮎 25	79 -72	雄2 雌2	灰斑	SY/S-3 底泥、底石	底泥内-附着物 底泥、底石+竹砾	MII
4	SX04 種	鮎 26	70 -70	雄2 雌2	鮎	NB 不斑	底泥	MII
5	SX04 種	鮎 43	128 -128	雄4 雌4	底泥 底石	100%NB 少	不斑	MII
6	獲	10 -10	19 -19	雄2 雌2	浅海物	7, SY/S-4 少+少	不明	MII
7	SX04 種	鮎 112	72 -72	雄2	铁锈	2, SY/S-2 底泥	漂游物	MII
8	SX04 種	鮎 182 [133]	72 -72	雄2 雌2	灰斑	NB 底泥、底石+竹砾	底泥、底石+竹砾	MII

第7章 目標具體審查

1000

804

第9表 瓦類表

番号	通称・部位	種類	形状	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面
第35回																			
1	SK06	瓦	NA	SYW-7 屋根	(149) 直角	(15)	—	500	光沢無	T113									
2	SK27	瓦	NA	SYW-7 屋根	(149) 直角	(15)	—	33.6	斜面切口(口上)	M128									
3	SK31	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	24	—	1100	斜面切口	T112									
4	SK31	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	22	—	1400	斜面切口(45度) 斜面切口(口上)	M128									
5	SK31	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	17.5	—	1400	斜面切口(45度) 斜面切口(口上)	E110									
6	SK31	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	16	—	260	斜面切口(口上)	E109									
7	SK31	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	22	—	1500	斜面切口(口上)	E109									
8	SK31	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	22	—	280	斜面切口(口上)	M128									

第36回

1	SK31	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	300	20	—	2600	E108									
2	SK32	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	300	20	—	300	E113									
3	SK32	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	290	23	—	1360	N75									
4	SK41	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	230	23	—	240	M130									
5	SK41	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	230	23	—	240	M130									
6	SK41	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	18	—	125	光沢無	T114									
7	SK41	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	21	—	124	光沢無	N74									
8	SK41	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	23	—	275	斜面切口(口上)	N72									
9	SK41	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	24	—	276	斜面切口(口上)	N72									

第37回

1	SK09	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	28	—	136	斜面切口(口上)	M127									
2	SK60	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	23	—	93.2	光沢無	E111									
3	SK61	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	252	25	—	612	E112									
4	SK62	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	23	—	470	光沢無	T111									
5	SK64	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	20	—	400	光沢無	T116									
6	SK68	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	21	—	11	276	M127									
7	SK61	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	22	—	11	1170	E114									
8	SK64	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	22	—	11	1170	E114									
9	SK63	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	22	—	900	光沢無	M133									
10	SK65	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	21	—	250	斜面切口(口上)	T117									
11	SK67	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	21	—	900	光沢無	E115									

第38回

1	SK03	壁瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	18	—	900	丸孔3	M129									
2	SK04	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	18	—	280	光沢無	M132									
3	SK04	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	22	—	500	光沢無	T118									
4	SK04	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	20	—	900	光沢無	T118									
5	壁地盤	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	—	—	150	斜面切口(口上)	T120									
6	壁地盤	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	—	—	170	斜面切口(口方)	T121									
7	壁地盤	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	25	—	240	光沢無	Q94									
8	壁地盤	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	25	—	295	光沢無	N76									
9	壁地盤	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	22	—	640	斜面切口 中凹の壁	E116									
10	壁地盤	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	18	—	50	光沢無	E117									
11	壁地盤 土塁壁等	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	18	—	300	光沢無	N77									
12	瓦	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	25	—	620	光沢無	Q93										

第10表 土人形觀察表

番号	通称	種類	高さ	幅さ	奥行き	脚	頭部	手	足	腰	背	頭部	胸	腰	足	腰	頭部	胸	腰
----	----	----	----	----	-----	---	----	---	---	---	---	----	---	---	---	---	----	---	---

第39回

1	SK09	土人形	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	34	25	—	—	—	—	7,598.7 直角	在場	神社・寺社	合掌式	E33			
2	SK45	土人形	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	43	18	—	—	—	—	12,987.4 直角	在場	神主・神使	坐姿	E45			
3	壁地盤	土人形	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	67	38	—	—	—	—	7,598.7 直角	在場	男性	坐姿	N49			
4	壁地盤	土人形	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	68	21	—	—	—	—	7,598.7 直角	在場	女性	坐姿	T49			
5	SK09	土人形	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	55	12	—	—	—	—	12,987.3 直角	在場	神音	坐姿	E51			
6	SK08	土人形	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	55	12	—	—	—	—	7,598.7 直角	在場	坐姿	坐姿	E52			
7	SK47	土人形	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	42	9	—	—	—	—	12,987.2 直角	在場	神使	坐姿	E48			
8	SK01	土人形	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	44	26	—	—	—	—	7,598.7 直角	在場	神使	坐姿	Q65			

第11表 石製品觀察表

番号	通称	種類	高さ	幅さ	奥行き	重量(g)	色調	備考	支番号
----	----	----	----	----	-----	-------	----	----	-----

第40回

1	SK10	砾石	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	25	8	7	3.5	7,597.1 直角	在場	砾石	下灰	M108			
2	SK47	砾石	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	36	81	43	140	12,987.1 直角	在場	砾石	下灰	M103			
3	壁地盤	砾石	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	120	64	18	395	7,597.1 直角	在場	砾石	下灰	T127			
4	壁地盤	砾石	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	21	5	4	4	7,597.1 直角	在場	砾石	下灰	T124			
5	壁地盤	砾石	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	21	5	3	4	7,597.1 直角	在場	砾石	下灰	T125			
6	壁地盤	砾石	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	21	5	4	4	7,597.1 直角	在場	砾石	下灰	T126			
7	壁地盤	砾石	NA	SYW-7 屋根	(150) 直角	160	57	32	360	7,597.1 直角	在場	内側加工	下灰	E119			

第12表 木製品観察表

番号	構成部位	種別	法面 A	法面 B	法面 C	背面	裏面番号
第42回							
1	SK04	板状	187	38	5		E126
2	SK04	板状	187	38	5		E127
3	SK04	板状	77	22	9		E128
4	SK04	板状	105	20	12		E129
5	SK04	板状	36	10	6		E129
6	SK04	板状	227	13	8		E129
7	SK04	柱	53	26	16	一般加工面有	E132
8	SK04	柱か	58	43	43	一般加工面有	E131
9	SK06	板状	109	55	3		N01
10	SK06	板状	34	44	3		T131
11	SK06	板状	111	24	3		T133
12	SK06	板状	126	19	3		T132
13	SK06	板状	(107)	66	4		T134
14	SK06	板状	129	44	10		T135
15	SK06	板状	219	34	11		T136
16	SK06	板状	203	23	3		N02
17	SK06	板状	(162)	24	7	穿孔3・木印2個	N03
18	SK06	板状	236	26	17		N05
19	SK06	板状	(127)	11	11	打穴6	N04
20	SK06	ハサカ	176	54	8	穿孔7	E142
21	SK06	漆面糊	114	80	49	内面赤字 背面黒	E141
22	SK06	内板状	38	89	6		E143
23	SK06	下駄	237	77	37	高さ: 高さ117 幅広: 幅(26)	M113
24	SK06	下駄	230	79	41	高さ: 高さ117 幅広: 幅(26)	T149
25	SK06	下駄	(190)	43	28	高さ: 高さ(94) 幅(17)	M114
26	SK10	内板状	96	170	4		T148
27	SK10	内板状	108	170	3		E140
28	SK10	内板状	(175)	167	6	打穴2	E136
29	SK10	内板状	(165)	160	8	打穴2	E135
30	SK10	内板状	(180)	167	7		T147
31	SK10	板状	(141)	28	9	穿孔1	E139
32	SK10	裏	(190)	8	5		E138
33	SK10	板状	368	39	18		N06
34	SK10	下駄	142	80	24	穿孔3 裏面	E137
第44回							
1	SK03	内板状	(136)	515	13		T150
2	SK05	板状	(162)	46	7		T158
3	SK05	板状	(220)	28	10		T157
4	SK05	裏	(228)	(6)	(6)		T160
5	SK05	裏	(198)	(5)	(6)		T161
6	SK05	不平	339	31	10	右側面凹のミタニ	E140
7	SK05	漆面糊	—	(54)	(27)	内面赤字 外面黒度 内面立柱 黑(裏)	N01
8	SK05	漆面糊	—	60	(48)	内面赤字 外面黒度 内面立柱 黑(裏)	N02
9	SK05	内板状	(97)	(26)	(6)		T158
10	SK07	漆面糊	—	82	(80)	内面赤字 外面黒度 内面立柱 黑(裏)	E140
11	SK06	板状	(85)	26	5	穿孔1	E123
12	SE03	板状	1013	155	23	打穴6	M136
13	SE03	板状	(195)	52	6	E174	Q01
14	SE03	板状	210	96	25		N07
15	SE03	板状	(651)	85	71		N07
16	SE03	柱か	713	80	52		E124
17	SE03	板状	(320)	35	14		Q01
18	SE03	内板状	181	(80)	13	側面刷毛床底層	M138
19	SE03	内板状	65	42	4	白色材質物	M139
20	SE03	内板状	(121)	(40)	4		M140
21	SE03	縞物状	157	(46)	6	側面刷毛	M140
22	SE03	縞物状	158	59	7	側面刷毛	M140
23	SE03	縞物状	159	50	7	側面刷毛	M151
24	SE03	縞物状	158	46	6		M147
25	SE03	縞物状	158	(34)	5		M148
26	SE03	洋絨	(185)	89	44		M152
第45回							
1	SE03	漆材	(861)	96	16	鏡打1	M157
2	SE03	漆材	(860)	91	95	加工面有2	T130
3	SE03	漆材	(870)	85	78	加工面有2	Q07
4	SE03	漆材	373	72	79		E160
5	SE03	漆材	(130)	80	33	加工面有2	T128

番号	構成 部位	種別	法面 a	法面 b	法面 c	備考	支綱 番号
6	SE03	梁材	(40)	91	19	加工面有り	M136
7	SE03	梁材	(40)	122	55		M135
8	SE03	梁材	40	42	30		E122
9	SE03	梁材	(27)	95	92	加工面有り	T129

第46図

1	SE03	合材 (透板)	40	415	75	脚E7 木口打 鋼钉穴3 木口打 井戸側に転用	T137
2	SE03	合材 (透板)	40	513	80	脚E2 木口打 井戸打 木口打 木口打 井戸側に転用	N80
3	SE03	合材 (透板)	(40)	(415)	70	脚E2 木口打 木口打 木口打 木口打16 井戸側に転用	M134

第47図

1	SE03	合材 (透板)	37	720	64	脚E2 木口打 鋼钉17 木口打 木口打 井戸側に転用	E138
---	------	------------	----	-----	----	-----------------------------------	------

第48図

1	SE04	横側板	(76)	186	20	井戸 板を転用し井戸材として使用している	M144
2	SE04	横側板	(76)	173	24	井戸 板を転用し井戸材として使用している	Q98
3	SE04	横側板	(89)	85	17	井戸 板を転用し井戸材として使用している	M141
4	SE04	横側板	(75)	196	22	井戸 板を転用し井戸材として使用している	Q99
5	SE04	横側板	(88)	137	25	井戸 板を転用し井戸材として使用している	M142
6	SE04	横側板	(34)	65	21	井戸 板を転用し井戸材として使用している	T139
7	SE04	横側板	(44)	188	24	井戸 板を転用し井戸材として使用している	T138
8	SE04	横側板	(68)	133	23	井戸 板を転用し井戸材として使用している	M140

第49図

1	SE04	横側板	(76)	162	25	井戸 板を転用し井戸材として使用している	E112
2	SE04	横側板	(76)	158	26	井戸 板を転用し井戸材として使用している	M143
3	SE04	横側板	(77)	122	30	井戸 板を転用し井戸材として使用している	T140
4	SE04	横側板	(68)	81	208	井戸 板を転用し井戸材として使用している	T142
5	SE04	横側板	(68)	123	22	井戸 板を転用し井戸材として使用している	T141
6	SD04	内傾板	(115)	(86)	3		N89
7	SD04	内傾板	(87)	(93)	4		N80
8	SD04	内傾板	(42)	(22)	3		N91
9	SK07	板状	(254)	45	6		N88
10	SK07	板状	(107)	18	6		N87

第13表 出土瓦計量表 (单位:g)

第5章 総括

第1節 絵図からみた調査区の履歴

金沢城下町遺跡(兼六元町7番地点)が所在する地区は、調査地となった小学校の旧名が示すとおり、古くは味噌藏町と呼ばれていた区域である。由来は慶長・元和期に当地に軍備貯蔵用の味噌藏が置かれていたことに起因しているといわれており、場所は九人橋筋の奥村屋敷の場所とされている。延宝8年(1680頃)の御家中古分限帳に被記載者の邸地として味噌藏の名が見られるが、前後に成立した延宝金沢図には施設としての味噌藏の記載は既にない。

ここでは、絵図等を用いて調査区における現在までの土地利用の変化を追う。資料として用いたのは延宝金沢図(1673～1681、石川県立図書館蔵)、金沢図(1751～1772、金沢市立玉川図書館蔵)、金府大絵図(1843頃、同)、金沢町絵図(1868、同)、金沢市街図(1921、同)である。

藩政期において味噌藏町は一貫して武家地であり、当調査区周辺には150石～500石の禄を有する平氏が居住していた。金沢は大戦時に空襲を受けていないため、藩政期の街区区画が現在にまで引き継がれている箇所が多く、当地もこれに該当し、数多く残る藩政期～近代の絵地図上での調査地の比定が可能であった。延宝金沢図は各居住地の間口、奥行の情報をもつ絵図であり、現在の区画と比較し同一と考えられる区画に記載されている間数を足し込むと京間(1間 = 6尺5寸)で289.82m、越前間(同6尺3寸)で279.85m、江戸間(同6尺)で266.91mであった。測量による実測値は約280mであり、越前間の寸法と合致する。江戸本郷郷における近世遺構についても、17世紀代に比定される遺構の多くがこの尺度を採用していることが知られており、延宝図記載の寸法は越前間である可能性が高い。

これを踏まえ、計測した寸法と調査区の座標値を基に延宝金沢図に調査区の位置を落とし込んだものが第50図上の図である。これによると調査区は武家地3軒に跨がっており、調査区北寄りは沢田次郎右衛門、中央は服部少兵衛、南寄りは小塚善左衛門と読める。小塚氏の南隣には沢田権之丞の屋敷があり、以後明治初年に至るまで、これら2軒の沢田氏の屋敷位置は変わることがないため、調査区の位置は各年代を通じて比定が可能である。

延宝金沢図で調査区北寄りに位置する沢田次郎右衛門は山賀野弥右衛門系で、沢田氏を称し禄4000石で前田利長に仕えた次(治)左右衛門長政の系統である。禄500石の馬廻組で、以後源大夫長宥・治兵衛長与・弥左衛門豊強と続く。弥左衛門のとき改易され250石となり、以後一貫する(第50図上の図では津左衛門)。同じく調査区中央は服部少兵衛の邸地である。寛文7年絵図(石川県立図書館蔵)では勝兵衛、御家中古分限帳では味噌藏町服部庄兵衛とあるが同一人物と思われ、200石を禄する射手組である。元は沢氏を称し、子の五右衛門のとき加増され300石となり、以後覺兵衛宗春・琢左衛門宗恒・紋大夫・弥六和恒・清左衛門・琢左衛門・幸三郎嘉勝・錠次郎信綱と続く。宝暦・明和期には既に服部氏の名は見えず、大火後の宅地替えと思われる。調査区南寄りを占めるのは小塚善左衛門で、名は秀成である。元禄6年(1693)侍帳に「ミそくら町奥村市郎右衛門末」として名前が見える。元禄9年(1696)馬廻近習番として200石を禄し、同年加増され350石となるも、のち閉門、流刑となり召放されている。子甚五左衛門秀興は宮腰御材木奉行200石、以後斎宮行正・甚右衛門秀易・与平秀一と続く。宝暦・明和期の絵図に名はなく、明地(空地)となっている。

宝暦・明和期の絵図から元服部氏の敷地に名が見られるのが横山氏である。絵図に見える横山久左衛門は延享3年(1746)書物役として諸頭系譜卷第八上に名が見えるが、詳細不詳の人物である。以後明治初年まで同地に横山氏の名が見え、天保14年頃の金府大絵図では敷地境が確認できることから、

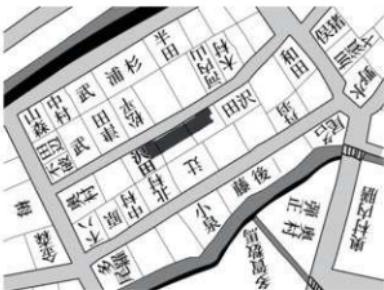


延宝金沢図 延宝年間(1673~1681) 石川県立図書館蔵

凡例(各図共通)	△
調査範囲(推定)	■
道	■
水路	■
土居	■
町家	■



金沢図 宝暦・明和期(1751~1772) 金沢市立玉川図書館蔵



金府大絵図 天保14年(1843)頃 金沢市立玉川図書館蔵



金沢町絵図 明治初年(1868) 金沢市立玉川図書館蔵



金沢市街図 大正10年(1921) 金沢市立玉川図書館蔵

第50図 絵図にみる本遺跡調査区周辺

幕末の段階で隣の明地を合算したものと考えられる。

廃藩後は武家の邸宅は悉く取り壊され、味噌蔵町は活気を失う。その跡地に明治39年(1906)、味噌蔵町小学校が設立された。大正10年(1921)金沢市街図によれば、旧校舎は今回調査範囲と重なって配されており、調査ではこの煉瓦造の基礎が検出されている。

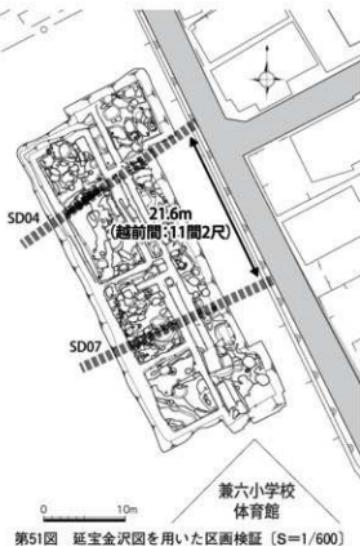
第2節 遺構の変遷

近世以前の遺構としては、1-③区で古墳時代前期の土師器が出土したSD01がある。調査区南壁から西壁にかけて緩やかな弧を描き流れており、平地式建物の周溝とも考えられる。地形が調査区から北東に向けて低くなることから、当該期集落は南西方に向広がることが想定できよう。

近世においては絵図の検討で示したとおり、調査地周辺は藩政期を通じて一貫して武家地であり、大火前後の配置替えは認められるものの、区画割は3区画を基本とし、大きな変化はない。今回の調査では区画を示すものとして石組み蓋付の溝であるSD04が挙げられる。主軸方位は絵図に見える区画のそれと合致しており、延宝金沢図における沢田次郎右衛門と服部少兵衛の宅地境を示すものであろう。そこから南へ約20mの箇所には拳大の礫を多量に含むSD07が直線の溝状に走っており、これが延宝金沢図での服部少兵衛 - 小塚善左右衛門間の境界を示すものと考える。検出状況から土塀の基礎である可能性が高い。SD04と比べて主軸をやや東に採るが、延宝金沢図に見える服部少兵衛敷地の背割寸法距離が正面に比べて1間狭くなっていることから、区画割そのものが方形を基準としているものでない可能性が高い。また、第51図に示したとおり、この二つの遺構を前面道路側に延伸させ、その交点間の距離を計測したところ21.6mとなり、越前間での計算において絵図記載寸法と合致している。これら二つの区画境は藩政期を通じて受け継がれてきたものと考えられ、今回調査の基準線ともいえる遺構である。SD07はSK85を切ることからも年代としては18世紀後半以降のものと考えられるが、前述した理由から、延宝期、おそらくはそれ以前からの区画境の線形を踏襲しているものと考えられる。

第52図は年代別の遺構配置図である。宝暦8年(1759)に発生した大火を基準として、それ以前と以後を比較する資料として作成した。本来ならばさらに細かい年代に分けるべきであるが、紙幅と能力の都合ということでご容赦願いたい。調査区は前面の道との高低差があるものの、絵図記載の情報等から敷地の正面を占める範囲と考えられる。検出した遺構の中に建物跡などは認められず、植栽や井戸等を備えた前庭的な空間が広がっていたものと推察される。

17世紀～18世紀前半の遺構は、被焼した陶器とともに石片・瓦片を多く含む、いわゆるゴミ穴が多い。宝暦の大火によって焼損したものを廃棄したものと考えられる。1-①区で検出した土坑群からは未加工の石や瓦類の出土が多くみられ、特に腰瓦の出土は全体の実に84.5%が北寄りの1-①北区、2-③区から出土しており、特異な様相を示している。これら調査区は調査範囲のなかでも石高



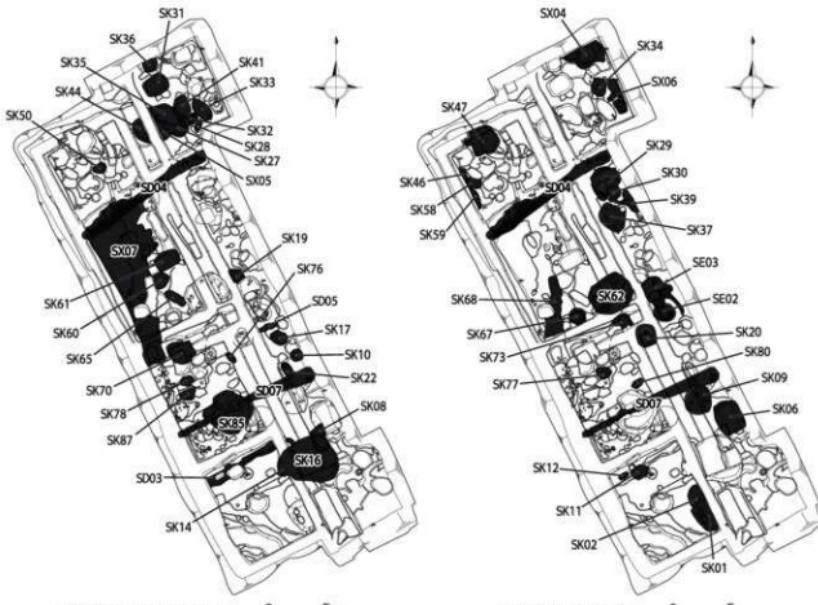
第51図 延宝金沢図を用いた区画検証 [S=1/600]

の高い敷地を構成する区画であり、腰瓦を使用するような建造物を有していた可能性も指摘できようか。不整形な SX07 も焼損後の整地造成と理解してよからう。敷地境界である SD07 と重なって存在する SK85 は火災による敷地境の一時的な消失を示し、その南東にある SK16 は区画と並行する SD03 と一体として考えれば井戸及び水路であろう。SD03 の延長上に建物が存在するものと考えられる。

18世紀中葉以降では横山氏の敷地となった中央の区画に多くの井戸が掘られている。うち SE02 は石組みのものであるが、舟底板を転用した井戸枠をもつ SE03 によって北側半分は破壊されている。SE03 とそこから南西に向かって延びる溝状の遺構とはセットとして考えてよいであろう。このほかにも SK20・SK29・SK37など、深さが 1.5m を越える素掘りの穴が多く存在する。南の区画は一定期間明地であったが、幕末近くに横山氏の敷地となり、こちらにも SK01・SK09 といった井戸と思しき遺構が掘削されている。最終的に土塹として存在した SD07 の機能はこのときに失われ、明治に入ってしまらくの間に、沢田氏及び横山氏の屋敷は周辺に存在した武家屋敷群とともに取り壊され、その後、明治39年（1906）に味噌蔵町小学校がこの地に造成されることとなる。

以上、絵図による調査地の利用履歴の検証、検出遺構の変遷について述べた。当該発掘調査は、段丘縁辺部における古墳時代集落の発見とその分布の推定がなされたこと、近世においては検出された遺構の配置から武家敷地内における空間構成の一端が明らかになったことが成果として挙げられよう。絵図との比較からその変遷を追うことができる希少な調査であり、鍋島焼や腰瓦、舟底板などをはじめとする様々な出土遺物は、城下町の成立期から近代まで続く武家地における生活の様相を窺い知ることができる貴重な資料である。

（以上、景山）



17世紀～18世紀前半

0 5m

18世紀中葉以降

0 5m

第52図 金沢城下町遺跡(兼六元町7番地点) 遺構変遷図 [S=1/400]

第3節 鍋島焼について

1-①南区のSX01から出土した鍋島窯で焼かれた色絵の皿片(第30図13)について、遺跡を特徴づける遺物として若干補足しておく。

鍋島焼は佐賀の鍋島藩が17世紀後半頃に開いた磁器窯で、藩の特産品として大名家への献上品の高級磁器を焼いていたといわれている。本来なら大名屋敷、公家屋敷など位の高い階層の居住地から出土することが多い。

本遺跡出土の鍋島焼は、絵図によると150~500石程度の武家居住地から出土している。内面に染付で菊花を描き、その上から菊花や葉に色絵を施し、赤い渦巻文を所々に配置する図柄となっている。外面は染付のみで、おそらく七宝文が巡り、高台には柳目文が描かれている。「別冊太陽 古伊万里」には、渦巻の巻き方が少なめではあるが、伝世品として18世紀前半から中頃の同じ図案の色絵皿が「鍋島色絵蔓薔薇文皿」として紹介されている。また、東京都新宿区の三榮町遺跡(下級武士の敷地跡)から出土した、同じ図案で色絵が付けられていない染付のみの皿も「色絵生地鍋島皿」として掲載されている。

金沢市内では他に鍋島焼が出土した遺跡として、金沢大学埋蔵文化財調査センターが金沢大学附属病院宝町キャンパス調査地点で行った発掘調査がある。調査では300石以上の与力町跡地から鍋島焼の染付7寸皿の組皿(10枚程度)が出土している。報告では、鍋島藩から贈られた加賀藩の重臣がさらに下賜したものではないかとしている。

今回の出土品は、藩主や重臣から下賜された品である可能性もあるが、本遺跡が金沢城から東に約300mしか離れていない点や、出土遺構がSX01という不明確でいろいろな時期の遺物が埋土に混ざる遺構であることから、城内で発生した残土を整地土として搬入した可能性も十分にある。

第4節 出土瓦について

本遺跡から出土した瓦片は約800点あり、総重量は330kgを越える。重量を計測した結果は第13表出土瓦計量表のとおりであるので参考願いたい。

出土量は1-①北区、2-③区など、北の調査区ほど多い傾向があり、その構成は全体のおよそ84%が焼瓦で9%が赤瓦、7%が黒瓦となっている。種類は丸瓦、平瓦、軒平棟瓦、軒平瓦、棟瓦、雁振瓦、腰瓦、鎌平瓦、面戸瓦、道具瓦などに分けられた。また、焼瓦の種別をみると、平瓦、丸瓦に次いで腰瓦の出土量が多い。先にも述べたが、腰瓦の出土範囲は調査区北寄りに偏りをみせており、1-①北区及び2-③区で腰瓦全体の約84.5%を占めている。これら調査区には18世紀前半までのゴミ穴が多く確認されており、宝暦の大火に関連する大規模整地に関連していることも想定されようか。特異な出土状況であることは間違いない。

腰瓦は、金沢城においては櫓や長屋の扉などに使用されていたことが金沢城調査研究所の発掘調査により明らかになっている。しかし、これまでに金沢市が発掘調査をした近世遺跡から腰瓦が出土するのは大変稀有な事例であったことから、本当に150~500石規模の武家屋敷でも腰瓦が自由に使用されていたのか疑問に思った。これまでに解説されている文献史料には加賀藩が武士の階級によって居住地に瓦の使用を禁止するというお触れは残ってはいないし、本遺跡周辺の建築図面なども残っていないので疑問は残る。

第3節でも記述したように城の残土に混入したものが搬入されたものか、本当に本遺跡で使用されていた腰瓦であったのか真相は不明であるが、珍しい例としてあげておく。今後、金沢市内の城下町遺跡発掘調査で腰瓦が出土するかを見守っていきたい。

(以上、新出)

第5節 舟底板について

SE03から井戸枠転用材として出土した船関連遺物については、資料整理中に松井哲洋氏(関宿城博物館客員研究員・和船研究会会員・海事史学会会員)に実見していただく機会を得、数多くのご指摘をいただいた。また、廣瀬直樹氏(水見市教育委員会教育総務課主任学芸員)においても実測図及び写真をもとにいくつかのご指摘を得た。以下に、指摘内容について要約して紹介したい。

(1) 松井氏からのご指摘

- ・北陸の和船には①旧來のチキリを多用し、矧り抜き部を持つ「準構造船」のドブネやトモブトと、②矧り抜き部をもたない「構造船」である加賀テントなど、の2系統あることが知られており、出土部材の接合具や整形状況から、②であることが確認される。
- ・部材は船の航(カワラ)または敷(シキ)と呼ばれる船底部材である。
- ・両端の材が実矧ぎし中央の材が折れている三枚組の部材(第47図g~k)に関しては、船底の折腰部分に見られる仕口で、日本海側の船特有の接合技法である可能性が高い。通信省管船局明治35年発行の「大和形船製造寸法書」によれば、航(カワラ)は中航と両航の3材で構成され、北前船(日本海側の船)は中航を曲り材・耳航を実矧ぎとし、檜垣・櫓廻船(瀬戸内の船)は逆となる。実矧ぎ部の凸側のほうが船尾側の船航(トモガワラ)、凹側が前側の胸航(ドウガワラ)となる。
- ・北陸地方の造船固着技術のはばすべてを確認することができる。接合具には①チキリ、②平鎚(ヒラカスガイ)、③縫い釘(落とし釘)、④通り釘、が確認される。裏側にある2列の釘跡は⑤皆折れ釘(カイオレクギ)による「スペリ」材固着痕の可能性がある。
- ・通り釘の用法としては、①打ち込みのみ、と②尾返しをする方法(釘の先端部を折り曲げる)との2種類がある。船板上面に見えている長方形鉄部は尾返し釘の特徴である。他部材にある、はば長方形の埋め木の部分も、落とし釘の埋め木ではなく、通り釘の尾返しの埋め木かもしれない。釘の打ち込み方の詳細なトレースにより確認する必要がある。
- ・各部に漆が多用されていることが確認される。チキリ下部の接着や、接合部に充填されたマキハダにもウルシが使用されているようである。
- ・金沢21世紀美術館近くの茶室山字亭の腰板にチキリと落とし釘で接合された船板材が転用されていることを確認した。富山県高岡からの移築ということである。

(2) 廣瀬氏からのご指摘

- ・北陸の和船については、大正頃~昭和30年代頃の情報に比べて近世の情報は少ないため、興味深い。
- ・多様な接合技術がひとつの資料にまとまってみられ、船材接合方法の見本市のようである。①チキリ(鼓形の木製カスガイ)：日本海沿岸の造船技術の特徴、②縫釘(落とし釘)と釘隠しの埋木、③造船時の仮固定用の手カスガイの爪痕：接合面挟んで左右にある小穴で縫釘を打った後に取り外したもの、④平カスガイ：新造時ではなく、修繕時の可能性。
- ・三枚構成の板材(第47図g~k)のうち、gとjは板材が連続し、hとk、iはホゾ組みである。こうした接合は強度を持たせるために船大工がよく使う技術で接合部を互い違いにすることで強度を保つ。水見のテント船では、2枚構成の底板の屈曲部で、一枚はあらかじめ曲がった形にのこぎりで挽く「挽き曲げ」とし、もう一枚は屈曲を別材のホゾ接ぎで造り出している。3枚構成でも1枚だけ接がずに一本で造ったりする。
- ・本部材群が1艘分かそれとも2艘分かとの問題については、接合方法は多様ながら、写真や図で見

る限り同一個体(1艘分)でも違和感はないように見受けられる。

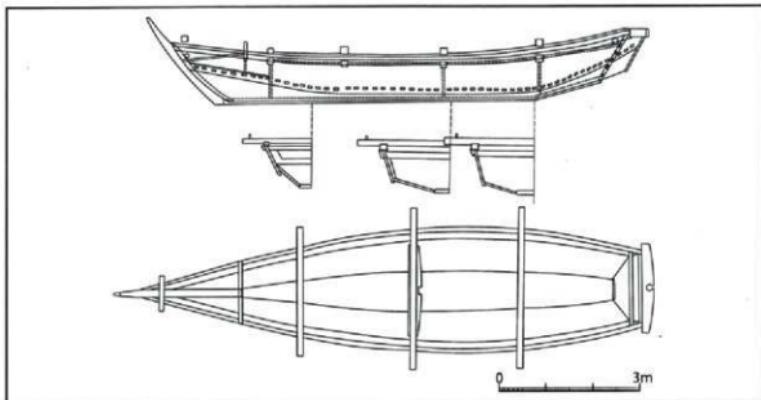
・本部材は川舟の底板もしくは、二枚棚構造(二階造り)の海船の底板の可能性を考える必要がある。出土地点(内陸で河川に近いこと)や底外面がフナクイムシの食害を受けていない点などから川舟の可能性もあるが、川舟としては板厚が厚すぎ、厚さのわりに狭い。ただし、富山県砺波郡の明治期の川舟(高瀬舟)には底板7.5cmという記録がある。金沢の川舟については手元に情報がなく、船形は不明。海船だとすれば、二枚棚構造の船、例えば能登外浦から加賀に特徴的な「加賀テント」などの底板である可能性がある。富山県新湊(現、射水市)の、10m前後の「テント」船が、船板の厚さ10cm程度、底板の幅は船首の細いところで15cm程度、中央で80cm程度、船尾で40cm程度と出土資料の法量に近い。

・以上により、二枚棚構造の船の底板の可能性が高い。漁船だと大型の部類、荷船だと小型の部類になる。荷船だとすると、例えば大型の弁才船の千石積みで船長30m程度になるが、本資料は10m程度のいわゆる小廻船(コマワリ・コマワシ)の可能性がある。

なお、松井、廣瀬両氏からは、多数の参考資料の提供をいただいた。「とやまの和船」においては入善町芦崎の網船(氷見市立博物館蔵)に底板にチキリ(当初)、スイクギ(修理)、平カスガイ(修理)がみられる二枚棚構造船があることや、砺波郡の川舟(高瀬舟・船長約13.2m)に底板厚約7.5cmのものがあり、材の接合にはチキリのほか六寸の縫釘、五寸と六寸の皆折釘を用い、接合部にはヒワダを込めた上からウルシで取り固めるなどが記され、各所に出土資料との共通点を見いだすことができる。

以上、両氏の指摘から、日本海側における近世期の船材資料は類例が少なく、近代以降の記録や類例から、出土資料は二枚棚構造船の船底材の可能性が高いということ、新造時と補修時という時間差がある可能性があるが、船材接合技術が多様で、随所に日本海側の造船技術の特徴をみることができることが特筆できよう。

(庄田)



第53図 新湊型のテント(「和船建造技術を後世に伝える会調査報告書 とやまの海と船」掲載図を転載)

【引用・参考文献】

- 氏家栄太郎著・八木田武夫編 1999 「金沢市街温故叢書 乾・坤」
- 川村紀子 2008 「大坂出土の土製品—大阪市内を中心として—」『関西近世考古学研究16 土人形が見た近世社会』
- 田川捷一編著 1995 「加越能近世史研究必携」
- 藤本強 1990 「江戸時代の基準尺度について」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 日置謙編 1956 「加能郷土辞彙」
- 水本和美 2010 「天皇と將軍の器」『季刊考古学第110号 幕藩体制に関わる近世陶磁器』
- 宮本雅明 2015 「日本の城下町と金沢城下町—発展過程と空間類型—」『金沢城下町論集 第1分冊』
- 森田平次 1934 『金沢古蹟志』
- 石川県教育委員会 2017 『金沢市金沢城下町遺跡(東兼六町5番地区)』
- 石川県教育委員会 2014 『金沢市金沢城下町遺跡(丸の内7番地点)』
- 石川県姓氏歴史人物大辞典編纂委員会 1998 『石川県姓氏歴史人物大辞典』 角川書店
- 石川県金沢城調査研究所 2010 『金沢城跡石垣修築工事報告書－玉泉院丸南西石垣－』 角川書店
- 金沢市 1999 『金沢市史 資料編15 学芸』
- 金沢市 2004 『金沢市史 通史編1』
- 金沢市玉川図書館近世史料館 2013 『諸氏系譜 上』
- 金沢市玉川図書館近世史料館 2015 『諸氏系譜 下』
- 金沢市玉川図書館近世史料館 2017 『加賀藩侍帳 上』
- 金沢大学資料館 2015 『資料館×埋蔵文化財調査センター平成27年度特別展 加賀藩 与力 武士のはまれ』
- 氷見市立博物館 2015 『特別展 とやまの船と船大工—船が支えた人びとの暮らし—』
- 氷見市立博物館・和船建造技術を後世に伝える会 2011 『和船建造技術を後世に伝える会調査報告書Ⅲ とやまの和船』
- 氷見市立博物館・和船建造技術を後世に伝える会 2016 『和船建造技術を後世に伝える会調査報告書V とやまの海と船』
- 平凡社 1988 『別冊太陽 古伊万里』
- 平凡社 1991 『石川県の地名』

金沢城下町遺跡(兼六元町 7番地点)遺構平面図 凡例

本報告書で対象とした金沢城下町遺跡(兼六元町 7番地点)の遺構平面図を掲載する。

1. 遺構平面図のページ設定は北西より南東にかけてを行い、通し番号を付した。ページの配置については以下のとおりである。

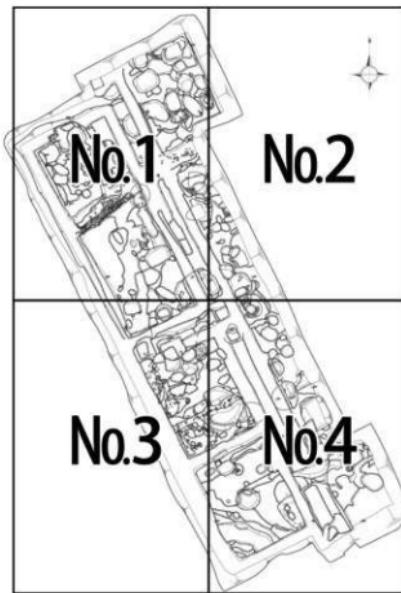
2. 遺構平面図は航空測量の成果を再編集し掲載した。掲載図版に関係する発掘調査における航空測量の実績については以下のとおりである。

平成23年度 日本海航測株式会社

3. 座標値は世界測地系2000に基づいた公共座標(MK-WE 座標系第VII系)に準拠しており、縮尺は1：100である。方位は各ページに図示している。

4. 図中50%濃度の一点破線で示されたラインは、調査が完了し施工業者に引き渡した後、貯留槽の施工中に海拔17.4mの高さにて確認された遺構のラインである。遺構確認の報告及び記録のための座標測定にご協力いただいた(株)リケンには、この場をお借りして重ねて感謝申し上げる。

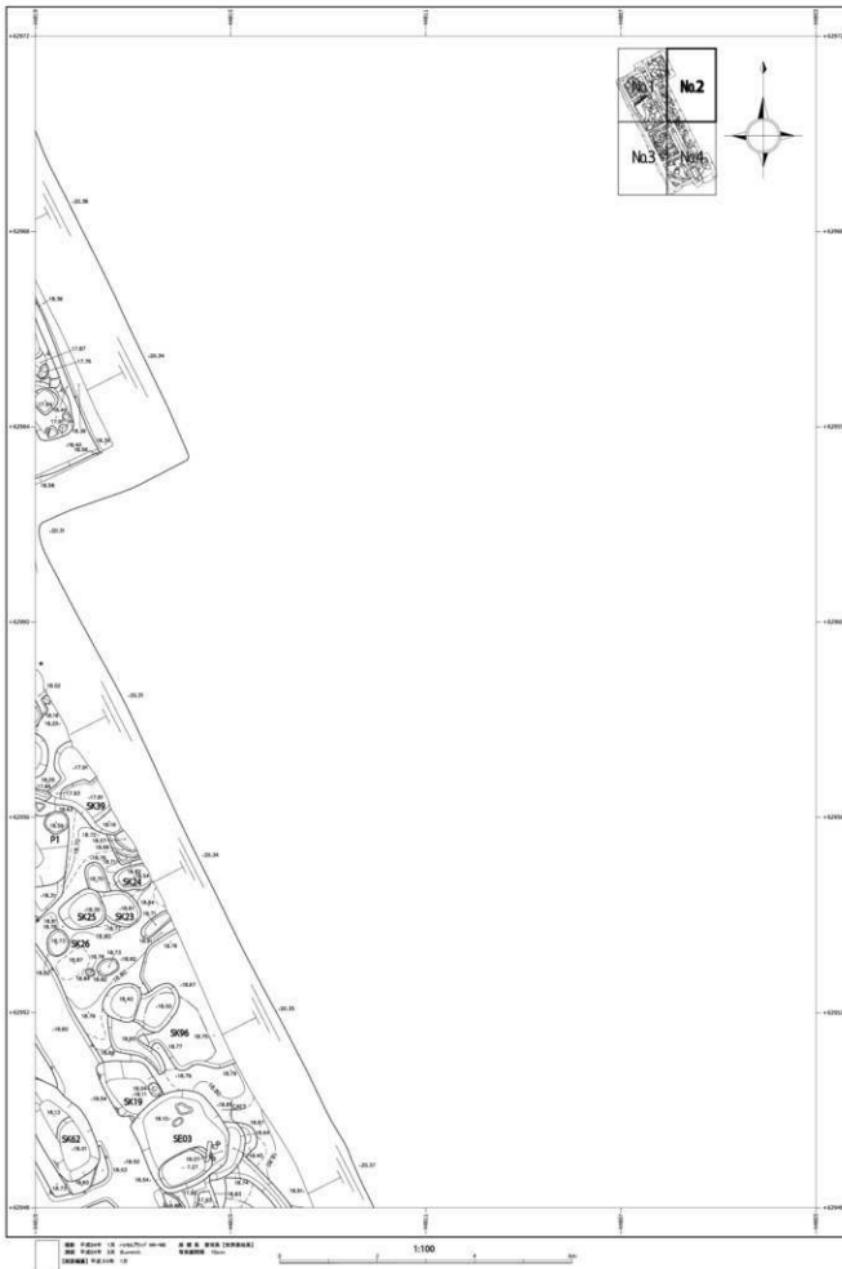
5. 主要な遺構には遺構番号を付した。



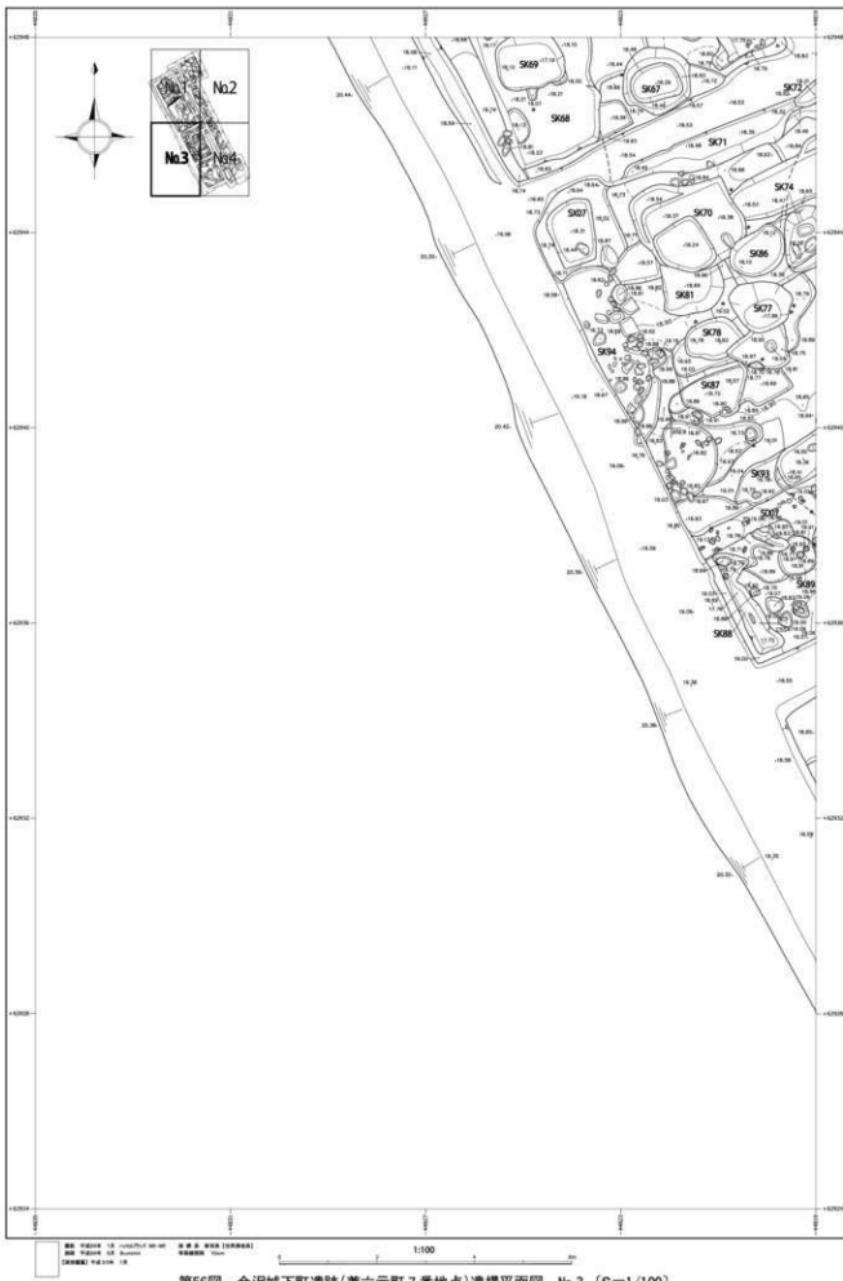
金沢城下町遺跡(兼六元町 7番地点)平面図 図葉割



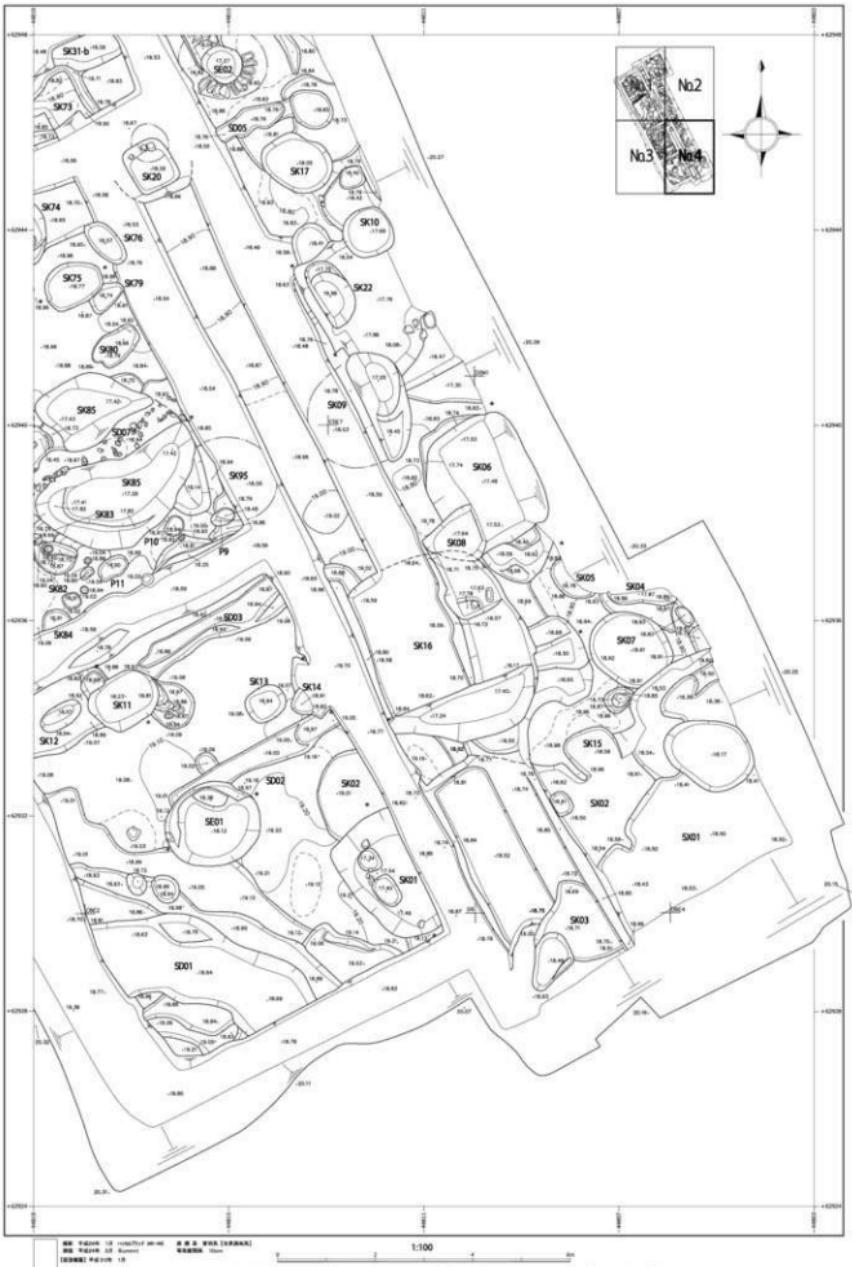
第54図 金沢城下町遺跡(兼六園7番地点)遺構平面図 No.1 [S=1/100]



第55図 金沢城下町遺跡(兼六園7番地)遺構平面図 No.2 [S=1/100]



第56図 金沢城下町遺跡(兼六園町7番地点)遺構平面図 No.3 [S=1/100]



第57図 金沢城下町遺跡(兼六園7番地点)遺構平面図 No.4 [S=1/100]



金沢城下町遺跡（兼六園7番地点）調査区オルソ合成写真〔右上が北〕



表土掘削状況（旧校舎の基礎がみえる 北から）



旧校舎基礎（北東から）



SK01（北西から）



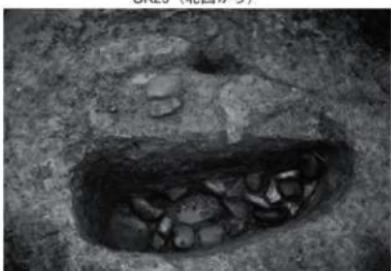
SK22（北東から）



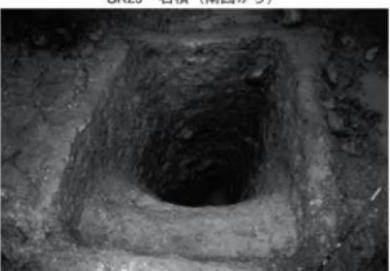
SK29（北西から）



SK29 石積（南西から）



SK31（南東から）



SK42（南東から）



SK46（南東から）



SK47（南から）



SK50（南東から）



SK54（南西から）



SK57（南西から）



SK58（北西から）



SK59（北東から）



SK60（南東から）



SK61（南から）



SK62（拡張前 南西から）



SK62（拡張後 西から）



SK67（南東から）



SK69（北東から）



SK69 下層 竹箱出土状況（北東から）



SK74・SK76（北東から）



SK77 断面（南東から）



SK77 完掘状況（北から）



SK79（北東から）



SK81（南東から）



SK83・SK82（南東から）



SK85（南西から）



SK91（東から）



SE01（北西から）



SE02（北から）



SE03 舟材（底板）軸用轍検出状況（南西から）



SE04 桶軸用轍検出状況（南東から）



SD01 土器出土状況（東から）



SD04（南西から）



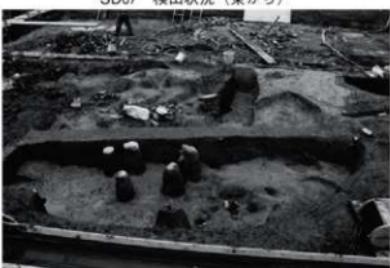
SD06（北西から）



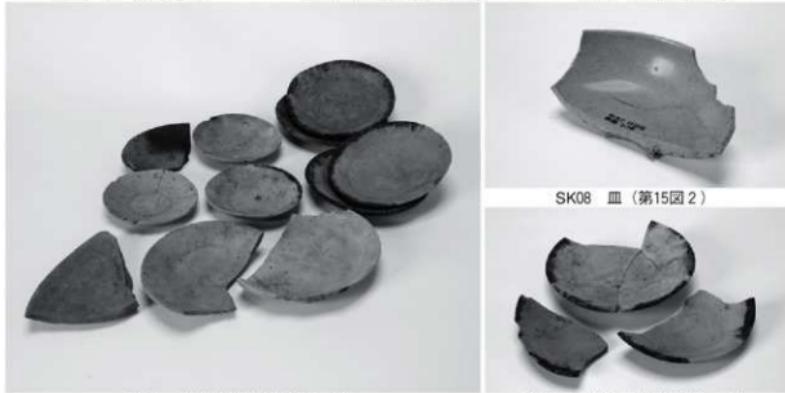
SD07 検出状況（東から）



SD07（南西から）



SX07（南西から）





SK09 碗（第15図7）



SK09 碗（第15図9）



SK10 盆（第15図16）



SK10 向付（第15図17）



SK10 土師器盆（第15図19～22）



SK10 火鉢（第15図23）



SK16 火入（第16図5）



SK20 合子蓋（第16図10）



SK20 鉢（第16図11）



SK20 水注（第16図14）



SK29 碗・皿（第17図8・12）



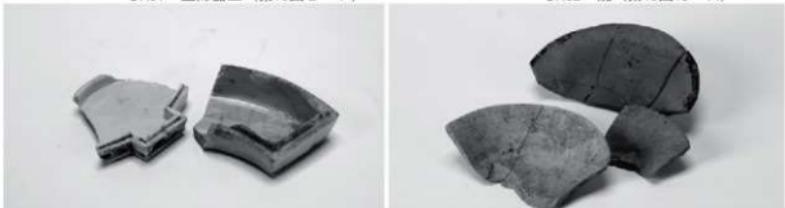
SK29 碗（第17図15～17）



SK31 土器皿 (第19図 2 ~ 7)



SK32 碗 (第19図15・14)



SK32 合子 (第19図 8 + 9)



SK32 土器皿 (第19図17~19)



SK32 碗 (第19図12・11)



SK33 土瓶 (第19図22)



SK31 碗・小杯 (第18図 4 ~ 11 + 13 + 14)



SK34 碗（第20図2）



SK34 盤（第20図6）



SK34 秉燭（第20図16）



SK35 盤（第21図3）



SK35 火入（第21図4）



SK37 碗（第21図16）



SK35 碗（第21図5～7）



SK35 土師器盤（第21図9～13）



SK38 碗（第22図2）



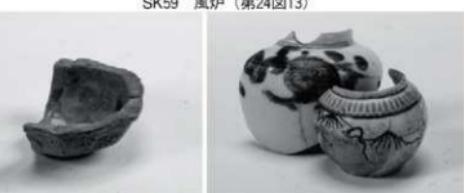
SK41 仏飯器（第22図12）



SK41 盤（第22図13）



SK41 土師器盤（第22図18）





SK85 盆（第26図11）



SK85 茶入・小壺（第26図13・12）



SK85 盆（第26図16）



SK85 火入（第26図18）



SK80 手水鉢（第26図4）



SK85 鉢 (第27図1)



SK85 土師器皿 (第27図5~13)



SE03 碗・小皿 (第28図6・7)



SD01 高杯 (第29図3)



SD01 踵形土器 (第29図11)



SD04 碗 (第29図13)



SD04 鉢 (第29図14)



SD06 すり鉢 (第30図3)



SX02 皿 (第30図5)



SX01 蓋 (第30図15)



SX01 碗 (第30図10・11)



SX04 小杯 (第31図12~17)



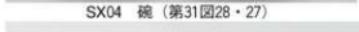
SX04 碗 (第31図19・21)



SX04 皿 (第31図23)



SX04 碗 (第32図3)



SX04 碗 (第31図28・27)



SX04 鉢 (第32図4)



SX04 火鉢 (第32図21)



SX04 焼塩壺・蓋 (第32図19・20)



SX04 土師器皿 (第32図10~17)



SX06 碗 (第33図5)



SX06 鉢 (第33図6)



SX06 すり鉢 (第33図11)



SX06 小壺 (第33図9)



SX06 土師器皿 (第33図21・18)



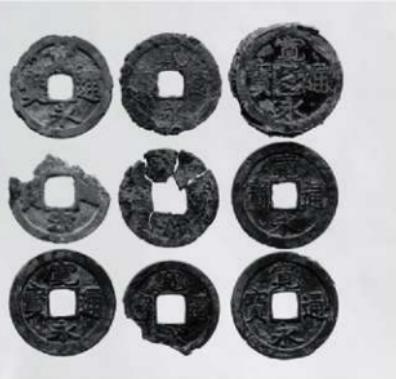
摂乱 土鍋 (第34図6)



摂乱 土師器皿 (第34図7)



貝杓子 (第34図8)



金属製品 錢 (第34図9~17)



金属製品 (第34図18~23)



金属製品 鉤類 (第34図24~39)



SK31 平瓦（第35図8）



SK32 腰瓦（第36図3）



SK61 丸瓦（第37図3）



整地層 軒瓦（第38図9）



SK88 軒棟瓦（第37図6）



整地層 軒平瓦（第38図10）



整地層 面戸瓦（第38図11）

瓦刻印



SK27（第35図2）



SK31（第35図5）



SK31（第35図6）



SK31（第35図7）



SK41（第36図6）



SK41（第36図7）



SK41（第36図8）



SK59（第37図1）



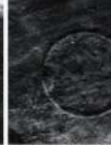
SK60（第37図2）



SK94（第37図8）



SX05（第37図10）



整地層（第38図5）



整地層（第38図6）



SK29 天神様（第39図1）



SK47 独楽・舟（第39図7・12）



SX01 舟（第39図11）



SX04 釜（第39図15）



SK47 印章（第40図10）



SX07・整地層基石（第40図15、第41図4・5）



SK30 溫石（第40図4）



SE03・整地層 砥（第41図3・1）



整地層 不明石製品（第41図7）



SK47 砥石（第40図11）



SK10・SK31・SK32・SD04・SX04 砥石（第40図1、5～9、12～14）





報告書抄録

石川県 金沢市
金沢城下町遺跡（兼六元町7番地点）
— 準用河川源太郎川雨水貯留施設整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —
〔『金沢市文化財紀要312』〕
平成30年（2018）3月28日発行

発行 金 沢 市
編集 金沢市埋蔵文化財センター
〒920-0374
石川県金沢市上安原南60番地
TEL (076) 269-2451
印刷 ソノダ印刷株式会社
〒921-8161
石川県金沢市有松4丁目3番26号
TEL (076) 247-5157